
MY LIFE OF SIMPLE

夜島 凜矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY LIFE OF SIMPLE

【ノード】

N8906D

【作者名】

夜島 凜矢

【あらすじ】

その辺にいるような高校2年生、凛矢^{（りんや）}。彼を中心にして少しづつ
変わった日常。そんな変わらないようで変わっていくSIMPLE
IFE（普通の生活）をどうぞお楽しみください……。

第0話・プロローグ 楽の中…（前編）

初めての連載です。

一応15禁つて感じで書くつもりです。（変わるかもしれないけど
…。）

下手な点もありますのでこりこりと意見などもお願いします。

m(ーー)m

第0話・プロローグ　夢の中…

少女がいた……。

向かい側には少年がいて砂の城を作ってる。その少女は微笑みながら砂の城作りに奮闘する少年を眺めていた。とても微笑みが似合う可愛い少女だ。

そんな事を思つていたら不意に少女が口を開いた。

『凛くん、いつか私をお嫁さんにして?』

『いいよ　なつちゃん』

『約束だよ?　はい、指切り』

少年は屈託の無い笑顔でそつと言つた。

『うん』

少年と少女は互いの小指を絡め合ひ、約束を交わした。

憶てる…。懐かしい公園、懐かしい空、懐かしいあの日、たしかこの約束から1週間後ぐらいに少女は引越した……。忘れるはずがない。僕の初めての恋だったんだから……。

少女達を見ながらそんな事を思つていた。

急に世界が少しづつ白くなつていぐ。夢の終わりを、新たな今日を告げるために…。

覚醒していく意識の中で、僕は少年と少女が付けている銀色の腕輪ブランチナをじっと見つめていた……。

これが日常……でも、その日常が少しづつ変わってきたことを
僕はまだ知らなかつた……。

【～～～ ～～ ～～～～ ～～】

携帯のアラームで俺は田を醒ました。

また、朝が来た。

変わらない朝。でも今日はいつもより気分がいい。懐かしい想い出
を夢に見れたから。

でも、今までそんな夢は見なかつたのに……なんかあるのか?
まあ、考えたところで分かるはずはないけど……。

「今日も学校か、めんどくせえ……」

そして、今日が始まつた……。

第0話・プロローグ　夢の中…（後書き）

今後ともよろしくです♪(^_-^)♪

第1話・田覚めと朝 幼馴染み…（前書き）

さて、第1話が完成しました。
まだ、どれぐらい書いたらいいかが定まらないのでたしょつかなか
つたり多かつたりするかもしれません。
それでは第1話どうぞ。

第1話・田覚めと朝 幼馴染み

「ふああ～～あ」

かなり眠い、いやマジで。

気分は確実にいい。なのに眠い。いや、むしろ気分がいいからこそ眠いのかもしれない。いや、きっと敷布団閣下と毛布王妃が俺を暖かい愛情で包み込んでくれるからだろ？。いやいや、もしかしたら昨日の夜更かしが原因？……ぐう…。

「起ツ キロー————ツ！—

【グシヤ、ドカバキボコバシバシバシバシバシバシバシバシ
バシ】

「おはよー 凜兄いー」

「ああ、おはよー、未来」

こいつは妹の夜島 未来。俺の一個下で今年から高校1年生になるピッチピチの新入生だ！しかもなんの因果か俺と同じ学校だ。まあ、今さらだが俺も自口紹介だ。俺は夜島 凜矢。まあ、ただの高校生だ、よろしく！

それより、なんか忘れてる気がする…………ピコーン！

「思い出したッ！未来ッ、テメエ殴つて起こしやがったな！……？マジで痛エんだぞ！？」

「だつて呼んだけど起きないんだもん！凛兄いが悪い！」

「ああ！？だからって実の兄を殴るとほい一度胸じゃねえよ……ごめんなさい……」

「分かればよろしい」「

いや、だつてマジで怖いし。口は笑つてんのに目笑つてないし。なんか挽き肉にするだつて感じの眼力（アイビーム 僕、命名）をひしひしと感じるし。たぶん目を合わせたら僕は死ねるかもしれない。「今日は始業式なんだから早く朝食食べよ？せっかく私が作つたんだし……」

そう、俺の家は今、俺と妹の二人暮らしだ。父親は仕事で地方を転々とし、母親はその付き添い兼仕事仲間だ。まあ、近くの時は3ヶ月ぐらいでヒヨロッと帰つてきたりするし、不定期だがメールもきてたりするし、仕送りもしてくれる、なんだかんだ言つていい両親つて事だな。

変わり者ではあるが……。

「凛兄いーっ、早くーっ！」

「今から行くー！」

さてと考え事しながらでも着替えひやつたしそうそう行くか。時間もヤバいし。

「おつと、忘れるといだつた

ドアノブをひねりかけて大事な物が無いことに気付いた。

「「ひれだけは忘れなこよつにしなことな

左腕にその銀色の腕輪をはめて一階に向かった。
ブレスレット

「セイ、そろそろ行くか

未来が毎日作ってくれる朝食を感謝しながら食べ終わった俺はそろそろ学校に行こうと未来に言った。

「うそ、うだね 時間もキツくなってきたし」「

さて、未来の了承も聞いたし、マジで行くか。

家を出た時、ちょうど前の家から女の子が出て来た。

「おはよ、凛矢」

「ああ、おはよー麻美」

この活潑そうなショートヘアの女の子は穂村 麻美ほむら あいみだ。小さい頃から俺の家の前に住んでいてまあいわゆる幼馴染みだ。けっこう可愛い顔をしてはいるからかなりモテはするんだが、いかんせん……ジジー……。

「何、胸見てんのよッ!」

「いや、胸が無いなって……ボコッ」

「大きなお世話よッ！」

殴られた。そんなに氣にしてんのかな？まあ、小さいよりは大きい方がいいが、小さいには小さいなりに長所と言つものが……

「なにニヤニヤしてんのよ…」

「いや、小さい胸も可愛いげがあつていいなって思つて。」

「な、なななに言つてんのよッ！変態ツー！」

【ボスボスボスボス】

「痛ツ！わ、悪かった、俺が全面的に悪かったからツー！」

「分かればいいのよ……分かれば……」

まったく、褒めたのに普通は殴るか？まったくもつて意味が分からん。

「はあ、さつさと行けづぜ？未来、麻美」

「了—解ツ」

「わかつたわよ……もう…」

そして俺達はいつもの通学路を妹も含めた三人で歩くのだった。

三人で学校に向かってると、曲がり角につつ立つていてよく見知った人物を発見した。

「よッ、直樹。何やつてんだ？」

「この名前は姫宮直樹、高校に入ったすぐに一番最初に話かけてきやがった奴だ。しかも、この顔がイケメンの割に『俺は絶対エロゲの主人公的男になる…』とかほざいてる変態だ。そのせいでまつたく女子にモテない。もつたいない奴だ…」

「あ？…ああ、なんだ凜矢か。何してるかって？見て分かんない？」

「曲がり角でキヨロキヨロしてるとしか分からんが？」

実際、ここにはキヨロキヨロしてた。もし俺じゃなくて別の誰かだったら捕まってるな確実に。

「で？何してんだ？遅刻するぞ？」

「ここから学校まではそんなに離れてはいけないが時間が時間だけにそこまでゆっくりはしていられない。」

「はあ、コレだから凡人は困る…待って、謝るから殴らうとしないで」

「こいつに凡人とか言わるとかなりムカつく。と言つよつこいつにバカにされるとかなりムカつく。」

「で？何やつてたんだ？」

「はあ、今日は何の日だ？」

「今日？今日は…」

「今日は始業式だよ～」

未来が先に答えてしまった。まあいいけど……。

「そう！その通りだよ未来ちゃん！今日は新学年の始業式、新学年の始業式と言えば、出会いだよ！…」

「「「出会い？」」」

「そう、新学年の始業式と言えばエロゲの王道！遅刻しそうな美少女と曲がり角でぶつかるハプニング！なぜか怒られて、知らぬまいなくなってる謎の美少女！そして朝のホームルームで再会する二人！そして始まる一人の恋！そして築きあげるハーレムアイ…」

「遅刻しちゃうしそうそろこんなバカ置いてひとつと学校行こひ、未来、麻美」

いたむかこいつのバカさ加減に疲れを憶えた。

「ア）解ツ、聞いてて疲れるしね」

「うん、こんな変態にかまう必要はないって、ホントに呆れるほど救いようの無いバカさだよ…」

「一人とも同じ」と思つてたらしい。当たり前だが…。

【ボッヂ】

麻美がバカを殴つてから俺の隣に来た。

「しかし、ホントに遅刻しそうだな？まあ未来、時間大丈夫そう？」

「うーんと、まあ大丈夫かな。…………」のまま平和に行けば…。」

なんだ、その間は…。

【タツタツタツタツタツタ】

「わーツ、ビーイーーツー！」

なんだ？誰かの声が聞こえた気が…

【ドシンシ】

「「痛ツ…！」」

「「あ～～あ、やつぱり」「」

女の子がぶつかってきやがつた。まあ、俺はそんなに痛く無かつた
んだが……。

なんで痛ツつて叫んだかって？……ノ・リ・さ

うん、けつこう可愛い女の子だな、背も小さいし小動物みたいだ。
リボンからすると一年か。俺の通つ高校は、学年によつて女子はリ
ボン、男子はネクタイの色が違つ。

「こつこつ

「大丈夫か？怪我は？」

「えつ？あ、はい、あつません……こつ…」

「やつぱり痛いんだり？見せてみ？」

「えツ！？い、いや、いいです、けつこうです、大丈夫ですか、
それじゃツー！」

女の子はシユタツて疑問符が着きそつながらこの速さで駆けて行つ

た。

「あつ！ヤバつ！遅刻しそうだよ！？凛矢」

「マジか！？何時！？」

「今はね～8時20分だよ？凛兄い」

ここから高校まで10分ぐらい、ホームルームが始まるのが8時30分、でも、門が閉まるのは25分だから…残りは5分！？

「マジでヤバいじゃねえか！ダッショウだダッショウ…！」

「初日からダッショウなんてな～」

「うわっ、最悪だよもう…」

俺達はダッショウで走り始めた。

一人の変態バカを残して……。

-Naoki Hime miya -

「チクショーッ！なんでアイツがちやつかりぶつかってんだよーー
ツー！」

直樹が遅刻したのは言つまでもない……。

第一話・田覚ぬと朝 幼馴染み…（後書き）

感想等は作者の励みになるのでみなさうでゐるかぎり送つてください。

第2話・転校生ーー まさかな…（前書き）

なぜか3日がかかるつてもまだ朝なのだらう?

まあ、それはさておき

第2話どうぞ~

第2話・転校生！！　まさかな…

なんとか学校を遅刻せずに済んだ。俺が通うこの学校の名前は松浜学園。まつはまじま俺達が住んでいる松浜島の中心地近くにある島唯一の高校だ。島外の高校に行く人以外、ほとんどの人が通っている。と言つてもそんなに都会みたいにごつたがえすほど人は居ないからそこまでたくさんいるわけではない…。

生徒玄関に着いた俺達は未来とはなれて2年生の階へと向かった。

「今年は違うクラスかな？」

「ん~、さあな。でも、知らん奴が多いよりは知つてる奴が多い方が俺は嬉しいけどね」

「ふうん、ま、まあ私は今年ぐらい違うクラスもいいと思ひナビ」「はいはい、わかつたわかつた。とっとと見に行こ!せ、走って疲れてんだよ…」

そして俺達は人がひしめく掲示板前へと足を進めた。

「マジでじつたがえしつて感じだな。」

「そうね、なんとか見えない事もないけど…」

俺は軽く溜め息を吐いてから自分の名前を探した。

……ああ、あつたあつた。2 - Aか……知り合いはいるかな?

「あつ！私、また凜矢と同じクラスね」

「ん？ そうなのか？」

麻美の名前を探してみると確かに2・Aに名前があった。しかもだいぶ、去年同じだったクラスの奴もいるみたいだ。
うわッ、あのバカもか……

俺は今日の朝置いてきたバカの名前を見つけてしまった。つか、アイツはまだ来てないのか？

「そろそろ教室入ろうぜ？」

「あれ？ もつと見なくていいの？」

「まあ、お前がいるし充分だろ」

実際俺はそう思った。けつこう小さい時から一緒に居たからか最悪、同じクラスに知り合いが麻美だけでも寂しいとは思わない。
俺は麻美と一緒に2・Aの教室へと向かった。

教室の中はまあまあ人が居たが席はけつこう空いていた。この松浜学園はクラス替え後の席は自由なのだ。しかも奇跡的に窓側の一番後ろの席が空いていた。俺は一直線にそこに向かい、鞄を下ろして座る。ちなみに麻美は窓側から2列目の一一番後ろの席、つまり俺の隣に座った。俺はぼうくつと窓の外を見ながら、今日の夢の事、朝ぶつかつた女の子の事を考えていた。

「おはよー、麻美ツ！ ねつ、ビッグニュース聞きたい？」

声が聞こえて隣を見てみたら麻美の親友で同じ剣道部の今井 美香^{いまい みか}がなぜか嬉しそうに麻美に話かけていた。そういうや美香はそうゆう噂系の事が好きな女の子だったな。

「おはよー、美香。で?ビッグニュースって?」

「それがねつ、IJKのクラスに~つー!」

「IJKのクラスに?」

「…転校生が来るらしい……」

「え?」

「ちょっとヒーッ!私が教えようとしたのにーー!」

「…早いもの勝ちだ……」

このなんとも言えないクールなメガネは橋本^{はしもと} 和磨^{かずま}。知的でクール、しかも美形でなかなかにモテる、俺からしたら憎むべき敵だ[…]。

「…おはよう、凛矢……」

「ああ、おはよう、和磨。ところで、その転校生って?」

「なんでも、女の子らしいのよッ!」

「うしごつてやつぱ尊なのか?」

「いや、本当^{ほん}に詳^{くわ}しくは知らないがど^うじやの奴が職員室で聞いたそうだ……」

「へへ、可愛い子なの？」

「うんッ、美少女って噂ッ！」

「ふーん、そうなんだ」

「あれつ？ 凜矢くんは興味ないのツ！？」

「いや、興味はあるけどね……ちよつと……」

「…まあ、凛矢がそいつならいいが…気になる事でもあるのか…？」

「いや、まあ」

実際直感的にもしかしたら今日、夢に見たなつちゃんが転校するんじゃないとも思ったが、まさかなど結論づけてその仮説は考えない事にした。

しばらく話していくとチャイムがなりそれと同時に先生が教室に入つて来た。今まで騒いでいたみんなも先生の姿を確認するとバラバラと席に着いた。

「はい、んじやホームルーム始めるよ～。まずは私の自己紹介、私は桜井 桃華、よろしく～。それじゃ～、皆も自己紹介しといで～。」

「

廊下側からの自己紹介が始まった。

この先生またたりしてて、けっこアバウトな人だな。まあ、何は

ともあれ美人だ。明るい感じでナイスバディだし……つと、危ねえ見惚れそうだつたぜ。

そういうや、直樹の奴いないな。アイツ初日から遅刻かよ。と、運動場の方を見る。なんか先生に囲まれてる生徒がいるなあ。きっと門でも乗り越えたんだろうな。バカな奴、直樹でもやんねえよそんなバカな事。しかも、竹刀持つてんの生徒指導じやん、その生徒土下座してるし、竹刀で叩かれてるし。ホントのバカだろうな、あの生徒。

あ、逃げ出した…。しかも速いな足、砂煙まつてるし…。

面白いもんも無くなつたところで自己紹介に集中する。そろそろ俺の番か……。

俺は椅子から立つて言つた。

「私の名はムスク……じゃなかつた、俺の名前は夜島 凜矢です。
よろしく」

危ねえ、変なノリで危ない名前喋るとこだつたぜッ！

「それじゃ〜、一通り自己紹介は終わつたね〜、んじゃ次に転校ス

…「おつはよーっ！凛一矢ーくーん！」…

「だーっ！朝つぱらから人の名前を大声で呼ぶんじゃねえッ！…」

「いやさ〜、聞いてくれよ！遅刻しそうになつて門を乗り越えたらさ、生徒指導がいたんだよ〜！？マジで着いてないよね〜！土下座してんのに竹刀で叩いてさ〜あれば確実に体罰だよッ！…」

アイツだつたのかあのバカな生徒は…そりだよな、アイツ以上のバカなんていないよな…少しでもアイツじゃないと思った俺がバカバカしい……。

「……えへと、それじゃ姫宮君^{ひめみや}紹介^{じか}どうぞ～」

なつ、この状況で自己紹介を優先させるとは以外に健氣^{けなげ}なんだな。

「は～い、俺は姫宮 直樹だ。好きな物はりんご、嫌いな物は辛い食べ物だ。そして、俺の夢は…「は～い、時間無いからそこまでね～」「…グスン…」

今度は先生が話しを途中で遮った。なぜか誇らしい顔をしているのはきっと、田には田をでやり返す主義なんだろう…。遮られたバカも軽く泣いてやがる。

「それじゃ～、時間が無いんで先に進みますね～。今日から眞面目と一緒に授業を受ける転校生さんです。どうぞ～。」

そして、ガラガラと教室のドアが開きなんても美少女な女の子が姿を表した。

「うおおおおおおお～！」

男子共があまりの可愛^{かわ}いことに雄叫^{ゆき}びをあげた……マジでうつせえ…。

「初めてして、私の名前は転^{てん}校生^{こうせい}です」

「待ていッ！完ツ璧に嘘だろッ！～その名前はあツー…」

「え～ツ！嘘なの～ツ！？」

男共のさじがとんだ。

「マジで、そりゃうるさいだと思つてたのかよ…。こいつらはそんなにバカだったのか…。」

「『メンなさい。嘘です』」

女の子はまるで悪戯を見つかった悪戯っ子みたいにえへへっと笑つた。俺はその女の子の仕草を知つていた。小さい時に見た、あの悪戯っ子のような笑い方…。

「初めまして、私の本当の名前は柊 夏芽ひいらぎ なつめです。これからよろしくお願いします」

その女の子は今朝に見た夢の、なつちゃんその人だった。

「よろしくね、凛くん」

そしてまた少し俺の日常が変わるのだった…

第2話・転校生ーー まさかな…（後書き）

意見や感想をできるだけ書いてくれると助かります。
いろいろ参考にしたいんで…

第3話・屋上とサボ 美人発見！（前書き）

毎日更新を頑張り中です
やつと放課後になりました
直「まだ昼だけど…」「これからのお出番…。」…ごめんなさい。
それでは第3話どうぞ~

第3話・屋上とサボ 美人発見！…

俺は今走っている…。

そりやもう全速力で……。

なんですかって？

それはだな…

「テメエ…………」一つの間に夏芽ちゃんと仲良くなりやがったんだ――――ツ――――！」

とまあこんな感じで男共の醜い嫉妬心により、またもや走る羽田になってしまった。

「テメエ――ツ――朝は女の子とぶつかってやがったくせに、今度は転校生と知り合いだツ――？貴様は全男の敵だ――ツ――！」

「そうだ、そうだ――――ツ――！」

俺は振り返り様に朝の事を暴露しやがったバカに正拳突きを喰らわせてやった。

「テメエなんて…ぐぶしツ……！」

「……」

俺は他の野郎共が固まってる間にとつとと逃げる事にした。
そういうや俺の拳が直樹の顔にかなりめり込んだが大丈夫だったかな？

凛矢は逃げる事で精一杯で知らなかつた。直樹の顔が凛矢の拳により凹んでいた事を、そしてそれを見た他の全員が絶句し追いかけるのを止めた事を…。

「よしッ！追つ手も来てないし屋上にでも行くか…」

ん？始業式？そんなのはサボだサボ。

俺は屋上へと向かつた。

【キイ〜イツ】

多少錆びれたドアを開くとそこには待ち伏せていた野郎共がッ！
つて事もなく、かなり広い寂しい空間にいくつかのベンチがあるだけの全然面白くもなんともない空間があつた。

でも、俺はこの空間がけつこう好きだ。昔、誰かが飛び降りた…つてわけではないがほとんど人が来ない。俺もこの場所に来る時、今までに一度も人にあつた事はない。

そんな場所に入るビュウッと一陣の風が吹いてきた。

「え……？」

人が居た。腰まである黒髪、凛としたたたずまい、そしてぱつと見で綺麗だと分かる顔に特徴的な泣きぼくろ…かなりの美人だ…。

「誰…………ですか…………？」

「あ…………ワリイ。誰かいるとは思わなかつたんだ、委員長。」

この娘は神楽百合

去年も今年も同じクラスで去年は委員長をしていた。しかも成績優秀で人柄もいい、なかなかに凄い人だ。しかしこの間に此処に来てたんだ?

「なあ、いいのか?こんなとこに居て?」

「?……なんでですか?」

「なんであつて、お前はけつこうう真面目だから……。」

「たまには休憩も必要ですから……。」

「ん~……まあ、いいか。」

「一緒にサボしませんか?」

俺がサボるをサボつて言つのは百合が原因なんだ。まあ、余談だが

…。

「ああ、やせせりふうよ」

俺はベンチに座つている百合の隣に腰掛けた。

「しかし、此処に人が来るとは思わなかつた。」

「そうですか?他の人はともかく私はよく来ますよ?」

「そつなのか?初めて知つた。なんで今まで会わなかつたんだろ?」

「私がいつも、此処とは反対側の方に居たからですよ。」

「マジで？」

此処は扉を開いてずっと真っ直ぐ来た場所、此処の裏側だから扉のある場所の後ろか……そりや会わないわけだ。しかも俺は大半寝てるかボ～つとしてるし……。

「…クスツ」

「ん? 何笑つてんだ?」

「いえ、まだボ～つとしてると思つて」

「……もしかして、今までも何回か見てた?」

「ええ いつも寝てるかボ～つとしてたから、邪魔しちゃ駄目かなつて……」

「マジデスカ……」

「マジです」

最悪だ……人に寝顔とかは見られたくないなかつたのに……

「可愛い寝顔でしたよ?」

「死んでもいいですか……」

恥ずい、マジで恥ずい……。しかも的確に、その事を考えた瞬間に言

いやがつたから余計に恥ずいじゃねえか…。

「ふふふつ そんなに気にしないで、ね?」

「気に元気つけてば、そりゃ…」

「私は…好きですか?」

「えッ…?」

「ええつ…?好きつ…?」

「あッ…ちがッ…ね、寝顔がつて事です…!」

「あ、ああ。…わかつてん…。」

びっくりした。マジで面白かと思つた。まあ、寝顔でも百合みたいな美人に好きつて言われたらそりや嬉しいけどね…。

百合は耳まで真つ赤になりながら俯いてしまつた。
俺は話を逸らそうと百合に話しかけた。

「もうそろ戻るか?始業式もそろそろ終わるだんつし…。」

「あ、うん、うだな、委員長…。それより…今、タメ語で喋つて…た

「え?あ、うー、めんなれこつ…せ、やつぱり先に行つてますね?」

「え?あ、うー、めんなれこつ…せ、やつぱり先に行つてますね

…それじゃあ、また教室でつ！

「え、あ、委員長ツー！？お～いツー！」

行つちまつた…。そんなに俺へのタメ語は抵抗あるのかな？…ちょっとショックだ…。もし照れ隠しだつたとしたら…いや、無いか…俺なんかを好きな可能性なんて…

「俺もそろそろ戻るか…。」

俺は教室へと足を進めた。

俺が教室に戻つてきた時にはほとんどの人が戻つてきていた。百合もちゃんといふな。

「よう、サボりくん」

「よつ、和磨、どうだつた？校長の長話は

「…ああ、凛矢か…。…相変わらずの無駄話だつたよ…まったく…。…それより凛矢はサボつてたみたいだね…。」

「お～い、凛矢～？」

「まあ、さすがにあの長話は聞くだけ時間の無駄だしな。」

「…同感ではあるね…。…もつと皆の事を考えて欲しいものだよ…。…でも、凛矢も無駄に過ごしたんじゃない？…。」

「お～い！凜・矢・くんー？」

「いや、それほど無駄でもなかつたよ。いろいろと楽しかつた」

「しかとすんなあーッ！！」

「…そうちかに？……。…神楽さんとなんがあつたのか？……。」

「なあに！一ーッ！？今度は神楽さんだあーッ！？この女たらガスッ…。」

「ああ、まあな…でも、なんで？」

「ひざこからバカは殴つておいた。

「…いや、彼女も始業式に出なかつたからね……。…それに、いつもなら感想を聞いてもまあなだけで済ますからね……。」

「くそうシーなんでなんだッ！？なぜ、サボ凜矢のくせにこんないいおもいをおおッ！？」

【ドスッバスッガスッベキッピ――――――（残酷な表現によりかぶせます）バスン】

「…………。」

バカは確實に沈黙させた。

「で？何があつたのかを聞きたいのか？」

「…いや、そんな無粋なことはしないさ……。…それに、神楽さん

もなんだか嬉しそうだしね……。」「

「やつつか？まあ、それならそれで俺も嬉しいがな。」

百合の方を見てみると他の女の子と楽しそうに話していた。
ふと、百合と田が合つた。

彼女は目が合つと少しだけ顔を赤くしてすぐに逸らせてしまった。
うーん、やつぱりさっきのが影響しているのかな？

「はーい、皆席着いて~」

そんな事を考へてると先生が教室に入つて來た。

「ややつ……姫宮君~？こんなところで横になつてないでくださいね~

バカはまだ寝ていのらじい。

「ふああ~あ、良くなつたあ~。」

ホントに寝ていやがつた。つか、殴つたのに……こいつは不死身か？

「ねえ凛矢、始業式どこ行つてたのよ~？」

隣の麻美が話しかけてきた。

「ん？いつもみたいに屋上でサボしてた。」

「田舎は？確かに百合も始業式いなかつたけど…」

「ああ、委員長は屋上で俺と一緒に居たよ。軽く話してた…。」

「ふ、ふうん、そうなんだ。よかつたわね、百合と一緒にいれてツ
」

「何怒つてんだ?まあ、美人と一人つきりなんだから嫌なわきやな
いけどな…。」

「なによ、デレデレしてツ。変態ツ!バカツ!もう知らなイツ!」

なんなんだ?といった…。

今日は授業が午前だけしかない。

と意つ」とは部活に入っていない俺は速攻で帰れるわけだ。

「麻美はこれからどうすんの?」

「ん?今日から普通に部活だから一緒に帰れないわよ?」

「そつか…。」

「麻美ーツーちつとと行こーーツー

「わかったーツ、今行くーツー、とおりわけでじゅあね

「ああ、しつかりな。」

「?—解ツ

麻美は美香と一緒に部活に向かってしまった。

和磨でも誘つか? いないと思つけど…。

案の定、和磨の席には鞄は無く軽く見回しても姿は見えなかつた。まあ、アイツは放課後になつたらすぐいなくなるからな、用がある時以外…。

未来でも誘つて帰るか…。

「ねえ凛くん、一緒に帰らない?」

「ふえ?」

唐突な事に間抜けな声を出してしまつた。

「いや、せつかくまた会つたんだから一緒に帰りたいなつて」

「あ、ああ、いいよ。それじゃ、行こつか。」

「うんッ」

俺はなつちやんと一緒に家に帰る事にしたのだった。

第3話・屋上とサボ 美人発見！（後書き）

ふうなんとか頑張つてます
そろそろ1日ぐらい終わらせないと話が進みません（<ー>）
感想等よろしくお願ひします

第4話・再会の喜び　会えた事に感謝…（前書き）

わて、なんとか1日が終りました。
これからどうしたものか…。
これからも頑張って書くでよろしくです
それじゃ第4話じつ

第4話・再会の喜び　会えた事に感謝…

俺となつたやんは家に向かって歩いていた。

「 もうこや、なんで戻つてきたの?」

「 なに? 戻つてきほじくなかつたみたいな言ひ方ね。(一)ヤ(一)ヤ」

「 いや、えつと、もうこわけじや…。」

「 えへへッ、わかってる … 私が戻つてきたのはまたお父さんがこ
つちで働く事になつたからなんだ…。」

「 くえ、もうなんだ?」

「 うそー! またよひしきね 凜ぐん!」

「 ああ、(一)ヤ(一)ヤ(一)ヤ(一)ヤ」

俺達は互いに握手をした…。

「 あッ! まだそれ着けてくれたんだね!…。」

「 ああ。まあ、俺にとつては凄く大切な物だからね もうこいつなつ
ちゃんも着けてるみたいじゃん」

「 そりや、私の一番大事な物だもん」

「はははは」

「えへへへ」

俺達は懐かしさと嬉しさから互にに笑い合つた。

「あつ、やういえば……。」「

「ん? どうしたの? なつちゃん

「えつと、わ……そのなつちゃんは止めない、かな?」

「なんで?…」

「いや、嬉しいんだけど……久しぶりに聞くと凄く恥ずかしいんだよね……。」

「ああ、わかった。それじゃあ、名前で呼べばいい?」

「うん 出来ればそうして?」

「わかつたよ……、夏芽……。」「

「う、うん ありがと! 凜くん」「

- Natsume Hirata -

久しぶりにあつた凛くん。彼は凄くカッコよくなつていてびっくりした。

「わかったよ…、夏芽…。」

【ドキンッ】

胸が凄く高鳴る…。凛くんに名前を呼ばれただけで…「こんなことやめくなんて…。

「うん ありがと!凛くん」

「どういたしまして」

【ドキンッ】

…また…。そんな笑顔で微笑むから…また、胸が高鳴つて…苦しくなる…。

不思議な感じ…。今まで感じた事なかつた…。凛くんだから感じるの?この苦しいはずなのに全然苦じやない不思議な感覚…。これつてもしかして…。

R i n y a Y a z i m a

夏芽は、急に様子がおかしくなった…。

「どうした? 大丈夫か?」

俺は急にそわそわとした夏芽に聞いてみた。

「えッ! ?あ、うん、だ、大丈夫だよー? 全然ツー!」

「ホントかよ…。」

「ほ、ホントだよ 大丈夫ッ！」

「ならいいんだけど… キツかつたと言えよ?」

「心配してくれてありがとう」でも、ホント大丈夫だから…。

「わかつたよ……と、そろそろ俺ん家だ……」

目の前に俺のマイホームがどんどん近づいてきていた……。

これで 夏芸と一緒に帰るのも織れりが…………いや これから同じく
ラスなんだしまたこれが最後ではないか…。
でも、寂しい感じがするな…。

「へえ、まだあの頃と家は変わつてないんだね？」

「そりや、そつ簡単に家が変わつても困るだら…。夏芽の家も前と同じなのか？」

「うん だからこれからも近にしけつ遊びに来るかもよ?」

柊家は俺の家から3分ぐらいのけつこうな近所だ。そのため、小さい頃のほとんどを俺は夏芽と未来と過ごしていた。

「夏芽なら大歓迎だつて……。それとも今から寄つてくれか？昼飯ぐら
いなら作つてやれるぞ？」

「うわあ～ん、凛くんが軟派な性格になつた～。」

「うひ、待てや……。別にそんなつむつじや

「なかつたの？ホント」^{（ア）}

「……ニセ、おなつとあつたのがも……」

「せひあつーまつぱりあるじやん……」

「こや、ゆう少し一緒に語たこなつて思つただけだからシート心は
なにか？」

「えッ？ ホントッ？」

「ああ、ホントだつて。ト心は全然無こよ。」

「うふふふ、やつかりやなへい、もつと一緒に語たこつて……。」

「あ、ああ、うふ、それはホントだよ……。せつかく一〇年ぶりに会
つたんだしね。」

「それだけ？」

？ やけに食こつくな？

「ああ、あうだナビ？」

「やうなんだ……。今田は止あひへよ、弓越じの弓付力も終わつて
なこし……。」

「あれじやあ、弓付おつか？」

「いいよ、もうほんとないし」

「やつら…なりいつけど…。」

「うふ、ありがと それじゃ、また明日ね バイバイッ！」

「ああ、バイバイ。」

俺は彼女が見えなくなるまで彼女の背中を見つめていた…。
しかし、どうしたんだ夏芽は？下心あたりからなんだかちょっと暗
かつたけど…。

でも、もつと一緒に居たかったのはホントかな。凄く可愛くなつて
たしなんか、普通の仕草が可愛いって思つんだよね。
まあ、これからもチャンスはあるか…。

そんな事を思いながら、俺は家の中に入る事にした…。

「ただいま」

夕方近く、未来が買い物袋を持って帰つて来た。

「おかえり～……なんだ、買い物してきたなら言つてくれれば手伝
つたのに…。」

「大丈夫だよ、凛兄い。友達と遊んだ帰りについでに寄つただけだ
から」

「その友達は男なのかッ！？」

「ん?違ひよ、凛兄い。中学からの女友達」

「やうか…ならいいんだ…。」

「まったく…シスコンなんだから…。凛兄いみたいな人じやなきや
私は彼氏にしないよ」

「ふふつ、お前も充分ブラコンみたいだな」

「凛兄いのせいだよ?」

「あ?…なんでだよ?」

「え…もしかして自分で気付いてないの?」

「は?だから何が?」

「はあ~、なんでもないです…。」

「なんなんだ?いつたい…。わけが分かんねえよまったく。

「そろそろ夕飯準備するから、お風呂でも入つて来たり?」

「ん、わかった。風呂出たら手伝うわ。」

「うん、ありがと」

俺は風呂場へと向かつた…。

「まつたく…自分のカツコよさに気付かないって…変に鈍感なんだ
から…。彼氏を作ろうとしても凛兄いと比べちゃって…そのせいで
彼氏が出来ないのも、きっとわかつてないよね……。しかも私なん
て、麻美さんよりも長い時間凛兄いと時間を共有してるんだから…
…かなり辛いよ……。」

未来のその呟きは誰も居ないキッチンに吸い込まれていった。

第4話・再会の喜び　会えた事に感謝…（後書き）

これからも毎日頑張ります！！

第5話・春眠

眠い…（前書き）

次は球技大会編です。
それじゃ第5話をどうぞ

第5話・春 眠い…

【～～～～～】

眠い…。昨日は夏芽が引越して來たし…下級生と朝からぶつかつたし…バカはバカなままだつたし…委員長と麻美の様子もいつもと少し違つたし…ダリい…。

「凛兄いーっ！起つきるーっ！」

【ドスッガスッバスッベシベシベシベシベシベシ】

「イテヨーッ！その起こし方は止めろつてんだろーがッ！…」

「凛兄いが起きないから悪いんだよッ！？なんで起きれないのかな？まつたく…。」

「いや、敷布団閣下と掛布団王妃が俺を放すまいと…」

「何バカな事言つてゐの？早く降りて来てね？」

「ふいー、アーッ解～。」

「もう、私が居ないと駄目なんだから…。」

「いつもありがとうございます未来様。」

「ふう、早く降りて來るんだよ？」

「はいはい。」

俺はズバババツと着替えプラチナリングもしつかり装着し、とつと
と下に降りた…。

「さて、朝飯朝飯。」

「そういえば、凛兄い。そろそろ球技大会だよね？」

「ん？ そうだつたな… 未来はどの競技に出るつもりにしているんだ？」

松浜学園の球技大会は5日をかけてやるのだ。競技はソフトとサッカーハー、そしてバレーがある。

「うーん、まだ決めてないかな？ 今日決めるらしいからその時につて感じかな。」

「そつか…まあ、応援には行くから…。無理はしないようにな。」

「ありがと、凛兄い。」

「そろそろ行くか…。麻美も出てくる事だし、それに夏芽も来るつて言つてたしな…。」

昨日、夏芽と別れてから家に電話があり、今日から一緒に行く事になつているのだ。

「そうだね 久しぶりに夏姉に会えるよ よ」

俺達は家の外に出た…。

「おはよー凜矢、未来ちゃん」

「おはよつ凜くん。お久しぶり、未来ちゃん」

「おう、おはよう麻美、夏芽。」

「おはよひざります 麻美さん、夏姉」

俺達が家を出ると、すでに麻美と夏芽がいた。

「一人とも早いな。」

「まあね。そしたら夏芽がいたから話してて、それで仲良くなつたんだよ。」

「へえ~、そعدつたんだ… そんじゃ、行つか。」

「そうだね、凜兄い。」

「うん。」

「うん 凜くん。」

俺達は新たに夏芽を加えた四人で学校へ向かうのだった…。

今日はけつこう早めに学校に着く事ができた。

「…おはよう、凜矢……。」

「ああ、おはよう。あのバカはまた遅刻か?」

「…あいつがこの時間帯に学校に来たら今日は雨だな……。」

「聞いた俺がバカだつた…。」

俺はそのまま窓の外をボーッと眺めた。

「はいへ、そうゆう事で今から球技大会のメンバーを決めます。」

「1時間目はメンバーを決めるらしい…。そうゆう事つてどうゆう事なんだ？」

まあいいか…どうせやりたいのもないし……寝よ……。

「…凛矢、起きろ……。」

「んあ？ もう終わっていたみたいだ…。」

「で？ 僕はどの競技になつたんだ？」

「…何を言つてるんだ…？ もう暁だぞ…。」

「……」

俺はどうやら1時間目からずっと眠り続けていたらしい。

「…ちなみに前はソフトとサッカーで両方ともαチームだ…。」

「俺とバカも同じ種目で同じチームだ…。」

「ほへ、けつこう固まつてゐるな…。俺はそのほりがやりやすいからいいが…。」

「…ああ、そのせつがチームとしてまとまりやすいから…」

「

「へへ、今年はなかなか考えてるみたいだな…。委員長達は?」

「…神楽さんと柊さんがソフトとバレーで両方ともαチーム、麻美と美香はバレーとサッカーで両方ともαチームだ…。」

「ついで事は…ソフトでは丘合と夏芽、サッカーでは麻美と美香と一緒にチームつて事か…。」

なんか…仕組まれた感がひしひしと感じるんだが…。

「…眞咲おねがお前が寝ていたから悪いんだぞ…？」

「ですよね…。」

去年はたしかサボするか、ベンチに居たからな~。はあ、めんどくせえ…。

「やうこや、あのバカはどうだ?」

「ソーリーに居ただろーがツー!」

やつ、俺が起きた時からすでに横に居たのだが…

「だつて喋らね~んだもん。読者だつて今知つたぜ?・やつと

「あ?何分かんねえ事言つてやがる?・ひとつと飯食おつぜー!腹が減つて死にそうだツ!」

「死ねばいいのに……。」

「…………ヒドイ…………グスン……。」

そんないつも通りのやり取りをしながら俺達は昼食を楽しんでいた
……。

午後の授業も難なく終わりすでに下校時間が来た……。

「それでは～来週の球技大会に向けて～明日からの放課後は部活が
ありますから～みなさんよろしく～。」

何がよろしくだよッ先生ッ！

「ああ、それと～球技大会は絶対に3位以内に入ってくださいね～、
ボーナスが出るので。」

おい、それでいいのか教師……。

「それではさよなら～。」

桃華先生の挨拶とともに皆も部活や帰宅へと席を立った。

そういうや、今日はバイトの日か……。

俺は高校に入つてから週3でバイトをしている……。こじんまりした
喫茶店だがとても良い人ばかりで俺もよく立ち寄つたりする。

「凛くん、今日も一緒に帰らない？」

「フロイ、夏芽…。今日はバイトの日なんだ…。」

「あ、そつなんだ…。わかつた、バイト頑張つてね…。」

「ああ、ありがと。それじゃ、また明日。」

「うん。また明日ね」

ちよつとだけ夏芽が寂しそうしていた。

「メン、夏芽…。」

俺はそつ心の中で謝罪をしながらバイトへと向かった。

第5話・春眠　眠い…（後書き）

まあ、けつじつと寝くなっていますが」「了承ください」と

第6話・リムレット 兄妹（前書き）

今日は墓参りに行ってきました。
時間が経ってしまったかなり人が多かったです。
帰りにはたい焼きを買いましたよ
かなり美味しいのなんのって。
それじゃ第6話どうぞ

第6話・リムレット 兄妹…

【カラソカラソカラーン】

「「らつしゃー… つて凛矢くんか…。」

「「んにちわ、 榊さん。」

「ああ、 「んにちわ」

この人は、 「の喫茶店「リムレット」のオーナーで榊 茂さんだ。
とても優しくてかなりいい人だ…。

「「んにちわ、 凜矢くん」

「「んにちあ、 りんくん」

「「んにちわ、 奈穂さん、 奈々ちゃん」

この綺麗な女性は榊 奈穂さんだ。もちろん、 オーナーの奥さんで
喫茶リムレットの副オーナーだ…。

そしてこの小さくて可愛い少女は榊 奈々（さかき なな）ちゃん。

茂さんと奈穂さんの愛の結晶だ…。

今年で4歳になるんだがまだちょっと舌つたらずな喋り方をする。
いや…普通なのか？… 良く分かんないな…。

「りんくん だあこお」

「え？」

「うーん、奈々…。凛矢くんも困つてゐるでしょ？」

「ふふ、いいですよ…何時もの事ですし」

「やあたあ はやくはやく～～」

「わかつたよ、おこで」

俺はシフトの時間までの少しの間、奈々けやんを抱き抱えながら楽しく話をしていた。

「凛矢くん、わらわのお願いつ。」

「はーっ。それじゃ、わらそろ行くね、奈々ちゃん

「うそつ、ここへりあしゃー」

そして、俺は奈々ちゃんと別れ、仕事に向かつた…。

「奈穂さん、シフト入りますから、休憩いいですよ。」

「やうやく…ありがとう。それじゃ、奏ちゃんと一緒にお願ひね

「よしぃ、今日も頑張りつね、凛くん」

「はーっ、ようじくお願ひします、奏さん。」

「女性は 美波 みなみ 奏さんだ。年は僕の一歳上で大学一年生だ。

「わひと、やるやる忙しくなるかも知れないから厨房はよろしく

「了解っ」

それから、俺は多少忙しくなった喫茶店の厨房でいそいそと料理などを作るのだつた。

「茂さん、『締まり終わりました』」

「わうかい、いつもありがとうございます、凛矢くん」

「いえ、そんな…」

「ふふ、また明日ね」

「はい。それじゃ、わよひなら、茂さん、奈穂さん。バイバイ、奈々ちゃん」

「うん、じゃあね、凛矢くん。」

「ええ、またね」

「りんくん、ばいばい」

俺はリムレットを出で、帰宅の路についた。

「ただいま。」

「おかえり～凛兄～」飯もつすぐ出来るから待つてね

「了解、先に風呂行つてゐわ。未来はもう入つたか？」

「うん、先に入つておいたから出たら洗つておいて?」

「わかった。」

もうけつこいつ遅い時間…。まあ、8時半に終わつて今は9時だ…。
でも、未来は待つてくれて、料理も帰つてくる時間に合わせて作
つてくれる。前に一度先に食べとると言つたけど、寂しいだろうか
らと待つしてくれた。

「ゴメン、そしてありがとう…。

と、俺は声にならない声で謝罪と感謝をした…。

「ゴメン、一人だけにして…この家に一人だけにして…。

俺はバイトから帰るといつも謝罪をする…。この時間まで、未来を
一人にしていた事、未来を待たせてしまつた事、そして、俺と言う
存在がとても弱く、未来に甘えてしまつてしていることに深く謝罪をす
るのだった…。

- M i k u Y a z i m a -

きつと、凛兄いはまた謝罪をしてくるんだろう…。

「凛兄いのバカ……私はあの時の事をもう許してゐるのに……。」

凛兄いはきつと…いや、間違いなくまだ気にしている…。

私がこの時間まで待つてたのは凛兄いを心配させないため…。

凛兄いは優しい…。だからこそ心配になつてしまつ…。

凛兄いはもし、私が待つていなかつたら、そのまま居なくなつてしまふんじやないかと思つてしまつ…。

私は凛兄いが心配だ……。それはきっと、兄妹だからであり、家族だからであり、好きな人だからだ。

居なくなつて欲しくない……だから私は待つてはいるんだ。私が待てば、彼はちゃんと帰つてきてくれるから……。

私がこの家に居るかぎり彼は帰つてこれるんだから……。

-Rinya Yanzima -

俺が風呂から上ると未来はちょうど、料理を作り終えたところだった……。

「いただきます」

「召し上がり

「なあ、未来は球技大会、何の種目に出来るんだ?」

「サッカーだけにして貰つた 凛兄いは?」

「俺はソフトとサッカーに勝手に決まつてたみたい……。」

「みたいって、どうゆう事?」

「いや、めんどくつ寝ちゃつてさ…起きたら暁だった……。」

「は? もう、しっかりしてよ? 凛兄い。」

「ああ、まあ決まつちまつたもんはしょうがないし…適当に頑張るよ」

「うん、応援に行くから頑張つてね？私は1 - Aのbチームだから……。」

「そうか…俺は両方とも2 - Aのaチームだからな。無理だけはするなよ？」

「…………うん…………わかってるよ凜兄い 」

未来は少しだけ暗い顔をしたがすぐに明るく振る舞つた。

ふふ…わかりやすい奴だな…未来は…。

まあ、俺も未来に気付かれていないと言つ自信はないんだがな…。

「さて、俺はもう部屋に戻るな？」

「うん、私も洗い物が終わつたら部屋に戻るよ 明日から練習だからね」

「そうだな。」

俺はそのまま部屋に戻り、知らぬ間に夢の世界へと向かつたのだつた…。

第6話・リムレット 兄妹（後書き）

まあ、頑張ります

第7話・委員長 そんな……（前書き）

ふ〜、明日は部活です……。頑張りや。

和「……サボ魔のくせに……。」

痛いところを突かないでください……。

それじゃ第7話じつや

第7話・委員長 そんな……

俺は夢の中にいる……。

それがわかつたのは声が出ないから……。叫んでも喚いても声が出てこない……。

見渡すとそこは空き教室のようだ……。

一人の女の子がいた。
踞ついている子……リボンからすると一年生か……。

その子が急に顔を上げた……。
泣いている?……。

女の子の瞳には、涙が溜まってしまっている……。
どうしようかと思ったが全然動けない……。嫌な気分だ……。
彼女が何か言った……。

「…………ッ!…………は……。」

ほとんど聞こえない声、でもこの子はあるの田の子……俺が泣かせたのか?

わかんねえ……。

どんどん世界が白くなつて行く……。
変な終わり方だと思ったが気にしないよひこした……。
朝が来たんだな……。

「ふあ～あ

今日はアーティストがなる前に起きた事ができた。しかし、なんだつたんだあの夢な…。

「凛兄いーっ…起つや…いたあーっ…？」

「うるやこーん、朝っぱらから…」

俺が起きたのがそんなに驚いたのか、かなづかしくしてこう。

「え? なんで…? なんで起きたの…?」

「ひねりことひねりこと…」

「不思議な夢を見たせいで田が覚めちまつたんだ。」

「不思議な夢?」

「ああ、妙にリアルだった。」

「く~、妙にリアルな夢を見れば凛兄いは起きるんだ~、びゅやつたら見せれるかな…ブツブツ…。」

なんか凄い怖いんだが…背筋がゾクゾクしてる…どうにか空気を
変えるか…。

……ぬわぬわ…

「わやあシ一何脱ぎ始めてるの…? 凛兄い…もひ…」

未来はバンッと扉を閉めて出て行ってしまった。

ふふ、まだ上半身裸なだけなのに…純情な奴め…。

俺はセザンと着替えて下に降りる事にした…。

だつて怖いんだもん。

今日も四人で仲良く学校に登校し、午前中は睡眠による授業を受けた…。

ん？ はしょりますぎ？

だつて作者がめんどくさいって…。

「…何をブツブツ言つてこら…？」

「うおつ…？」

寝言を喋つていたよつだ…。

「…早く飯を食おう、バカが死にそうだ…。」

隣を見てみるとバカが涎を垂らしながら白目を向けていた。

「おい、机に涎落とすなよ？」

「……ツーン……」

もう知らん…。

俺はバカをしかとしどとと未来の愛情込もつた弁当を食つ事にした…。

「くつそーツ！ フガツモガモグフグツ！」

バカはガツガツガツと弁当をかきこんでいた。
汚いから一発殴つておくか…。

【ベシッ！】

「モガモガモグッ…?…………ドンドン……『クン……

バカは喉に詰まらせやがった。さまあwww

「テメエ…殺す気かあツ…?」

「殺されたくなかったらもつと静かに食おうな？」

「はい、すみませんでした！」

未来の技を使つたらあつたりと謝りやがつた。…さすが未来だな…
…家で褒めてやろう。

そんなこんなで楽しい毎を過ごしていた…。

そして、帰りのホームルーム…。

「今日から球技大会の練習のため、基本的にこの一週間は部活が禁止です。後、放課後に球技大会の実行委員会があるのでクラス委員長と副委員長は行ってくださいね。」

俺はほとんど寝ながら聞いていた…。

「はい、それじゃー私のた…じゃなくて皆自身のために練習頑

張ってくださいね～。」

今さら言つ直してもバレてるぞ桃華先生…。

「それでは、クラス委員長の神楽さん…」

「へ～、百合は今年もクラス委員長なんだな…

「…そして、副委員長の凛矢くんよろしくお願ひしますね～。」

「は？…今なんて？…俺が副委員長？…まさか…さつと聞き違ひだらう…。」

「凛矢くん？お願いしますね～？」

「…………はい…。」「

やはり俺だったようです…。泣きたい…。

ホームルームの後、百合が俺を呼んだ…。

「それじゃあ、夜島くん、行きましょ～！」

「そうだな。なあ、なんで俺になつたんだ？」

「？…それはですね、私が推薦したからです

「はい？…なんでもまたそんな事を？」

「一年生の時、いろいろと夜島くんにはクラス委員の仕事を手伝つ

て貰つたので……。わざわざちやつたからです」

「ちやつたからですか……。」

「あ……。俺は心中で溜め息を吐いた……。
まあ、決まつたもんはしょうがないか……。」

「まあ、せとんど役に立たないけど、かくよのこへな、委嘱」

「うそ、うそよおこへお願いします 夜島くん。」

「なあ、タメ語でいいぞ?」

「え?」

「いや、これから隣で支え合ひだから、なんつーか、まあ、タメ語でお願い。前の屋上で言つた時みたいに……な……。」

「……」

「何かを考えてこよつだ……。」

「……駄目……かな?」

「……うう。わかつた……。うん、わかつたよ 夜島くん。」

「あ、ありがとな 委嘱長」

それから、俺達は少し近づいた互に距離を感じながら、一緒に会

議室まで歩いて行った。

第7話・委員長 そんな... (後書き)

感想とかあつたら送りてください。寂しいんで...。

さて、部活頑張りつ...

第8話・正夢 出版... (前書き)

読者のみなさんは正夢を覗たことありますか?
ちなみに俺はあつません(爆)
それじゃ、第8話ひりべ

第8話・ 正夢 出会い…

俺は今、空き教室にいる…。
何故かつて?それはだな…

俺は田舎と一緒で会議室まで歩いていた…。

「なあ、実行委員つて何やるんだ?」

「ん~とね、まあ、簡単に効率よく運営するために行動するんだよ

「…そのまんまな気がしないでもないんだが…。」

「まあまあ、細かい事は気にしない」

「……………そこですか…………。」

曲がり角に来た時、それはおきた…。

【タツタツタツタツタツタ】

「わやつー。」

「つまつー。」

【デシン】

「「痛ッ…」」

「大丈夫！？夜島くん！？」

「ん？ああ、俺は大丈夫なんだが君…は……？」

「はい…大丈夫…です…。」

そこに居たのは始業式の日、ぶつかってしまった女の子だった…。

「あッ！あ、あなたはあの時のッ…」「めんなさこ」「めんなさーッ！」

なんか、スッゲー必死に謝つてるんだがこの謎子。

「い、いや、怒つてないから…な？」

「『めんなさい』あの時もそりだしたけど…ホント…『めんなさい…。』」

なんか、ヤバいよ？田尻に涙が溜まってるし…なんか今にも泣きそう？みたいな？

「あの後…あなたを探した…けど…なかなか…見つから…なくして…。」

ヤバいな…マジで…ビコするか…。

「ワリイ、百合。先に行つてくれ…。俺はこの子を宥めないとこけないから…。」

「うう、わかった 先に行ってるからちやんと宥めてあげてね？」

「ああ。マジでワリイな……。」

「いじよ それじゃそろそろ始まっちゃうし、早く行くね」「おへ

百合は急いで会議室へと向かってしまった。しかし、百合のタメ語ってなんか自然に出来るな？もしかして……ヒ、その前にこっちの泣き虫ちゃんをどうにかしないといと……。

まずはどっかに移動するか……さすがに此処だと人の目につきやす

い。
そして、俺は女の子の手を出来る限り優しく持つてあげ、俺がどう

さんに思いついた場所……

「此処なら人は来ないだろ。」

空き教室へと来ていた。

「はふ……ひくつ……。」

あちやー、もう泣こわけてるしちゃう。

つか、夢様様だな……まったく……いや、これ夢の通りじゃん、あれ……正夢か？

マジかよ……。おっと、また現実逃避をしてしまった。

「なあ、泣き止んでくれないか？頼むから……。」

「……ひくつ……」めんなれこ……ひくつ……。」

うへん、どうするか。

強く出ると余計に泣くだろう。かと云つて弱く出ると謝り続けるだろう。……。
……しかたない。

ファサツ

ギュッ

「ふえ？」

俺は女の子を抱きしめた。出来るだけ優しく。でも、下手すると犯罪、普通にビンタもんだな。いや、大丈夫だらうか？

「え…何を？」

「やつと、泣き止んだな。」

「え…あ、ホントですか。」めんなさい。

「もうそれはいいよ…」

しかし、柔らかいな女の子って。強くなると折れそうだ。

「ねえ、君の名前…教えてくれないか？俺は夜島 凜矢だ。」

「あ、はい。私は美波 みなみ 叶かなえです。」

へへ、美波か…。の人と同じ苗字だな。まあ、そちらへんにたくさんいるだろうけど…。

「えっと……あの……せつ……あの、そろそろ放して……貰えませんか？」

「ん？」「うーーーん！」だったな。ワリイ……。」

ちよつとだけ、名残惜しそうも困ったがこれ以上したらまた泣かれる
と直感で感じた。

「えっと……あの……ありがと」「わざとせず。凄く暖かくて、凄く安
心できて、涙が止まりました……。」

「いや、俺こそ悪かったな……。急に抱きしめたりして……。」

抱きしめてを言つた瞬間、思い出したのか叶の顔は真っ赤になつて
いた。

「えっと……その……先輩……」「めんなさい、今田もこの前も……。」

「こや、眞にするな……。だが、前は遅刻しそうでって事だと困つ
たが今田はなんど走つてたんだ？」「…」

初めの時から思つていていた疑問を口にする。

「あー忘れてたーお姉ちゃんに言われてたんだ！……それじゃ、先
輩さよならー。」

「あ、じゃあな。」

「あーと……こつか、お説ぎをするのでお暇な時にでも図書室に来て

くださいね　毎にほほとさざ西のと細ひので…。」

「ああ、分かつたよ　それじゃ、また今度」

「はい、それでは。」

そう言って小わざ女の手に、叶はまた走って空き教室から出て行つた。

まったく…また面白い事になつたもんだ…。

改めて見た叶はとても可愛く、そして小さくて、まるで小動物を思わせた。

さて、今さい会議室に行つてもしかた無いし…。先に練習に向かつか…。
たしか、今日はサッカーとソフトを中心こやるつて言つてたな。

そして、俺はめんどくさい練習のため、無駄に広い運動場へと向かうのに何故か笑顔になつていると感じながら歩くのだった…。

美波　叶……か

第8話・正夢 出会い... (後書き)

さて、これが「正夢」なるのか…。

第9話：練習 新キャラ？…（前書き）

すみません、ロジックにはまっていたら小説の執筆が遅れてしまい
ました…。m(—)m
これからは気をつけます。
それじゃ第9話どうぞ

第9話・練習 新キャラ?...

俺が運動場に着くと、皆が不思議そうな顔をして俺を見た…。

「凛ぐんじつしたの?なんか来るの早いけど…。」

心配したのか、はたまた皆の代表でか夏芽が聞いてきた。

「ああ、ちとトライつてな。遅れちまいそつだつたから委員長だけ
行つて貰つたんだ…。」

「嘘つ、どうせ凛矢の事だからめんぢくむこつて言つてサボつたん
じやないの?」

なんかとひつもなく酷い事をおっしゃいますね、麻美さん…。

「違えよ…。人とぶつかつてその子が泣きそつだつたから宥めてた
んだよ…。」

一応事実だからちゃんと言つてみた。

「どうせ女の子に『わざと』ぶつかつた振りして変なとこでも、触
つたんじゃないの?」

わざとの部分を強調しておっしゃつてくださいましたね……麻美さ
ん…。

つか、俺はそんな人間に思われていたのか……。

いや、抱きしめたけどさ……今言つたら変態のレッテルを貼られ

るな、あつと…。

反撃でもじみてるか…。

「変な」とひて例えれば何処だよ?」

「ふえ?え、えつとそれは……胸、とかよ…。」

聞き返すとは思ってなかつたのか多少なり焦つてこた。ちよつと苛めたくなつてきた…。

「とかつて事は他に何処が有るんだ?」

「えッ!…?そ、それは…えつと……他の…といふよ…。」

「だから、それが何処が聞いてるんだが?」

「…だから……それは……うう……もつ、知らなーい…どつかよ、どつかー!」

逆ギレしやがつた、コイシ。ま、いこかからかこすきたな
ちよつと…。
ほんのちよつとだけだけ…。

「わかつたわかつた、悪かつたな…。ちよつとからかこ過ぎたよ

「ふんつー早く練習に行くわよつー。」

「?解」

「後、リムレットのケーキで許してあけるから…。」

リムレシットではケーキもけつこいつ有名なんだ、実際かなり美味しい。「一ヒー や紅茶に良く合つんだよ、さすがオーナー。

「はいはい、イエス・コア・ハイネス…ボスッ…。」

「下手なネタを使つなッ！…」

「…………」

軽く意識が飛びました……助けてください……グスン……。

「なあ、夏芽はサッカーとバレーだったよな？まずはソフトからなのに、なんで運動場にいるんだ？」

「うんとね、一応補欠みたいな感じだから練習はしつこいつと思つて…。」「…………」

……ジーン……なんて偉い子なんだ夏芽は……。

なでなで

褒美に頭を撫でてあげた…。

「えへへ、んん~」

撫でてあげると、凄く喜んでくれていた…。
うむ、撫でたかいがあるつてもんだ。

しかし、女の子の髪つて撫で心地がいいんだな。しかも、なんか

いい匂いもするし…。

「グルルルルーツ」

そろそろ野獸が怖いからなでなではまた今度にするか…。

「よ～し、練習に行きますか～、お一人さん」

「うん、そうだね凛くん」

「ふんっ！」

あら、なんて正反対な反応なんだか…。しつかり明日のバイトではケーキを貰つて来なくちゃな

そして俺は凄い二ヤけまくつてる夏芽とかなりふて腐れてる麻美を引き連れ練習に向かつた…。

〔ソフトの練習〕

「ノックいくよーっ」

仕切つてるのはソフト部の女の子…名前は知らん…。

「ひ、ひどい…。」

「気に入るな。」

「うう、改めて、ノックいくよーっ」

【カギーンツ】

「わーわー騒ぐなッ！どんどん行くぞ、バカ直樹！」

【バシツ】

【カキーンツ】

【バシツ】

「よつしゃーッ！バツチこいやーッ！」

「わるい…変わるよソフト部の女の子。」

「できれば名前で呼んで欲しいんだけど……って聞いてないし…。」

「大丈夫だ…いつかは出番がくるかもしれない…。」

「そうかな？まあ、まずはソフトに集中しないとね」

「そう、その意気だ…。」

「…あれ？私誰と喋ってるんだろ…？」

「いくぞーッ！バカ直樹ーーッ！」

「えッ！？待つて！なんか怖い…」

【ビュオオツ】

ギャーッ！頬をかすつたーッ！！」

【カキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーンカキーン】

「ギャーッ！ テメハーッ！ 全部顔を狙いやがってーッ！ ぐおお
ツー…………」

「悪かつたな……如月さん返すよ……。」

「やつし... やつと私の名前を.....。」

「よーし、それじゃ、張り切つて、次はバツティングー！」

如月さんの声が実に晴れやかだった…。

直樹が忘れられたのは言つまでもない……。

「ナツカ」の練習

いろいろと残酷なんで一部だけ。

「行くぞーッ！キーパーッ！」

「ふえ？此処は何処だ？俺は？」

【ジユオホツ】

「ギャーッ！ またかよー！？」

「ほら、キーパー避けるんじゃないッ！止めないとッ！」

「顔面狙つてゐるやせに向を言つてくれますやうにシ・・・」

「行くぞーッ！」

「聞けーツ！！！」

【ビュオオツ】

「ベニシア」

そんな感じで、練習が終わり、夕飯を食べ、俺は敷布団閣下と毛布王妃に包まれていた…。

「しかし、今日もいろいろあつたな……。」

今日のこと昨日のこと、なんか……一週間も経つてないのに一週間分以上疲れてるのはなんでなんだ……？

そんな事を考へてゐる内に俺は夢の中に旅立つていた…。

第9話：練習 新キャラ？…（後書き）

ロジックって面白いですね。
かなりハマりました

第10話・図書室約束…（前書き）

更新完了！

今日は宿題の答えを物づちに離任式に行くハメになりました。おーん
教師も考えたと思います。
それじゃ第10話ひづや

第10話・図書室約束

練習初日から次の日、今日も実行委員会 + 練習がある。
それに、今日はちょっと図書室に用があるしな。

そんな事を考へていたら、いつの間にか午前の授業が終わっていた。
さて、とつとと飯を食べつとしますか…。

「よつしゃー、凛矢！ 昼飯にじよつしゃーーー？」

「ああ、やうだな。今日はひと、用があるから早く食べよつ」

「…用つてなんだ……？」

「ああ、昨日軽くあつたんだ…。それで、用ができるたつて感じ」
和磨に軽くこれ以上は聞かないでくれと、アイコンタクトを送つて
みた…。とくにバカがつるさいだらうか…。

「…やうか……。まあ、詳しきは聞かなによ……。」

「? ほはくはんはひはほはほ? (お前なんかしたのかよ?)」

「じてねえよ、呼び出しつらつたわけじゃないし」

「…なぜ、話が通じている?」

「神、Sakusuyaの力だ…。」

「……何を言つてゐるんだ……？」

「いや、なんでもない……。」

「ムグムグムグゴクン。お前早く食つたじやなかつたのか？」

「おつと、やうだつた。つか、お前今日はまともだな、多少

「ムグムグムグゴクン、たまにはだ。」

「ヨイツ、まともだとけつゝうカツ」よかつたんだな……。いつもがまともじやないからか、たまに見るとカツ」いこと思つてしまつ……。まあ、そんな事よりわかつてと食つか。

そんな感じで今日は少しこつもと違つて食を楽しんだ。

「いりやひきま。そんじや行つてくるから。」「

「……まあ、けつゝう時間もあるしな……。海苔が付いてないか見てから行けよ……？」

「ああ、そうだな。そんじや行つて来ます。」

「……ああ、行つて來い。」「

「行つてらつしゃい。氣をつかひな。」

「なあ、直樹がまとも過ぎるから怖い……びびりよつ。」

「……大丈夫だ……。たまになるまともバージョンだからすぐに元に戻るさ……。」

「そうだな……」

そして、俺は叶との約束？のために図書室へと向かった……。

【ガラガラガラ】

図書室の扉を開くと其処は別世界のように人がいなく、静かだった……。

つか、人が見当たらないんだが……」の学校の奴らは図書室を使つたりしないのか？……まあ、俺も1年の最初を入れて二度目なんだが……。

「あっ、先輩！こんなにちわです！」

「ああ、こんにちわ、叶……それより、図書室ついていつもこんな感じなのか？」

叶は俺を見つけて走りよつて來たので、挨拶ついでに聞いてみた。

「はい、いつもは3年生の先輩が一人いるんですが……今日は私だけみたいです……」

「そうなのか……。そんで、昨日はお姉ちゃんとやらに怒られなかつたか？」

「いえ、怒られはしなかつたんですけど理由を問い合わせられました。

「

「やつだったのか…。『メンな…遅れさせやつて…。』

「あつ、いえつ、先輩が気にする事じやないですつーお姉ちゃんはシスコンだから、少し手伝いに遅れただけでも心配しちやつて…。」

「ふふ、そつか も、手伝いつて何のだ?」

「えつとですね、お姉ちゃんがバイトしてるとこで人手が足りないつて事で、実質バイトみたいにして手伝つてるんですけど、どんぐさいけど料理を作るのは得意だから」

「へえー、料理つて事は飲食店か?」

「はい、けつこつ小さいけど、なかなかに人気があるんですよ?」

叶はどこか自信満々に話しついていた。

「そつか…なら、昨日言つてたお詫びの件は其処と一緒に行く、でどうだ?」

「はいっ、やうですね お店の方も落ち着いていて、過(ハ)しやすいですか?」

「ああ、それじゃ、いつこじよつか?」

「うーん、そうですね~。来週の金曜日、球技大会が終わつた後なんてどうですか?」

「ああ、いいよ。それじゃ、何処で待ち合わせる?」

「そうですね~、私が先輩を迎えて行きます。だから、先輩のクラス教えて貰つていいですか?」

「ああ、俺は2・Aだ…。なら、俺はその時、教室で待つてればいいのか?」

「はい、絶対に迎えに行きますから」

「そつか、ありがとな…。」

「いえっ、元々私が悪いんです。だから、気にしないでください。」

「ふふ、ああわかったよ」

「俺は何故か叶と話している時間がとても楽しく感じた…。
今まで喋った事ないタイプだからか、それとも…」

「先輩?」

「ん?ああ、ワリイ…。ちと考え事してた…。」

「私と話していると退屈ですか?」

「いや、そんな事はないから大丈夫だよ」

「そうですか?…ならいいんですけど…。つまらなかつたら言つてくれださいね?」

「つまらなくなる事がもしあつたらね…。」

「きっと、叶は自分の事を悪く見すぎてるな…。なんか、そこも可愛らしげ…。」

「なあ、叶は昼はいつも此処にいるのか?」

「はい、お昼御飯も此処で食べてますか?」

「え? いいのか? 普通は飲食禁止だと思つんだが?」

「えつと、鍵をですね… 開けたり、もし人が来てもいいように、オーナーを貰つてるんです。」

「そうなのか? なら、いつも一人で昼飯を?」

「あつ、いえ、いつもはさつきも言つた通り3年生の先輩が一人居ますから一人で食べてます。」

ああ、そういうやそんな事言つてたな…。

そんな楽しい会話をしていた時だつた…。

【キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン】

楽しい時間の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「あつ、予鈴みたいですね…。それじゃ、先輩。戻りましょ「うか…。」

「

「ああ、そうだな。……なあ、叶?」

「はい?」

俺はこの楽しい時間を今日だけで終わらせたくなかつた。

「また、此処に来てもいいか?」

「……はいっ!先輩なら大歓迎ですっ!」

少し間があつてから嬉しそうに叶は返事をしてくれた。

そして、俺達は自分達のクラスへと戻つて行つた。
俺の顔は教室に着くまで何故か笑顔だった。

第10話・図書室約束（後書き）

いやはや、未だに先の展開を考えていなーい作者です……。
まあ、楽しみにしてください。

第1-1話・特 別 編 リバーラッシュ（前書き）

今日はちよつと、つなぎみたいな感じで短めです…。
それじゃ 第1-1話どうぞ

第1-1話・特 別 編 リムレットの一日

叶と約束をした次の日の放課後、俺はリムレットに来ていた…。
もちろん、バイトとして…。

「こにちわ、茂さん、奏さん」

「ああ、こにちわ。凛矢くん」

「…………こにちわ～、凛矢くん…………。」

なんか、奏さんの元気が無いみたいだ…。
後で聞いてみるか…。

俺は着替えるためにロッカールームに来た…。

【ガチャ】

扉を開けると、そこには着替え中の女の子の姿があった！

「こにちわあ、ついくん」

まあ、着替えてるのは奈々ちゃんなのだが…。

「こにちわ、凛矢くん 後、女の子がいるかもしれないんだから
ノックはしてね？」

「ついくんのエエチい」

エッチと言いたいらしい……つか、なんつーひとを聞こますか、この少女はっ！

…まあ、ノックしなかつた俺が悪いんだが…。

「すみません、これからは氣をつけます」

「氣をつかへぐださるならナニハドす」

「つじくんのエエチい、エエチい」

なにが楽しいのか、奈々ちゃんはエエチいと連呼しました…。

「エエ、奈々？ 凜矢くんに失礼でしょ？」

「いいですよ、奈穂ちゃん 摶り（くずぐつ）の刑ですから」

そのまま言した俺は着替え終わつた奈々ちゃんをバシと捕まえ、摶りまくつた！

「はう、キャハッ、はふ、ひはう、ひいくん、うう、メえなう、わこ〜〜」

言葉をカミカミになりながらもちやんと奈々ちゃんが謝つたので許してあげる事にした……。本音はもつと叩めてやむつと思つたが奈穂さんもこらからやはう止める事にした……。

「はふ、ひふ、あ〜、りいくんの苛めえ子お」

なんかスッゴい奈々ちゃんが可愛こと思つた…。

「……口っこいんじゃないぞ、俺は……。
あ、もつと苛めてやるかな……。

「なんだ、もつと撲つて欲しいんだな？それじゃ、存分に撲つてやるからな？」

「こやあ～、ママ～

「ハハハハツ」

「ふふふふツ」

「おや、楽しそうなところをすまないね？凛矢くん、そろそろシフト入ってくれると助かるよ……。」

「あ、はい、すみません。」

俺は少し戸惑った気味で奏さんのところまで行つた。

……つか、わざと奈々ちゃんの笑顔のせいだ……。

「奏さん、どうしたんですか？」

「あ～。……ふえ？ 何が？」

「いえ、ボ～っとしてると書つか、ショックつーみたいな顔してる
から……。」「

「聞いてくれる？」

「え？ あ、はい、まあ……。」

いつもと違つた奏さんのどよみづ『曖昧』に少し心配になつてきました。

「それがね、私の妹が～」

「あれ？ 奏さんって妹いたんですね？」

「ん？ せうだよ～良く来てるんだけど…………そつか、凛矢くんないな
い時がほとんどもんね……。」

「へえ～、やうなんですか、今度あつてみたいですね？」

「こつかは会えるわよ、きつと…。それでね、妹がね、昨日嬉しそ
うな顔して帰つて來たから聞いてみたら…。今度、男の子と寄り
道するつていいだすんだよ？ もつ、私、ショックで飛び降りるとこ
ろだつたの…。」

「や、それはまた一大事ですね……。」

「やうなのよ！ 今度、私がシフトの時に此処に連れてくるんだつて、
もう、スッゴく嬉しそうに！ その男、会つた時は只じやおかないわ
ッ！」

目が凄い勢いで燃えていて、さすがにそろそろ関わりたくないと思
つた。だから、仕事に逃げる事にし、その場に奏さんを残して厨
房の方に逃げ込みました。

しかし、奏さんの妹つてどんな子なんだ…。今度、会つてみたい
な

そして、また、一日が過ぎていった……。

第11話・特別編 リムレットの一日（後書き）

次回からは球技大会です。それでわ。

第1-2話・球技大会一日目〔前編〕（前書き）

いつも、作者です……。

また、なんか長くなりそうですがどうか、めげずに付き合ってください

それじゃ第1-2話ひつぞ

第1-2話・球技大会一日目〔前編〕

最初の練習から数日、今日は球技大会1日目だ……。

松浜学園の球技大会は五日にわけてやる事になつている……。

まず、1日目の今日はサッカーをベスト4まで決める。ちなみに、1クラス2チームづつで、1学年5クラスあるから、全部で30チームになる。そして、運動場で5試合を一気に始めるのだ。

そして、俺は今、テント張りを頑張っている……。

実行委員会の話合いにより、係が準備に決まつてしまつた……。まあ、片付けはしなくていいらしいので、敢えて仕方なく、テントを張つている……。

ちなみに百合も準備なんだが……。

「ほら、頑張って 後、一つなんだから

」

「しかし、やけに多くないか？終わった頃には疲れてるぞ……。」

「まあまあ、そういうかもつて事でけつこうな人数の係なんだから

……。

「せうだけじや～、まつたく……めんどくせ～……。」

「うひうひ、そんなマイナスな事言つてると幸運が逃げるよ?」

「やつなかもしないけど……こればかりはな……。」

「よつと……あ、終わった事だし、次は球技大会を頑張ろっ?」

「……さいですね。」

俺はもう、球技大会をする前から、身心ともに大分疲れていた。
はあ……まあ、出来る限りは頑張りますかな

そして、第1試合が始まった。

第1試合

2 - A aチーム
VS
3 - D bチーム

最初の試合が3年とは、けつこう嫌だな。

相手のチームはけつこう運動神経がよさそうな人が多そうだ。
まあ、見た感じなんだが…。

『試合は前後半30分ハーフです! それでは始めてください!』

実行委員のアナウンスがあり、相手のキックオフで始まった。

配置は俺がミッド、直樹はフォワード、そして和磨がキーパーにな
つている。

和磨はかなりの運動神経により、キーパー。俺はまあ、人並らしい
からミッド。直樹は自分から『フォワードじゃなきゃ、嫌だい!』

と言いたしたので仕方なくフォワードになつた。

まあ、直樹は体育だけはかなり真面目だし、運動神経もいいので問題はないんだが…。

俺が直樹のフォローとしてミッドにいる感があるのはなんか気にくわない。

開始直後、かなり「ゴツい奴が突っ込んで来た…。

「うおおおおおおお…！」

しかも、「うるさい…。なんなんだ？」この「ゴツ男は…。
かまいたく無いな…。

ゴツ男はディフェンスを弾き飛ばしながらペナルティエリアに突っ込んで行きシユートを打つた。

【バシイイツ】

それを左にジャンプしながらサービングする和磨…。はつきり言ってかなりカッコいい。

「うわおおおおお…！」

ホントにうるさいな…。

…おつと、和磨が俺にボールを飛ばしてきた…。

そのボールをワンバンさせてからキープし、ドリブルに入る。

近くには3人…。

まず、前方に一人がいる。

まず、一人目、右に体重を一瞬かけて、すぐに左に抜く。

二人目はスピードで抜きさり、三人目と対峙する。

フェイントをかけてみるが必死に俺の前を塞ごうとしてくる。

「凛矢ッ！」

隣から直樹が俺を呼び、とっさに出したパスを直樹は受け取り直ぐ様シュー^ト体勢に入つた。

ペナルティエリア外からのミドルシュー^ト。

【バシュウウウッ】

ボールは見事にネットに突き刺さつた

『おつとおおー！？第5コートの2・Aaチームが先制ゴールを取りました！…』

俺達はどんどん点を積み重ね、前半の終了には4-0と圧勝していた。

「ふう、この調子なら勝てそうだな…。」

「…ああ……。…だが、気をつけた方がいいだろ？…。…後半は相手もマークが強くなる……。」

「そうだな。後半はフォワードに麻美、美香にディフェンスをやって貰うか…。」

「よし、やっと出番な訳ね

」

「UJのチームはキーパーが強いけど、全体的に守りが弱いから、私がしっかりガードしてあげるッ！」

麻美も美香もやる気満々と言つた感じで張り切つている。

「おし、その意氣で後半を頼むな。」

「了～解」

「ラジヤツ」

「凛兄いーッ！頑張つてねー�！」

「夜島くんッ！頑張つてッ！」

「凛くんッ！頑張つてー�！」

「先輩っ！頑張つてくださいッ！」

応援に来てくれた4人もそれぞれに応援してくれた。

「相変わらずモテモテですね～、凛矢様々はッ！」

「何怒つてんだよ？麻美？」

なんか、かなり不機嫌オーラ出しまくりでこっちを睨んでくる麻美
…………正直言つてとても怖いです…………。

「ふんッ！なんでもないですよーだッ！」

まったく、理由があるから怒つてんだろうが、麻美さんは
とは、さすがに言えないチキンな俺……。

そんな事をしている内に、ハーフタイムが終わった。

皆もいい感じに疲れを取れたようだから、後半もじゅんじゅん得点を取りますか…。

「よ～し、絶対圧勝するぞ～！」

「　　「おーッ！」「　」

そして、後半が始まった。

後半では、麻美がフォワードに入った事により、得点原が増え、美香は守りつつも攻撃に参加してくれた。

その結果、8・0と言つ、圧勝を見せた。

『第5マート、8・0で2・Aaチームが勝利しました!』

そして、大事な初戦を勝ち進み、次はシードで休めると言つ、ラッキーな展開になつたのだつた…。

第12話・球技大会1日目・〔前編〕（後書き）

まだ、初戦しか書けませんでした。

そして、ゴツ男は一回しか出て来ませんでしたがまた登場します。
実際は別の人ですが…。

それでは…。

第1-3話・球技大会～〔中編〕（前書き）

ふつ、明日で1日目は終わりです。

後、報告があります…。

来週から作者は学校が始まるため、毎日更新は流石に出来ません…。
一週間以内には絶対更新するつもりです…。
なので、来週から一週間以内更新になります。ホント、毎日楽しみ
にしてくださいる皆に謝ります。

すみません！ m() m

それでは、気を取り直して…第1-3話どうぞ

第1-3話・球技大会～[中編]

第2試合はシードの結果、第3試合までは休憩が出来る…。
俺達は未来を応援するために第1マークまで来ていた…。

「しかし、未来ちゃんのクラスの相手が1年でよかつたなあ。」

直樹も未来の事は知つていて、多少なり心配してくれて…。

「ああ、アイツは心配かけないよつに無理をするからな…。どうせ
なら出ない内に負けて欲しいんだが…。未来が頑張る姿も見たい。
…悩むといいんだ…。」

「まつたく…。システムなんだから…。」

麻美が呆れたように言った。

俺も自覚はしてるんだよ…。

…でも、可愛いんだもん。いや、マジで…。

だから心配になるんだよね、あの事を抜きにして…。

「…でも、心配になるのは分かる…。彼女はしっかりして…
が、危うさがあるからな…。後、可愛いからだらうな…。」

「たとえ、一番信頼出来るお前でも、未来は絶対渡さねえからなー。」

「ふふふ 夜島くんの妹さんが羨ましいです ね？終さん」

「うん、ホントだよ……昔からだつたもんね、システム…。」

「へえ、凛矢のシステムってそんなに前からだつたんだ……。」

「うん、ほんとんど一緒に行動してたよ……。でも、その時はどちらかと言つて、凛くんに未来ちゃんがくついてた感じだつたんだけどね……。」

「でも、私が仲良くなつた時にはもう、ほんとんど逆状態だつたわよ？」

「ふふ その間に何があつたのかな？夜島くん 「

なんか、女の子達の話が不穏な雰囲気になつてきた……。

「…………ン？……ナンノハナシカナ？……ボクチャンワカンナイナ？……。」

「凛矢……アンタ、片言になつてるから……。」

「うぬせえすみません、でも、その話は勘弁してください……。」

なんか、うぬせえって言おうとしたら、かなり怖い目で睨まれました。

「理不尽すぎる……。

「……つと、夫婦漫才をしてくるといひ悪いんだが、そりそろ始まるぞ……？」

「だ、誰が夫婦よ、誰が！」

「やつだぞ、『マイツの夫なんて怖くてなれるかっての……』。

「……そ、そこまで言わなくともいいじゃない……。」

なんか、急に暗い顔をして、ボソボソと喋っている麻美。なんなんだ?この頃よく暗くなったりしてゐみたいだぞ?

「俺が悪かったよ……だから、元氣出してくれ……。」

「気にしてなんていわないわよ……。」

いや、雰囲気からして気にしてるだろ……。
まったく、ちょっとしたジョークだったのに……。性格の暴力的など
いろだけの事だってのに……ホント、気にしやすいんだから……。

「ホントに悪かったよ……。ほら、未来の応援してやるわ~。」

「うん、わかつたわよ……。」

麻美はほんの少しだけ、元氣を取り戻したようで、未来の試合に集中した。

『それでは、第1試合のセカンドを始めてくださいー。』

その言葉と同時に、試合が始まった

1 - Abチーム

V S

1 - Ebチーム

どうやら、未来はスタメンのようだ…。
かなり心配だが無理はするなって言つたし、『ディフェンスだから大丈夫だよな…。

「…大丈夫だよ、凛くん。未来ちゃんは凛くんの言つ事は絶対守るから…。」

俺の心情を読んだのか、隣から夏芽が語りかけてくれた。
俺の心はその言葉でかなり救われた…。心中で、夏芽に感謝の言葉を告げた…。

ありがとう、夏芽…

俺の…初めての…

未来にボールが渡った…。

未来は相手が近づいて来ると、すぐに他のチームメイトにバスを出してあまり動かないようにしているようだ…。

…よかつた、ちゃんと俺の言つた事を気にしてくれて…。

隣を夏芽と麻美、美香、それに和磨と直樹、そして、事情は知らないであろう百合も俺に微笑みかけ、目で『大丈夫だから安心して』と語りかけてくれた…。

俺はその行為のせいか、自分の犯した罪を思い出したせいか、未来が見せてくれた優しい微笑みに似ていたせいか、涙が一筋だけ流れ落ちた…。

それからも未来はボールを貰うとそれほど前に進まず、相手と接触する前に味方にバスを渡して俺の言つた無理をするなをしつかりと守つてくれていた…。

未来は、もつと走つても大丈夫な筈なのに、俺の事を思つてほとんど走らないでプレーしている…。

未来を心配している筈なのに、未来は俺を心配している…。

互いが互いを強く心配する…。

それは、どちらも危うさを持つている事を意味している…。

…心配しなくてはならないほど危うさを……。

前半が終りし、未来が戻つてきた…。

「未来、前半お疲れさま。」

「凛兄い…………うん、そんなに走つたりはしなかつたけどね」「

「…そつか、ゴメンな…。」

「ん?何言つてるの、凛兄いのせいじゃないよ?…私は運動が苦手だから、皆に迷惑にならないようにつてしまだけ!……ホントだからね!…?」

未来はちょっと始めるよ！」俺のせこなのを自分のせこと並んでくれた…。

ホント、優しいよな 未来は……。

「うん、そっか…。ありがとう、未来…。」

「なんで凛兄いが感謝するかな？」

「はははっ、そうだな、未来…後半はどうするんだ？」

「一応、さつきみたいにして試合にでるよ？かなちゃんも後半から出るみたいだから」

「そつか、無理しない程度に頑張つてな？……で、かなちゃんって誰だ？友達か？」

「うん 中学校からの友達だよ？知らなかつた？」

「あ、ああ、知らなかつた。…だつてお前、今まで家に友達連れて來た事無いし…。」

「わついえば、そつだつたね？…かなちゃん、来て〜ッ！…」

未来がそつ呼ぶと小ちい、小動物のよつな女の子が走つて來た。あれ？アイツつて……。

「紹介するね 私の親友のかなちゃんだよ」

「叶ツー！？」

「先輩ッ！？」

走つて来た未来の友達は……美波
叶……その人だった。

第13話・球技大会~~一日目~~〔中編〕（後書き）

今週一週間は毎日更新します。

それに、学校が始まってからも、1日で更新できる時はするので…。

これから、凛矢はどうなるのか…。

第14話・球技大会～（後編）（前書き）

やつと、一日目が終りました。
それじゃ第14話どうぞ

第14話・球技大会～日田～〔後編〕

未来が連れて来た中学校からの親友……。

その女の子は、俺が2年生になつてからいろいろとあつた美波 叶
その人だつた……。

「ふえツ！？」一人とも知り合いだつたのツ！？」

「未来ちゃんのお兄さんつて先輩だつたんですかっ！」

二人の疑問が重なつた……。

結果、俺には一人の疑問を聞き取る事ができなかつた……。

「は？ 同時に言つたつて対応できねえよ……それで？ まず、未来
はなんだつて？」

「う、うん……。凛兄いとかなちゃんと知り合つたんだ？」

「ああ、始業式の日にぶつかつてからいろいろあつてな……」

つか、そういうや俺が初めて叶とぶつかつた時、アイツ友達なんて言
わなかつたじやん……。

「ああ～、そういうえば、あの時ぶつかつてたね。かなちゃんと凛兄
い……。かなちゃんとジでいつも転んだりしてたから、呆れてたんだ
よね、私……。」

なるほど、叶はやっぱドジっ子属性つて事か……。

うん、ストライクゾーンだ……。

「多少はわかつた……で、叶は？」

「はい、私は未来ちゃんにお兄さんがいるとは聞いてたけど、まさか先輩だとは思わなくて……。」

「なるほど、聞きたい事はわかつた……。未来はれつきとした俺の妹だ。それより俺は、叶が未来の友達って事に驚いた……。」

「まあね、一度も家に呼んでなかつたし……。かなちゃんはけっこ恥ずかしがり屋だしね」

「　　「　　「　　「　　」　　」　　」

なんか、他の皆は状況が読めてないみたいだな……。
まったく、順応性が悪いなー、皆……。

「アンタとは違つたよ……。」

……！？

ど、読心術！？

「違うわよ……。アンタの考えてる事ぐらいい、田を見れば簡単にわかるつだけよ……。」

そんなに分かりやすい田をしてるのか、俺？

「やつよ……って、しつかり喋りなさい……。」

やつぱり通じてるみたいだな…。

麻美……可愛いよ……。

「な、なななな何言つてんのよッ！バカツ！！！」

「俺は何も言つてないぜ?」

口ではやつぱりおこで、心中では…

キス……していいか?

..... ! ! ! . / / / /

ボッ」と音がしそうなぐらいに勢い良く顔を真っ赤にして、麻美はうつ向いてしまった…。

ちと、からかい過ぎたか……。

「……凛矢……。……」の前のせりの子の事か……？」

この前つてのは初めて図書室に行つた時の事か…。

「ああ、そうだよ。」

あまり詳しく話すのは叶も嫌だろ?つと思ひ、詳しくは黙つていた…。

「アンタせどりのへ、年下にまだ手を出しあつて事ね……。」

「そんな人聞きの悪い言い方をするなッ……」

「なんでこつもお前ばっかいい思いをしてんだよー。」

【バーニッシュ】

「お前はいつも、Are you o·k·?」

「…イエス アイ アム……。」

俺は睨み付けるを覚えたようだ…。

「そんな事はいいとして、叶が未来の友達って事もわかったし…。今度、家に遊びに連れて来な?」

「うだね、凛兄いならかなちゃんも氣負いしなくてすみそりだもんね」

「はーーー今度機会があつたら絶対行きますーーー」

「かなちゃんこのこんな喜んでる姿、初めて見たよ。」

「はうーー?いや、これは、その、あんまり友達の家に行つた事が無いからって事で……」

「はーーー そりやの事にしてあげる」

「そんなあ、未来ちゃん……」

そんな楽しいハーフ時間のおかげで、暗くならなずくに済む事が出来

た…。

後半も未来はあまり走らず、それでも楽しそうにプレーしていた。叶は後半から試合に出たが運動音痴らしへりゅうかとこいつとボールから逃れるようにしていた。

そして、試合が終了…。

結果は

3 - 1で1 - Aが勝つた…。

俺としては多少なり複雑な気分だ…。

時はかなり進み、俺達は今日のラスト試合に出ていた…。

未来達は、第2試合で2年生とあたってしまい接戦ながらも負けてしまった…。

俺達の次の相手は3 - B aチームだ…。

俺達のもうひとつチームであるbチームもまだ残っていて、当たるとしたら決勝で当たるようになつていて…。

そして、第3試合

2 - A aチーム

V S

3 - B aチーム

『それでは、第3試合を始めてください…!』

その言葉と同時に俺達は猛攻を仕掛けた……。

「ふう～、疲れた～。」

「うん、お疲れさま、凛兄いと麻美さん」「お疲れ 凛くんと麻美ちゃん」

「うん、ありがと…。未来ちゃん、夏芽…。」

「ああ、応援サンキューな、未来も夏芽も…。」

「ふふ、凄い疲れてるね?一人とも」

「笑い事じやねえって、夏芽…。」

そう、この疲れは第3試合の猛攻によるものだ…。

麻美、直樹、それにサッカー部が一人フォワード…。

俺と和磨、美香がミッド兼フォワードでかなりの攻撃を仕掛けた…。

結果が9-1という、ヤバい得点を叩き出した。

失点の1点もコーナーキックから上手く決められたものだった…。

今日は、ホントに疲れた1日だった…。

まあ、明日はソフトがあるが、今日よりかは疲れないだろう…。

今日はホント、いろいろありすぎだ…。

でも、久しぶりにかなり楽しいと思える1日だったのも確かだ…。

去年ではありえなかつた事……。

それは、俺が変わり始めているという証拠……。

何かが俺の中で変わり始めていた……。

第14話・球技大会1日目・「後編」（後書き）

さて、次の競技はソフトにするつもりです……。
それでは。

第15話・球技大会2日目..(前書き)

更新完了!

作者、宿題が残つてます。o(T T)o

そんな事より

第15話どうぞ

第15話・球技大会2日目…

今日は、球技大会2日目だ…。2日目はソフトの試合がある。
今日もベスト4まで決めるらしい…。

俺はセカンド、直樹はキャッチャー、和磨はファースト、夏芽はあまりソフトが苦手らしく外野、百合は何故かピッチャーという、なんか微妙な感じだった…。

しかも、俺が1番、夏芽が9番、和磨が3番、百合が2番、そしてバカは『4番じゃなきゃ嫌だーッ！』と駄々をこね始めたので4番に決定した…。

『さて、今日で2日目になります球技大会。今日の競技はソフトで5つのコートで試合します。五回まで戦い、延長は無しです。引き分けの場合はじょんけんで決めてもらいます。』

五回まで頑張つてまでじょんけんで負けたんじや洒落になんねえな…。

『それでは、始めてください…。』

試合が始まった…。

俺達は第2試合に入っているので今は暇になる…。

「ちょっと凛矢、しつかり応援しなさいよ…。私達のクラスのbチームが試合してるんだから…。」

そう、今は2・Abチームが試合を行なつているため、俺達は応援

に来ていた……が……

「だつて、知らない奴ばっかだもん……。」

「アンタつてホント周りに興味ないのね……。」

麻美は呆れたと言ひながら、俺に言ひてきた……。

「ううせえ、だつてまだ一週間しか経つてないじゃん。長く感じたけど……。」

「そうだけど……去年一緒にクラスの人気がつこうこうのよ~あそこには……。」

そつ言つて麻美はりチームが試合を行なつている場所を指して言つた……。

「わかつたよ、まあ、見といて損はないか……。」

「損得の問題でもないでしょ……。……まつたく、私にも興味つてないのかな……。」

俺は試合に集中してしまつたため、麻美のその弦きに気づく事はなかつた……。

試合はまあ……ボロボロだつた……。

相手のピッチャーは野球部らしく、ほとんど打つ事が出来ていなか

つた…。

その割に敵にはじょんじょん打たれてしまい……結果、23 - 1で負けてしまった…。

さて、次は俺達の番だ…。

ちゃんと前の試合を見といたお陰で多少は参考になつた…。練習はしたけど、イメージも欲しかつたしな…。

そして、俺達の試合が始まつた…。

相手は3 - A aチームと書いて、なんか似ているチームだ…。名前だけだが…。

俺達は先攻になり俺が一番最初にバッター ポツクスに立つ。うわあ、かなり緊張する…。

相手ピッチャーは「ゴッ男」。もちろん、前とは別の人だ。

ゴッ男は俺をかなりの勢いで睨む（若干引いた）と、ボールを投げた…。

【ズバーンッ】

……早い…。さすがは「ゴッ男」…。その「ゴッ男」は伊達じゃないか…。だが…打てなくはないはずだ…。

「ゴッ男」が2球目を投げる…。俺はグリップを握り思いきり振つた…。

【カキーン】

俺の打球は内野の頭を飛び越え、外野までスムーズに飛んでいった。

俺はダッシュで走り、なんとかセカンドまでこれた…。

2番目は百合…。

百合は一球目を見送り、二球目はファールと追い込まれてしまった…。
そして、3球目…

【カキー】

百合の打球は外野当たりまで飛んでいった…。

俺も走り1、3塁…。

相手のゴツ男はかなり悔しそうにしながらも、またボールを投げた…。

……愚かな奴だ…。和磨にそんな投球が通じる訳があるまい…。

【カキー】

初球から思いきり振った和磨の打球はかなり2ベースヒット、結果、2点追加で2塁になつた。

そして、ゴツ男は膝を着いていた…。

次はバカだ…。だがアイツはけつこう運動神経がいいし、体育だけは真面目だから大丈夫だろう…。

【カキー】

バカの打球はかなり遠くまで飛んで行き、審判がホームランだと告げる……。

一回表が終わった時点での状態だ……。

そして、敵の攻撃になつた……。

百合は早さもゴツ男まではいかないがけっこづ早く、そして変化球も投げられるらしく、三者三振に抑えてチェンジ……。敵はもう絶望という感じの表情をしていた……。

試合は順調に進み、25-0で「ホールド」に持ち込むという凄い状態になつてしまつた……。

観客席の生徒達もスゲーなどと感嘆の声をもらしていた……。

そして、第2試合も圧勝した……。

相手は1年で可哀想なほどの惨敗ぶりだった……。

……ちよつと泣いていた子もいた……。

そして、昼休みになり、皆で食つたために集まるのだった……。

「しかし、いつも簡単に勝ち進むとは、策略的な物を感じるな……。」

「はあ、皆、凄い運動神経いいからね……。」

夏芽は溜め息を吐きながら羨ましそうに言った……。

「元気出せよ、夏芽 足引つ張つての訳じゃないんだから……。」

「やうだけど……。百合はこいなあ、変化球も投げられるんだもん……。」

「

「ふふ 只、器用なだけですよ」

いや、器用なだけで変化球投げるとか、貴方は化け物ですか……。

「先輩つー・凄くカッコよかつたですー。」

叶が大きめな声でそう言つてきた……。

……なんだろ……叶に褒められると嬉しい嬉しい……。

俺は叶に優しく微笑みながらありがとうと伝える。

「ああー、かなちゃんつー・何凜兄いとイチャイチャしてゐるのかなー

？」

未来がそんな事を言つたせいで全員の視線が俺と叶に集まってしまつた……。

……叶との会話を邪魔しやがつて我が妹君よ……。

「え、そ、そそそんな訳じやつー／＼／＼／＼

叶は顔を真っ赤にしながら否定した……。

……なんか寂しいな……。

寂しいから、苛めてやるか……。

「そんな訳じゃなかつたのか？俺はそれの方が嬉しいのに……そんなに否定するんだ？」

「あ、いえっ、そんな、私は先輩の事が嫌いって訳じゃなくて……
……その、どちらかと言えば……」

「早く食おうぜーっ……」「……」

くそつ、あのバカのせいで肝心なところを聞けなかつたじやねえか
つ……

あれ？……俺、周りに興味とか無い筈なのに……なんで……叶
の言葉を聞きたいと思つてんだ？……

……俺は……変わり始めているのか……今までの自分から……。

そんなこんなで昼休みは終わり、午後の試合も終わりを迎えた……。

俺達はベスト4に入り、球技大会2日目が終了した……。

第15話・球技大会2日目（後書き）

球技大会2日目が終了。
次は3日目になります。

さて、更新完了！

総ユニーク数が50000人を越えました
これもすべて読者様のお陰です
ありがとうございます
それでは第1-6話どうぞ

第16話・球技大会3日目〔前編〕

夕暮れの帰り道を俺は女の子と歩いている…。
女の子の顔は分からない…。

夕焼けのせいか、これが夢だからなのか、でも分かる事は、俺はこの子がとても好きだという事だった…。

女の子が誰かも分からぬ…。この世界に存在する子なのか、それともしないのか…。
でも、俺は彼女に微笑みかけている…。

『大好きだよ… …。』

肝心な部分は何も聞こえなかつた…。
女の子は顔を赤らめながらも、俺に微笑んだ。
でも、顔は見えない…。何故、彼女が照れているのが分かるのか…。
きっとこれが夢だからだろう…。

また、世界が白くなつていく…。

これは、正夢なのか、只の夢なのか…。
でも、これだけは言える…。

彼女は俺にとって、愛しい存在なんだと…。

目が覚めた…。

時計を見るにまだ、6時になつたばかりというところだ…。

「…………もつ一度寝るかな…………。」

俺はそう呟いてみたものの、全然眠気がなくなつたらしく……。

「…………あの夢のせいいか…………俺の貴重な睡眠時間が…………。」

俺はそう言しながら、布団から出て一階に降りていく……。

「まだ、未来は起きてないのか……。」

一階はまだ暗く、未来が起きていない事を告げる……。

俺はお湯を沸かし珈琲を作つた……。

「コーヒーは嫌いではないが、苦いのと口に匂いが付くのがあまり好み……。

珈琲を飲みながら、今朝の夢について考えていた……。

「あの夢はなんだつたんだ?…それにあの女の子は……。」

考へても考へても何も答えが出ないまま時が過ぎ、階段を降りる音が聞こえてきた……。

「え!…? 凜兄い!…? なんでこんな時間に起きてるのー?…」

未来は叫びとも聞こえる声を発しながら、俺に訊いてきた……。

「田が覚めたんだ…。また、夢のせいだな?…」

未来はそれを聞くと少し不安気に訊いてきた……。

「……大丈夫?……つなされたりしたの?」

「いや、悪夢とこつよりかなり幸せな夢だった。」

「……幸せな夢?」

「ああ、よく分かんないけど、かなり幸せな夢だった。……暖かくて…心地よくて…そして、凄く安心する夢だった。」

「へえ~、でも、よかつたね 悪い夢じゃなくて それに幸せな夢なら、きっと良いことあるんじやないの? 凜兄!」

「ふふ やうかもな」

俺と未来はいつものように仲良く朝食を楽しんだ。

今日は球技大会3日目、バレーがベスト4まで決まる。今のところ、サッカーではa・bチーム両方、ソフトではaチームがベスト4までいっている。

そして、今日はバレーの日。

俺は試合に出ないが夏芽と百合、麻美に美香と俺の周りのメンバーが出るため、応援せざるを得ない。

応援をしないつもりではないが……絶対勝つって、アイツらは。

ひーき田に見ても、美香と麻美の「ンビ」は強いし夏芽はまあ、なんとかなるだろ。

百合はけつじゅう器用…とこつより運動神経がよかつたし……普通に勝てると思ひ。

俺は和磨、バカ、未来、叶とともに、2 - A a チームの応援に来ていた…。

ちなみに、左から叶、未来、俺、和磨、バカの順で座っている…。

『それじゃ、球技大会3日目…！ 試合開始いーッ！…』

なんか、今日はかなりテンションが高いな、放送係…。

第1試合

2 - A a チーム

VS

2 - C a チーム

まず、百合のサーブから試合が始まった…。

相手はそれほど強そうには見えないがどうなのだろう…。

百合のサーブは相手に防がれ、相手のアタックがきた…。

相手のアタックカーと並ぶように飛んだ夏芽と美香…。

ボールは美香の手に弾かれ相手コートのラインギリギリに落ちた。

続いて、麻美がサーブを打つ…。

かなり鋭く飛んでいったボールは回転がかかっていたらしく、相手が防いだと同時に変な場所（バカの顔面）に飛んできた…。

【バシイインツ】

「へふしつー！」

ボールはバカの顔面に突き刺さり、下にはねかえつていった…。

「　　」…………「　　」

俺達はさすがに悲惨に思い、言葉を失つた…。

試合は2 - Aが勝つた…。

麻美が殺人アタックを打てば、相手は避けるという勝負にすらならない感じだ…。

ミスも、チームメイトがおこした凡ミスによる失点だ…。

「麻美さんって凄いね…。」

未来がちょっと、恐怖を感じながらも俺に話し掛けてきた…。

「俺と直樹はあれ以上の力で叩かれてるがな…。」

うむ、悲しい事に自業自得な部分が多くて、あまり恨む事ができない…。

「あ、あれより強い力で叩かれたら死んじゃいますよ、先輩…。」

「いや、何故か死ねないから余計に地獄を味わってるぞ…。」

うん、俺はきっと天国に行けるだろ?…。

「凛兄い、命は大切にね…。」

「先輩、怪我だけはしないでくださいね…。」

1年コンビは俺が叩かれる事を前提に話していやがる。悲しいよ。涙がなんかしょっぱい汁が流れてくれるよ。グスン。

そんなやり取りをしながら、俺達は麻美達が来るのを待つた。

今後もよろしくお願ひします！

第17話・球技大会3日目・「後編」（前書き）

さて、今回の話から登場人物紹介を多少入れます。
まあ、読んでくれたら嬉しいです

それでは第17話どうぞ

第17話・球技大会3日目〔後編〕

第1試合が終わり、俺達は麻美が戻つて来るのを待つていた。

「しかし、勝つとわかつてはいたがああも圧勝だとは……。」

麻美達はストレートで勝利した。

この球技大会では、全第3セットで先に2セットを取つたほうの勝ちだ。

第1セット

25 - 5

第2セット

25 - 2

失点が7つでどんだけ強いんだよ……。

予想はしていたが、ここまでとはな……。

周りからも「マジかよ……。」や「2 - A aチームとあたつたら終わるだな……。」などの声が聞こえてきた。

「あ、凛矢ッ。しつかり応援してくれたでしょうね?」

麻美達が俺達のところにきて話し掛けてきた。

「ああ、しつかり相手の方を同情で応援してあげてたよ……。」

俺は呆ながら、麻美に言つと、麻美は不機嫌そうになりだした。

「なんで、相手を応援してんのよ…。私達を応援しなやこよ……またく…。」

「いや、だつてお前ら強すぎなんだもん。なんか、応援する必要が無いと思つて…。」

「バカッ、応援するのは当たり前でしょ！？もづきー。」

「やうだよ、凛くん。酷いなー、私の事も応援してくれなかつたの？」

「いや、やうこつ詰じや……」

夏芽の言葉に俺はいりこりと困つてしまつた…。

「ふふふ 人氣者ですね、夜島くんは」

「ホントだね。しかも、いろんな美少女を、しかも上級生や下級生まで捕まえてね？」

「…女たらし…。」

「羨まし過ぎるバーッー。」

なんか、全員の波状攻撃を受けてHPがかなり減りました…。
でも、バカだけは殴つておいた…。
…だつてなんかムカつくし…。

「あの、あまり先輩を苛めないであげてください…。」

ああ、叶がまるで天使のようだ感じる…。

なでなで…

「はう！？ セ、先輩！？ 何をつ？」

「ん？ いや、庇ってくれたお礼だよ。 ありがとうございます。」

「あう、い、いえ、びりこたしましてです。」

「うわあ、叶がかなり可愛く感じるよ…。」

「かなちゃん、凛兄いとイチャイチャし過ぎだよー。」

「ちょっとー、何叶ちゃんを口説いてんのよ…。」

…しまった、皆の視線が痛い…。

「いや、皆が苛めるから悪いんだ！叶だけだ、俺の味方はー！」

俺は叶に泣きつきながら、血業血得な事を言っていた…。

「…まあ、[冗談は無にして]…。…お疲れ様、四人とも…。」

「うん、ありがと、和磨。」

「サンキュー、和磨」

「ありがと、和磨くん。」

「はい、ありがとうござります 橋本くん。」

四人とも、それぞれに感謝の意をのべた…。

「どうする？他の場所にでも行つて話すか？此処じゃ、皆から視線が集まるからな」

「えッ！？」×多数

直樹が急に普通モードで喋つてたため、皆かなりびっくりしていた。

「…もしかして、「イイツつて二重人格なんじや…？」
と思つたがそれは無いなと思い、その説は却下した…。

「…そうだな…。…中庭にでも行くか…？」

「だな。中庭なら」つからも近いし、放送も聞こえるから、戻るのに楽だしな…。」

「…うだなと皆が賛同し、俺達は中庭に向かつた…。

「しかし、人がほとんどいないな…。」

「そりゃそりだよ 皆、バレーの試合を見に体育館に行つてるんだから」

俺の疑問に夏芽が当然だよと言いながら、答えてくれた…。
「…そういうや、夏芽つて転校生なのにかなり馴染んでるな？どうして
だ？」作者…。

「すみません、俺に聞かないでください……お願いします……。」

「誰と喋ってるのよ…アンタは…。」

麻美が俺の思考を読んだらしく…。

「…やつよ…。」

もひつひじむのは止めよう…。

「…なんでよ…。」

「なんでよじやねえよ!人の思考を読むな!」

「何よ、そんなに読まれたくない事でも考えてるの?..」

「ちげえよ! 僕の人権についてだよー!」

「いいじゃない、幼なじみなんだし。」

「なんだよそりや、しかもなんでそんなこ、俺の思考を読もうとするんだ?」

「…………なんでも、いいじゃない。」

「何だよ、その間は…。」

俺は呆れながらさう言い、これからは何か考える時は、気をつけよ
うと誓つのだつた。

「そりそり、第2試合が始まる時間だな。戻ろつぜっ。」

「うん、そうだね 実行委員が付いていながら遅れたら申し訳ない
しね」

百合はそう言いながら立ち上がり、皆もそうだねと体育館に向かつた。

後、2日…。

去年出なかつたこの球技大会…。

俺はこんなにも楽しく思つてゐる…。

仲間がいてよかつたと思っている俺…。

あの時は違うんだと思うと、俺は嬉しく思つ…。

そして、体育館に向かう仲間達を見ながら、俺の顔も自然と笑つて
いる事に俺はとても、驚いていた…。

登場人物紹介

主人公

夜島 凜矢

(やじま りんや)

16歳、魚座、O型

誕生日

2月23日

趣味

睡眠、ケータイ小説、人を苛める事

好きな物

甘いもの、神などの幻想的なもの、人を苛める事、騒がしくなぐが
静か過ぎない空間

嫌いな物

良識を持たない人、苦いもの、変な味のするもの、騒がすぎる空間

本作の主人公。

寝る事を一番の至福とし、寝具に名前（敷布団闇下、掛布団王妃、
枕メイドなど多数）をつけるがネーミングセンスが感じられない。
リムレット 喫茶店 R i m l e t で週三回バイトをしている。

自分の容姿がカッコいい事に気付かず、むしろ悪い方と考えている。
だが、鈍感とかでは無いようでたまに鋭い一面を見せる。
妹を心から愛するシスコンだが、前に何かあつたらしく互いに過剰
なまでの心配をしていて、まだ仲の良いだけの兄妹ではないようだ。
神などの幻想的なものが好きで、きっと居ると思っている。
変わり始めた日常を考えるなど、毎日を大切にしている。
度々、変わった夢を見るため、不思議に思っているがあまり気には
していない。

「まあ、こんなもんですかね」

「 もう少し書いてもよかつたんじゃないか？」

「いや、あんまり書くとぐどいかなって…。」

「そりゃ、少し残念だな…。」

「まあ、また機会があつたら追加でな 」

「機会が有ればな……。」

「…………まあ、なんとかなるさ。これから的发展に期待だな 」

「何を呑気な事をツ」

次回は麻美の紹介します それではノシ

第17話・球技大会3日目・〔後編〕（後書き）

次回は4日目に突入します
約束まで後少しだけです
作者の学校の始業式までも後少しだけです。

第18話・球技大会4日目・〔前編〕（前書き）

今回はラストに穂村 麻美を紹介します
それでは第18話どうぞ

第18話・球技大会4日目…[前編]

球技大会4日目…。

今日はソフトの準決勝、決勝を行い、しかも、サッカーの準決勝までをやる事になっている…。

負けたクラスなども、たくさん応援に参加し、裏ではどのチームが勝つかを賭けているという噂もある。

それに、それぞれの競技で三位以内のクラスには食券が配られるため、皆けっこう張り切っているのだ。

教師もボーナスが出るらしい……。

…それでいいのか、この学校は……。

そして、今日は3つの競技の内、ソフトの優勝クラスが決まるので、かなりの人気があるのだ…。

…皆、どんなチームが優勝するか興味があるらしい……まあ、俺は今年、出場する方なんだがな……。

「よし、それじゃあ皆ツー優勝田指して頑張ろツツー」

皆を纏めるこのお方に、本田で一度田になる如月 雪さんわづるゆきだ。

「やつと、私にも一度田の出番が…。でも、第1試合に名前が出てこなかつた氣が…。」

それを言つてはいけないよ、如月さん…。

作者もやつと思い出したんだから……。

「……後2勝だな、凜矢……。」

思考の中に潜んでいたら、和磨が俺に話しかけてきた……。

「そうだな。まあ、このチームならたぶん大丈夫な気がするんだけどな……。」

如月さんは監督の様に俺達を纏めてくれるし、百合は未だに数本しか打たれていない……。

バカや和磨も申し分ないし、夏芽も頑張つてくれている……。このチームを超えるチームがあつたら逆に凄いと思うな……。まあ、この学校の生徒会が全員集まつたらもしかしたら負けるかもしれないが、クラスごとならたぶん最強だろう……。

でも、侮らない方がいいな……。相手を見くびっていると痛い目を見る……どんなにわかっている結果であろうと、最後まで氣を緩めるな……。じいちゃんがいつも言っていた事だ……。

「……どうした……？」

「いや、なんでもねえよ。氣を引き締めていこうな」

「……ああ……。俺達が強くても、相手だつてベスト4に入るチークだ……。それなりの力量がある……。」

「そゆ」と わかったか?バカ直樹。

「はーい わかりました!」

やつぱバカだな「イツは……うん、もうあり得ないってぐらいバ

力だ……。

『それでは～！準決勝を～！始めてください～！』

なんか凄い間延びした氣の抜ける声とともに準決勝が始まった……。

2 Aaチーム
VS
2 Eaチーム

「いい？ 最初からガンガン攻めていくよ～！？」

俺達は先攻、という事で俺は今バッターボックスに入っている訳だ
……。

相手ピッチャーは女の子……。

スラッシュしたボディーに肩までの髪、顔も可愛いといつより綺麗に
近かつた……。

……やべ、滅多打ちにして泣いた顔が見たい……。

俺は自分の苛め衝動（ドゥ心）を感じながらも試合に集中する……。

如月さんが言つには、あの子は一番初球をど真ん中のストレートに
投げるらしい……。

女の子はモーションに入る……。

という事は泣かすなら初球だ！

俺は女の子の投げたボールをフルスイングで打つ……。

【カキーーンッ！】

俺の打った打球は外野を軽々と越え、茂みに消えた…。審判はホームランだと伝え、大きな歓声とたくさんの驚愕の声があがつた…。

相手チームもかなり動搖している…。

俺はホームベースに戻った時、ちらりと女の子の方を見てみると、驚きと悔しさで目が少し潤んでいた…。

「凄い、凄いよ…凜くん…」

戻つたと同時に夏芽が抱きつきながら叫んだ…。

「ちよ、夏芽、抱きつくな…。」

俺はなんとか夏芽を引き剥がしながら如月さんに感謝の意を伝える…。

「ありがとう。如月さんのお陰だよ」

「いえいえ、まさかホームランにあるとは思わなかつたけどね」

如月さんは照れながらも、冗談を言つてきた…。

「でも、よく知つてたね。一番初球がど真ん中だつて…。」

「まあ、勝つための資料だよ…。偵察はしどこで揃は無いからね」

改めて、如月さんの凄さがわかった…。

2番の百合も2ストライク2ボールから2ベースヒットと2死ぐしの行動をしていた…。

3番の和磨は初球は見送り、2球目に無難にヒットを打ち、1、3塁になつた…。

4番の直樹は初球から2ベースヒットを打ち、和磨は直樹が打った時にはもう一塁に着いていて、其処から2点が追加された…。

その後もどんどんと走者をだし、一回が終わった時には5 0の状態になつていた…。

相手の子は暗い表情をしている…。

「よし、守りもしつかりね！」

「お～～～×多數」

如月さんの言葉に全員が応える…。

守りも百合が二者二振にして一回が終わった…。

そして、試合は着々と進み、この打者を抑えればコールドで終わる…。

【バシイイング】

「ストライク！バッターアウツツ～ゲームセットラ～！」

試合が終わつた。

整列する直前…。あのピッチャーの女の子を探してみるとあの子は何処かに走つて行くところだった…。

「ワリイ、俺並ばないからよろしく」

「え…? ビュこと…?」

如月さんは叫びながら俺に聞いてきたが、それに構わずにあの子を追いかけた…。

……なんで俺はあの子を追いかけてんだ?……今まで喋った事もない人間なのに…。

……知らない人物、初めて見た人物、なのに……なんで……。泣かしてみたいとか思つた罪悪感?

……それとも……。

俺は彼女に追いつく為にペースをあげた…。

穂村 麻美
(ほむら あさみ)

16歳、牡羊座、A型

誕生日

4月20日

趣味

剣道、読書、凛矢やバカの肅正

好きな物

可愛いもの、リムレットのケーキやパフェ、剣道、凛矢？

嫌いなもの

負ける事、曲がった事、煩い場所、ピーマン、虫

本作のヒロインの一人、勝ち気な性格で負けず嫌い。

ショートの黒髪に整った顔をしていて、美少女だが胸が小さく、コンプレックスにしている。

凛矢とは夏芽が引越してから知り合い、それ以来幼なじみになった。

麻美の勝ち気な性格は凛矢が関係しているらしい…。

凛矢にはけつこう好意を抱いているが、なかなか素直になれない。

凛矢の周りに女の子が多いのでけつこう悩んでいる。

剣道の腕は全国に行けるほどの実力。

「ヒロインって事はまだ2、3と続くという事です」

「なによそれ、私がメインがじゃないの？」

「まあ、まだ最後どうなるかって決まってないから……。」

「これから頑張り次第で凛矢と……ブツブツ……。」

なんか、妄想の世界に入ってしまった麻美さんは放つておきます。
ポイッですよポイッ

次回は柊 夏芽を紹介します ノシ

第18話・球技大会4日目・〔前編〕（後書き）

えーっと、新キャラ?かもしだせん…。
次回は終 夏芽を紹介します

第19話・球技大会4日目〔中編〕（前書き）

今回は柊 夏芽を紹介します

作者の宿題が終わりません。 (×—×：)

そんな事よりも

第19話どうぞ

第19話・球技大会4回戦〔中編〕

相手ピッチャーの女の子、透き通る様な白い肌で綺麗な顔立ち。でも、女の子は泣いていた。

泣きながら走る彼女…。

実際、彼女が泣いている意味が分からない…。
滅多打ちされたからかもしぬないが、其処まで泣く事でもないだろうと思いつ…。

でも、実際彼女は泣き、俺は追いかけている…。

俺は手を伸ばし、彼女の手を優しく、でも強い力で引き寄せた…。

「あやつ…」

【ギュウッ】

俺はなんとか彼女を抱き寄せた…。

「……は…なして…ぐださい…。」

「それは却下…。また走られても嫌だし…。」

「……走り…ませ…んから…。」

「でも駄目…。泣き止むまでは離さない…。」

俺は彼女を抱きしめながら、何で泣いているのかを聞いた。

「今さらかもしれないけど、何でそんなに泣いてるの？」

彼女は少しだけ涙が止まつたらしく、ポツポツと話始めた。

「……私……昔から、父親に厳しく育てられて……マナーとか、習い事とか……して……やるからには一番になれて……言われて……だから、私言い付けを守れなくて……だから……だから……だから……」

【ギュウッ】

俺はさつきよりも強く彼女を抱きしめた。

壊れそうなほどに細いその体を抱きしめながら、俺は言った。

「君がなんでそんなに言い付けを守りつとするのかは分からない……でもさ、人間なんてそんなもんだ……。すべて一番になれる人間なんていない……」

だから……一番にこだわる事無いと思つ……。言い付けだからつて……ずっと、守り通せるはず……ないんだからわ……。どんなに守りたくて……」

「でも、私はそうしなくちゃ……。」

「それは自分の意思?ホントは一番にこだわっていたくないんじやない?」

「や、そんな事……。」

「ないつて言える?」

「…………」

「言えないよね……。心中では嫌がってる……。例え自分の意思で一番になりたいと思つても、一番以外が許されないのを君は嫌だと思つてる……。」

「…………」

彼女は小さく声で呟ひついた。

「うん、ならそんなに泣くな……。こだわる必要は無い……。君が頑張つていたのは、一生懸命だつたのは、敵だつた俺が見てて一番知つてるから……。」

「…………うえつ…………ああ…………ぐすり…………。」

「ほら、泣くなつて　一これからは俺がりやんと、頑張つてる姿を見るから……。」

「…………うん…………うん…………。」

彼女は晴れやかな笑顔で俺に笑いかけた。

彼女が笑つた瞬間、俺の胸が跳ねた。

彼女がとても愛しく感じ、またギュッと彼女を抱きしめた。

【ドキンッ】

「…………ありがとう　夜島　凛矢くん　」

「ああ、つてなんで俺の名前を…？」

俺は彼女の口から出た自分の名に驚きながら聞き返した…。

「ふふ だって、貴方はとても有名だから」

彼女は女神の笑顔で微笑みながら俺に言つてきた…。

俺が有名? 何でだ? ……ああ、周りに美少年と美少女がいるからか……。麻美に夏芽、美香や百合に叶と未来も美少女と言える。それに、和磨と…認めたくはないがバカは美少年だからな……。はあ、きっと浮いてるんだろうな、俺……。釣り合わないって遠巻きの人は思つてるんだろうな、どうせ……。

「? どうかしました?」

「いや、何でもないよ…。」

「私、嬉しいです」

彼女は唐突に何かを話し始めた…。

「何がだ?」

「初めて、人から頑張つてると認められたからです それに、認めてくれた人が貴方でよかつた」

「ははは それは光栄な事だよ、お姫様」

「ふふ　でも、何故私が認められたいと想つていてると思つたんですか？」

彼女の疑問に俺は穏やかに答えた……。

「昔、教わったんだ…。相手を知りたいなら目を見ひ…。口から出た言葉が嘘か真か、知りたいなら目を見れば分かる…ってね」

「と言つ事は私が嘘を付いたってわかったんですか…。」

「そういう事　」

「あつ、り、凛くん…えつと、次の試合が始まるから、来て…」

「うあつ… 夏芽か…びっくりした…。ああ、わかつたすぐ行く！」

俺は夏芽にそう答えてから彼女に言つた…。

「それじゃ、俺は決勝に行くから…。俺の頑張ってる姿見に来てくれよ、えつと…」

「私の名前は巫 瑞衣だよ　」

「そつか、それじゃ瑞衣。応援に来いよ　それと、他になんの競技に出るか教えてくれ　」

「ふふ　私は後、バレーだよ　応援してね？凛矢くん　」

「了解！俺はもう一つはサッカーだから。そんじゃ、また後でな、

瑠衣」

俺は瑠衣に別れを告げていつもと様子の違う夏芽と一緒にソフトのアソブへと向かった…。

Nature Hiragi

私は凛くんを探すために凛くんが走つて行つた方を探した…。

私は校舎の角を曲がつた時、それを見てしまつた…。

「な……んで……凛くんが……。」

女の子と抱き合つてるの?

私は目を疑つた…。

しかも、相手の子はわざと戦つた相手ピッチャー…。
付き合つてるの? 凛くん…。

心の中で聞いても答えは返つてこない…。

胸が締め付けられる様に痛い…。

なんで? なんでなの?

疑問が頭の中を渦巻く…。

私は彼を呼んで確かめたいと思つた…。

「あつ、り、凛くん! えつと、次の試合が始まるから、来てー。」

でも、口からは思つている事と別の事が溢れだした…。
凛くんと女の子は楽しそうに笑つてる…。

私は手首に着いている、銀色の腕輪をそつと撫でながら、泣きそつ
になる気持ちを必死に押さえ込んでいた…。

登場人物紹介

ヒロイン2

柊 夏芽

(ひいらぎ なつめ)

16歳、水瓶座、O型

誕生日

2月3日

趣味

料理、読書

好きなもの

甘いもの、凛くん、ラブストーリー、

嫌いなもの

苦いもの、虫、寂しい空間

本作のヒロインの一人。
凛矢の幼なじみ。

幼い頃、凛矢と未来を含めた3人でいつも遊んでいたが、夏芽が引越ししてからは手紙のやり取りしかしていなかつた。

その頃から凛矢が好きで、お揃いの銀色の腕輪をプレゼントしたり、将来結婚する約束をしていた。

運動がけつこう苦手で、あまり体力がない。

今回引越しして来たのには理由がある。

基本明るくておとなしいと、変わった性格をしていて、悪ノリが好き。よく、えへへと特徴的な笑い方をする。未だに、銀色の腕輪を二人とも大事にしている。

「今日は柊 夏芽さんでした」

「えへへ ょろしくね~」

「でも、今話ではいろいろ大変な事に…」

「うふーん、思い出したくなかったのにー！」

「えー、すみません、夏芽さんが泣いてしまいましたのでこの辺で

…」

次回は神楽 百合さんを紹介します ノシ

第19話・球技大会4日目・〔中編〕（後書き）

次回は神楽百合さんを紹介します

第20話・球技大会4日目・〔後編〕（前書き）

今回は神楽百合さんを紹介します

作者は明日から学校です、これからは毎日更新が難しいですが頑張りますのでよろしくお願ひします

第20話・球技大会4日目〔後編〕

【さあッ！ とつとつこの時がやつて来ましたッ！ ソフト決勝戦ツ！ 優勝するのはどのチームなのか…？ それでは、始めてください…】

決勝戦が始まつた…。

2 A a チーム
VS
3 B a チーム

このチームとは因縁がある…。

それは、俺のクラスのbチームが第1試合で戦つた相手だからだ…。そりや、bチームも負けるよな…。決勝にくるほどのチームと当たつたんだから…。

まあ、絶対勝つて仇をとつてやるわ…。

俺はそう意氣込み、守りに向かつた…。

【パアーンッ】

「ストライクツー！」

どうやら、百合は全然疲れてないようだ…。
球のキレも全然衰えていない…。

【パアーンッ】

「ストライークツ！バッターアウツィー！」

あっけなく三振した一番打者…。

【パアーンツ】

続いて二番打者も討ち取った…。

三者三振…。

今までの試合で百合の球を打てた人はほとんどいなかつた…。

「神楽さんツー」のチームの四番バッターは危険だから…。秘密兵器を投入だよ！」

「はい、わかりました！如月さん！」

なんだ、秘密兵器つて…。まだ、何かあるつてのか？

百合と如月さんの会話を聞いた俺は、疑問符が頭に浮かんでいた…。

「一番バッター！早く来てください！」

「あつ！　はい、すぐ行きます！」

審判の声が聞こえ、俺は現実に呼び戻された…。

相手ピッチャーは野球部らしく、かなりガタイがよかつた…。

【パアーンツ】

「ストライーケツ！」

けつこううな早さの球がミットに突き刺さった。

「なつ……」

早さだけなら百合よりも早いぞ……。

相手ピッチャーがモーションに入つた。

【キン】

「ファールツ！」

くそ、追い込まれたか……。さすがは決勝戦だけはあるけど……。

相手ピッチャーがボールを放つた。

……でも、タイミングさえ掴めば……！

【カキン】

俺の打球は遠くへと流れるように飛び2ベースヒットになつた。

「ふう、びっくりした……。」

俺は観客席の方を見た。

……あ、いた……。

麻美達より少し離れたところにその子はいた。

瑠衣……。

俺はやつぱり来てくれた事に嬉しくなると同時に、頑張って絶対勝たなくちゃと、改めて気合いが入るのだった…。

続く2番バッターの百合もヒットを打つて1、3塁になつた…。

次のバッターは和磨…。

【パシッ】

「ボール、フォアツ！」

どうやら相手は1点を諦め、満塁にしてゲッター狙いらし…。
でも、次のバッターは直樹…。
アイツならどんなに早いボールでもゲッターにならなによつに打つ
てくれる筈だ…。

俺はこいついう時はかなり真面目になる直樹を信用する事にした…。

【カキーン】

「ファールツ！」

1球目はファール…。

2、3球目はボールとなつた…。
そして、4球目…。

【カキーンツ】

直樹の打球は遙か遠くに飛んで行き、観客席に落ちた。

満塁…ホームラン…。

ゲッターにならないように打つとは思つたが、まさかホームランを打つとは思わなかつた…。

直樹がホームベースを踏んでベンチに戻つて來た…。

「イイツヤツフオオオオオッ！　どうよッ！　これが俺の真の力だ！」

…直樹…さつきまでのお前だつたら、きっとお前の望むラブラブコメコメの主人公になれるようになつた…。自分でチャンスを潰すとは、哀れな奴だ…。

その後は、5番の如月さんが塁に出たものの、三人連続でフライに打ち取られ、初回は終わつた…。

2回の表、俺達の守る番になつた…。

俺は百合の秘密兵器というのがとても気になつっていた…。

相手バッターは四番…。聞いた所によると、相手バッターの人は今までの全試合、打たなかつた打席はないようだ…。

百合がモーションに入った…。

【パアーン】

！…ス、スライダーかよ…！

相手バッターも驚いている…。

今まで、百合の変化球はカーブだけだと思ってたが…まさか、スライダーも使えるなんて…。今回も失点0を狙つてゐるようだ…。

相手四番は驚きと戸惑いにより為す術なく、あっけなく三振に討ち取られた…。

その後のバッターにはカーブで充分らしく、スライダーは使わなかつたが全員三振にした…。

試合は2回3回と進み、試合はコールド勝ち…。

なんだか、弱点を見つけたらしい如月さんはそれを皆に言い滅多打ちにした…。

結果は25 0…。

これで百合は全試合無失点とあり得ないような結果を出した…。

サッカーの準決勝も難なく勝ち進んだが、bチームは負けてしまった…。

明日で長かつた球技大会が終わる…。

とこう事は明日は叶と出かけるという事だ…。

俺は自分でもキモいと思いながらも、緩む頬を直す事ができなかつた…。

ヒロイン③

神楽 百合
(かぐら ゆり)

16歳、乙女座、A型

誕生日

8月25日

趣味

読書、茶道、華道

好きなもの

優しい人、読書、静かな場所

嫌いなもの

曲がった事、軽い人、五月蠅い場所

本作のヒロインの一人

凛矢とは高1の頃から一緒に、その時にクラス委員の仕事を手伝つて貰つた事で知り合つた。

高1の委員長だつたために、凛矢から委員長と呼ばれていたが、この頃は違うようだ。

家は道場で茶道に華道、弓道など、様々な事をやっていて、かなりの凄い人。

綺麗な黒髪が印象的で、大和撫子という感じだ。

多少、凛矢に好意を持っているようだ。

何故か、皆に対して敬語を話しているが、本当はあまり敬語を好ま

ない。せめて自分だけにはタメ語で話すよう凛矢に言われ、凛矢にはタメ語を使っている。

「さて、今日は神楽　百合さんです」

「ふふ　よろしくお願ひします」

「しかし、よくよく見てみると、かなり大和撫子だな……才色兼備つていうか……。」

「ふふふ　ありがとうございます　でも、誉めても何も出ませんよ？」

「……なんか、俺が惚れそうです……」

次回は今井　美香さんを紹介します　ノシ

第20話・球技大会4日目〔後編〕（後書き）

昨日、ご指摘を頂き、第19話の終 夏芽さんの紹介を少しだけ換えました。

あまり変わつてはいませんので気にしない方はスルーしてください。

次回は今井 美香さんを紹介します

第21話・球技大会5日目・〔前編〕（前書き）

球技大会が5日目に入りました
今回は今井 美香さんを紹介します
それでは第21話どうぞ

第21話・球技大会5日目〔前編〕

球技大会5日目。今日で、長かつた球技大会が終わる……。

今日はサッカーの決勝の後にバレーの準決勝、決勝をやる。
負けたクラスも最後の1日のため、かなり賑やかになるだろう……。
叶との約束もある……。今日は金曜日だから、明日はバイトもある……。
今週はホントにハードだった気がするな、まだ終わってないけど、
体を動かし過ぎてけつこう疲れた……。
そろそろサッカーの決勝が始まる……。

『さあーッ！ とうとう来たぜ最終日ッ！ 優勝候補の2 Aaチームを倒す事が出来るのかッ！？ それでは、始めてくださいッ！』

試合開始。

2 Aaチーム
VS
2 Caチーム

決勝の相手が2年とは驚きだな……。

相手はいかにも運動神経が良さそうな軍団だ……。

ふふまあ、勝つのは俺達さ……。

俺達は最初からハイペースに相手ゴールを攻めた……。

ボールが俺に渡ってきた……。

ダッシュで近くにいる敵を抜き去り、俺は和磨にパスを出した……。

和磨は敵をフェイントで抜きながら敵ゴールを目指した。和磨が麻美にパスを出し、麻美の殺人ショートが炸裂した。相手のキー・パーは一步も動けず…というより怖くて動けなかつたようだ…。

相手がボールをキープし俺に突っ込んで来た…。
足が離れた一瞬の隙をついて、ボールを奪い取る…。

「よしひ

「凛矢！」

直樹が俺を呼ぶ声がしそちらを見たが、ビリやらバスは出せそうにない…。
…このまま行くか…。

俺はダッシュで相手を抜き去る…。

…一人…二人…三人…。

ペナルティエリア外だが俺はショート体勢に入る…。

【バシュウウウッ】

俺のショートはポストすれすれを通り、ゴールネットに突き刺さつた…。

「よしひしゃあ…！」

「よくやつたな凛矢…！」

直樹が俺を褒めるが、いつもがいつもなだけに、違和感が有りまくる……。

前半が終了……。

その時点での得点は 4 1。

……やはり、さすがは決勝戦だけあって無失点ではいかないか……。それに、少しでも油断するときっと追い付かれてしまう……。それぐらいの気迫が相手からは感じられた……。

「ふう、ちょっとキツくなってきたかな……。」

「……麻美と美香はバレーもある……。後半は俺達が大半動くから、アシストを頼む……。」

「ええ、わかったわ……。」

「了解だよ、和磨……。」

そして後半が始まつた……。

「よつしゃあッ！ 全種目優勝目指すぞッ！？」

「おーッー × 多数」

直樹のかけ声に皆が気合いの入った言葉を返す……。
ひとつに纏まっている感じが俺を嬉しくする……。
……これならきっと勝てる……。

俺達は相手ゴールを目指して走り出した……。

試合終了。

結果は10-3と後半は凄い状態だつた。

皆が勝つために一つにまとまつた結果だと俺は思つた。まあ、凄すぎる結果ではあるんだが……。

これで、bの仇は取つたな

へつ、まあwww

これで2-Aの2種目優勝が決まった。

「残り1種目、頑張れよ麻美」

「うん まつかせなさいよ」

「あれ？ 私には応援無し！？」

「ん？ ああ、美香も頑張れよ。」

「何よそのついでみたいな言い方は……」

「ははは、まあ気にするなって……。」

「うー、和磨は応援してくれるよね？」

「俺なら何時でも応援してや」「アンタの応援なんかいらない……。」

「はい……。」

「…まあ、無理しないように頑張れよ……。」

「…まあ、無理しないように頑張れよ……。」

「うん ありがと、和磨」

美香と麻美はバレーの準決勝に向かい、俺達もその応援に向かった。

【さあ！ 学園始まって以来二度目の2種目優勝をした2 A！ このまま、初の全優勝をする事が出来るのか…とても気になるところです！ それでは、準決勝を始めてください！】

準決勝が始まり、皆の盛り上がりもけつこうなものになってきた…。あまり五月蠅いの好きではないが、こういう時の五月蠅さは許容範囲だ。

あつといつまに 7 0と優勢にたつた。

「IJの調子なら勝てそうだな。」

「それは分かんねえぞ？ まだ始まつたばっかだしな。」

「… そうだな…。 相手も準決勝まで上がつてくるだけの実力がある…。」

「やうだけよ。でも、勝つと思わないか？」

「思つ」

「… ああ、絶対勝つだろつな…。」

俺達は絶対勝つと思つていいよつだ。

「私も夏姉妹達が勝つと思つよ」

「はい、私も先輩のクラスが勝つと思います」

未来も叶もそう思つてゐるらしい。
つか、全員だな。」

「俺ちよい便所行つてくつから。」

「ああ、花子さんに会つて來い。」

「死亡」フラグかよ！？つか、花子さんつて女子トイレだらうが！」

「なら太郎くんか？」

「知らねえよ！ しかも花子に太郎つて組み合わせが古いよ！」

「トイレ行かないのか？」

「俺のジッコミをスルーすんじゃねえ！」

「で？ 便所は？」

「…行つて来ます。」

「ああ、花子さんに会つた「無限ループ！？」…早く行けや…。
「…はい、すみませんでした…。」

直樹はトイレへトボトボと歩いて行つた。
さて、俺も試合に集中するか…。

お、どうやら2セット目に入ったようだな…。

1セット目は大差で勝てたらしい…。これなら後も大丈夫だな

「あの、ここ空いてますか？ 凜矢くん？」

「ふあ？」

俺は突然の声にすっとんきょうな声を出してしまった。

「あ、ああ、瑠衣か…。びっくりしちゃったよ…。」

「ふふ 突然ゴメンね？ ここ座つても大丈夫かな？」

「ああ、いいよ。」

「隣の方は？」

「…構わない…。…どうせ、居ても居なくても同じ奴だ…。…
気楽に座つてくれ…。」

「ふふ ありがとうございます」

瑠衣は和磨にお礼を言つてから、直樹の居た場所である俺の隣に座つた。

「おい、凛矢…。」

「おう、おつかえり」

「何が『おつかれ』だよ！ なんで俺の居た場所に人が座つてんの！？ なんでその人が可愛いの！？ つか、紹介してくれ！」

「どうせテメエは紹介が一番の目的だろうが…」

「凛兄い、私も紹介して欲しいかな？」

「私もです…。」

なんか、1年コンビからかなりの圧力がかかつてきてるんだが…。

「あ、ああ、紹介するよ…。 彼女は巫 瑞衣^{ブレッシャー}…。 いろいろあって友達になつた…。」

「いろいろつて？」

くつ、未来が突つ込んで聞いてきた…。

「いや、まあ、えっと、叶と似たような事だ…。」

だいぶ嘘だがホントの事なんて言いたくないし…。

「へえ～、瑠衣ちゃんって言つんだ？ 僕は直樹って言つんだ。
よろしくね」

「はい、貴方が居ても居なくとも同じ奴ですね」

「…………誰がそんな事を？」

「はい、隣の方です」

「かああああず'づ'うううまああああああ！」

「…五月蠅い、はつ倒すぞ、バカ……。」

「…すみませんでした…。」

どうやら、バカはかなり弱い事がわかつた…。

「まあ、バカは別のとこ座れ。」

「何故！？」

バカが叫んでいたが、もう知ったこっちゃない…。

俺達は試合を見ながらも瑠衣を含めた皆で楽しく話していた…。

登場人物紹介

サブキャラ

今井 美香
(いまい みか)

16歳、射手座、B型

誕生日

12月4日

趣味

剣道、噂集め、弱味握り

好きなもの

噂（他人限定）、弱味（他人限定）

嫌いなもの

情報通（他人限定）

本作の一応サブヒロイン。

噂や弱味が好きで情報をいつも集めている。

麻美と一緒に剣道部に入つていて実力もけつこうある。

和磨と幼なじみらしくかなり仲がいいようだ。

かなり勘が鋭く、弱味を握るなどの行動により、ついたあだ名が『[『]松浜の裏の支配者』。

麻美の良き理解者で親友。いつも麻美の相談を受けたりしている。

情報は集めるが本人以外にはあまり他言しないのが主義。

暗黒の手帳（黒い手帳で中に人の名前とその人の弱味が書かれている）を何冊も持つ。

「さあて、美香さんは一番怖い存在ですね」

「作者の『ぴーー』つてのも私知ってるもんね」

〔……………望みは何ですか…。〕

「いや、この頃出番が少ないかなって思うんだよね」

「でも、一応サブキャラだし…。」

「そつか、なら『ぴー』が人に知られてもいいって事ね？」

「いえ、すみませんでした！ これからは出来るかぎり出したいと思います！」

「やつかあ、其処まで出て欲しいなら仕方ないかな？ 出でやつても…。」

「…はい、おねがいします…。」

次回は夜島 未来さんを紹介します ノシ

第21話・球技大会5日目・〔前編〕（後書き）

次回は夜島 未来さんを紹介します

次の話もできるだけ早めに更新しますのでよろしくお願いします

第22話・球技大会5日目〔後編〕（前書き）

3回ぶりです

今回は矢島未来さんを紹介します

それでは第22話どうぞ

第22話・球技大会5日目〔後編〕

決勝も終わり放課後を迎えた。

2 Aは全種目優勝という輝かしい栄光を掴んだ。桃華先生も『やつた』ボーナースッ』と大喜びをしていた。

「ねえ凛矢？ 皆で打ち上げにカラオケ行かない？」

麻美が俺を誘つて來た。

「いや、辞めとく…。今日は先客があるからな…。」

「やつ…。」

「あつ、先輩！ 迎えに來ました！」

「何…？ 羨まし過ぎる…」

麻美と話しているとホントに叶が迎えに來てくれた。
バカはシカトだ…。

「おう、ホントに來てくれたんだな んじゃ、行きますか？」

「はい」

いや～、やっぱり叶の笑顔は可愛くて癒されるよ…。

「そんじゃ、またな麻美に美香に百合に夏芽に和磨ー。」

「あ、ああ、うん…。バイバイ。」

「バイバイ」

「うん、じゃあね」

「う、うん…。バイバイ、凛くん。」

「…じゃあな、凛矢…。」

「俺には無しですか！？」

バカが何か言つてゐるけど無視だ、無視！

俺は叶と一緒に教室から出た。叶は律義にもお辞儀をしてから教室を出た。

「ちょっとー？ 無視ですか！？」

中からバカの叫ぶ声が聞こえてきたが、それすらも無視してやつた。

俺達は学校から出て、繁華街へと向かった。

この近くには繁華街や商店街など、学校が近いためか、けつこうたくさんの店がある。

「叶、先ずは何処に行くんだ？」

「そうですねえ…。ゲームセンターにでも行きましょう

「ふふ　ああ、わかつた　」

俺達はゲームセンターに向かった。

「わあ～、久しぶりにきましたよ、先輩…………あつ、これ可憐い

「

「ん？　よし、こいつを取つてやるよ　おめでたす

「ふえ？　いいんですか？」

「ああ、苦手ではないしな　」

俺はJOYキャッチャーに挑んだ。

まあ、苦手ではないが得意という訳でもない……。なんか、まあ、叶に良いところを見せようと思つたんだ……。

結果、300円を消費して一つをとつた。

叶が可愛いうと言つていたのはリストのぬいぐるみだつた。うん、叶と似てるな、このぬいぐるみ

俺は取つたぬいぐるみを叶に渡した。

「わあ～～　ありがとうございます　」

叶はあるで少々こト供のみつせもつともじでこね。

「はっ！？ 先輩！？」

俺は叶が可愛すぎたせいで理性を保てなかつたようだ。

「いや、ワリイ…。 あまりに可愛かったから、叶が」

俺はひょいと氣恥ずかしくなり、からかい半分に叶に言つた。

「はー！？ も、そもそもそんな事…！／＼／＼／＼

「ホントだぞ？ だから思わず抱きしめりやつたんだよ」

「はうう、私これ抱きつく先輩はきっと抱きつき魔だと思います
…／＼／＼／＼

叶の反応が毎回可愛くていじりとも苛めたくな。

「せうか、そんなに叶は俺に抱きしめられるのが嫌だつたんだな?
うう、泣きそだ…。」

「あわわ、せ、先輩、そんな、嫌な訳ないです！ 涙く嬉しかつた
ですよー！？ …／＼／＼／＼

「せうか？ ならもう少し抱きしめさせてね？

「ふえー？」

ぎゅう

俺はやつをより少しだけ強い力で抱きしめた。

「先輩……？」

俺は叶がこっちを見れないようにしながら、泣きそうになる自分の顔を隠した。

そういうや、叶って未来と背が同じぐらいなんだな……。昔はよく、未来を抱きしめてあげたつける。ふふ、あの時はできなかつた癖に、今ではその友達を抱きしめてるなんてな……。なんて愚かな兄なんだる……。

「先輩？」

「…………ん？ ビビった、叶？」

俺は泣きやうな顔をなんとか平常に戻し、叶の顔を見た。

叶は顔を真っ赤にしていた。

……やべ、可愛すぎる……。キスしても大丈夫かな？……いや、そんな事したら嫌われちまうしな……ああ、くそ、理性が砕けそうだ……。そんなに上田遣いにこっちを見ないでくれ……。

「はう、せ、先輩、周りからの視線が……。」

「ん？」

俺は周りを見回してみると、男からも女からも嫉妬と羨望の眼差しが痛い程に届いてきた。

……うん、男の嫉妬と羨望はわかる……叶はかなり可愛いからなだが、女の嫉妬は何ですか？ 羨望はシチュエーションって事だとは

思つんだが……まさか、百合か…?
でも、皆はないよな…。それより…

「まづ、此処から離れよう。」

「やうですね…。凄く、恥ずかしいです…。／＼／＼／＼

俺は叶の手を取つて、走るよう^にゲームセンターから出た。

「ふう、あ～恥ずかしかった…。」

「はい、ホントです…。／＼／＼／＼

叶はホントに恥ずかしそうに顔を真つ赤にしている。

「わい、これから何処に行く?」

「はい、それじゃあ、そろそろ約束通りにご飯を」駆走します

「ああ、確かにバイト先だったか? 此処から近いの?」

「はい、だから行きましょー。」

叶は俺の手を引っ張るよ^に昇の言つバイト先に向かつた。

登場人物紹介

ヒロイン4

矢島 未来
(やじま みく)

14歳、双子座、O型

誕生日

6月14日

趣味

料理、掃除等の家事全般

好きなもの

料理、掃除、可愛いもの

嫌いなもの

汚い場所、インスタント、ホラー

本作のヒロインの一人。

凛矢の妹で高校1年生。

家は凛矢と二人で暮らしていて、両親は仕事で地方にいる。体が少し弱く、あまり運動をしないが、本人は運動が大好き。叶とは中学校時代から親友でかなり仲がいい。

夏芽とはかなり小さい頃に一緒にいたためか、夏姉えと親しく呼ぶ。凛矢とは仲がとてもよく、かなり微笑ましい兄妹だが、互いに想い合つばかりに少し過保護になっている。

凛矢の様子には敏感で、ポーカーフェイスは大半見抜く。

凛矢のためにバイクが終わるまでご飯も食べずに待つていてるなど、かなり凛矢の事を気にしている。

「今日は矢島 未来さんです」

「よろしくね～」

「はつきり言ってプログラコンですね…。」

「まあ、凛兄いがシスコンだし それに、凛兄いカッコいいから 大好きだもん」

「はあ、俺も妹が居たら一度は言つてもらいたいよ…。」

「大丈夫 もしかたら出来るかもよ？」

「いや、絶対無理だし…。」

次回は橋本 和磨を紹介します ノシ

第22話・球技大会5日目・「後編」（後書き）

ご指摘がありましたので、今までに出てきたサッカーの得点を直しました。（作者もやり過ぎた感がひしひしと）ほとんど、これからの展開に関係はないので気になる方は読んでください。

次回は橋本 和磨くんを紹介します

第23話・デーント驚愕…（前書き）

総ユニーク数1万人突破！

ありがとうございます！

これからもよろしくお願ひします

▽(^○^)▽

今回は橋本 和磨くんを紹介します
それでは第23話どうぞ

俺達は叶が働いている?といつお店に向かっていた。

「さつ、先輩着きましたよ?」

え?もうですか?さつき出発して3分も経っていないんだが?
それに、この近くには俺がバイトしているリムレットがあるんだが
…。

「この路地を曲がった所にバイト先があるんです…。田立たない
けど凄く美味しいんですよ?きっと先輩も大好きになると思いま
す」

え?この路地を曲がるつて……この先には…。

「はい、着きましたよ 私のバイト先で、お姉ちゃんも働いてい
る喫茶リムレットです」

そう此処は俺が週3回働いていて、バイト以外にも家から近いの
で来る、リムレットだった。

「? どうしたんですか先輩?」

「いや、えつとなんて言つか……俺のバイト先も此処…。」

「…………えええ!…?」

叶はかなりの驚きようで、目を大きく見開いていた。

「俺もびっくりしたよ…。 まさか、叶が同じ場所でバイトしてたなんて…。 何時からなんだ?」

「たしか…去年からでした。」

「ほ…。 しかし、今まで逢わなかつたとはな不思議なくらいだ…。」

「

うん、かなり不思議なまでに逢わなかつたな。
リムレットにはけつこう行くから一度は会つてもいいのに。

「はい、ホントに不思議です…。 先輩が此処でバイトしてる所なんて見たことなかつたです…。」

「ああ、そうだよな。 叶は何を担当してたんだ?」

「はい、ほとんどはキッチンの方に届て、たまに注文に回つてました…。」

「ほら、叶のウエイトレス姿か…。」

うん、絶対に可愛いよな。 しかも、ちょっとドジしたりして…。
うつわー、想像したら一ヤけてきた…。

「先輩、なんか鼻の下が伸びますよ…? それに、私のウエイトレス姿なんて見たつて可愛くなんて…。」

うおつと、考へていた事が口から出てたようだ。
しかも、鼻の下が伸びてたなんて、これからは氣をつけよう」と
ないとな……いろんな意味で……。

「わい、そろそろ入つてくつりぐべか……。」

「はい、わうですね」

俺達はリムレットの中にへと向かつた……。

【カラソカラーン】

「は～い、いらつしゃ～い よくも私の大事なだ～いじ～な叶を
たぶらかしてくれたじやない、狼さん？」

なんか、奏さんのドスの効いた声が出てきた……ってかマジで怖いし
……。

「もひ、お姉ちゃん止めてよね、先輩が困つてゐじやない……。」

叶が奏さんを始めた……つて、

「えええ！？ お姉ちゃん！？」

俺はお店の中だといふのに大声で叫んでしまった。

「え？ 叶が連れて來た男つて凛矢くんだったの？」

「あれ？ お姉ちゃんは先輩と知り合いだったの？」

奏さんの疑問に叶は疑問で返した。

「え、ええ、シフトで重なるし…。叶が来ない日[シフト]に入ってるから、今まで逢わなかつたのねきっと。」

どうやら、力関係は奏さんく叶らしい。

「そうだったんだー。先輩、紹介します 私のお姉ちゃんです
」

「いや、知つてゐって…。 さうか、そういうや一人とも苗字が同じだもんな。」

「あれれ？ 知り合つた時に気付かなかつたのかな？」

「い、いや、多少似てるとは思いましたが、如何せん性格が違い過ぎて…。」

「ふ～ん？ 私の性格が悪いって言いたい訳ね？」

奏さんが田を細めながら俺に問いかけてくる。

「い、いえ、けつしてそんな事はないでしゅよ？」

俺は、上ずつた声を出しながら言葉を噛んでしまった。
だって、マジで怖いもん。

「ナリ？ なら気にしないであげるわ」

「ありがとハヤシコモク…」

俺は怖さのせいか頭を下げてしまつ。ふ〜、なんとか乗り切つた…。

「でも、私の大事な叶に手を出したら例え凛矢くんでも……只じやおかないから……」

音符付いてるのにかなり怖いよ〜！？極寒の如く冷たい目してゐし…

「はい、わかりました…「いい加減にしないと怒るよ、お姉ちゃん！？」…」

叶が俺の言葉を遮りながら奏さんに言つた。
どうやら、少し怒りかけてるようだ…。

「う〜、怒らないでよ〜、叶〜…叶の為にしたんだよ〜？」

「先輩はとても優しくて良い人です！ それにカッコいいし、話していて楽しいんです！だから、邪魔しないでね、お姉ちゃん。」

「う〜、凛矢くん…いつの間に私の大事な妹をたぶらかせて…「お姉ちゃん！」…「あ〜、わかつたわ、今日は此処に最後までいるんなら、大目に見てあげる…。」

奏さんは泣々、今日のデートを許してくれたようだ…。

せつこや、奏さんが言つてたな…叶がデートだつて嬉しそうにしてたつて（多少違う予感）…。

そう思つと俺は凄く嬉しくなつた。

「それでいいんでしょう？ 叶？」

「うん ありがとう、お姉ちゃん」

「うんうん 大切な妹の頼みだもんね その替わり、条件は守つてね？」

「うん」

奏さんの「了承に嬉しくなったのか、叶は奏さんに抱きついた。奏さんも、ホント優しいよな……。こんな俺と未来もこをな兄妹になつてみたいな」。

「凛矢くんもいいね？」

「はい、ありがとうございます 奏さん」

「うん、それじゃあ私は戻るから」ゆっくり

「…………は～、私も叶に甘いわね？ ホント…………でも、あの子の恋だし、少しぎらいは許してあげるとしますか」

奏のその眩きに一人はまったく気付かなかつた。

サブキャラ

橋本 和磨

(はしもと かずま)

16歳、天秤座、A型

誕生日

10月15日

趣味
読書

好きなもの

読書、静かな場所

嫌いなもの

五月蠅過ぎる場所

本作の一応サブキャラです。

ちょっと無口で、無表情だけど、かなり友達思いで優しい性格。
無口ではあるがノリがいい。

美香とは幼なじみで少なからず好意を持つている。

直樹と凛矢とは1年生の時に出会い、親友を続けている。

運動神経抜群、成績優秀、容姿端麗と完璧超人だが、色恋が少し苦手。

凛矢のする事にけつこう興味があるらしく、たまに訊いてくる。

「は～い、今回は橋本 和磨くんで～す」

「…よろしく……。」

「しかし、ここまで凄い人物とは…。 生徒会にでも入ればいいのに…。」

「…俺は上に立つより、上に立つ者の補佐の方が似合つてゐるからな…。後、補佐するなら凛矢じやないと楽しくない…。」

「なんて凄い人だよ…貴方つて人は…。」

「…まあ、作者も凄い人だな…。」

「何故だらう…その言葉が俺の心にグサッと突き刺さつたんだが…。」

「…氣にするな…。」

次回は姫宮 直樹を紹介します ノシ

第23話・テーント驚愕…（後書き）

次回は姫宮直樹くんを紹介します
これからも、一週間以内には更新しますので、みなさまお気長に待つ
ていてください（^o^）

第24話・出会い 美少年…（前書き）

一週間もあればもつと書けるはずだ！

という神のお告げがありまして、少しですが長くなっています。作者も新たな学年に慣れてきたので、これからは更新速度を上げたいと思います。

待っている方、すみませんm(_ _)m

今回は姫富 直樹くんを紹介します

それでは、第24話どうぞ

第24話・出会い 美少年

俺と叶は互いに向かいあつて席に座り、それぞれに注文をした。

「「」注文はお決まりですか～、狼さん？」

「…また、それですか…。俺は狼なんかじゃないですってば…。」

俺はいい加減してくれとこいつよつて肩を竦めながら言つた。

「じゃあ、欲求不満の狼さんね？」

「もう、お姉ちゃんいい加減にしなさい！」

「は、はいいッ！」

奏さんはそそくさと注文をとつてカウンターに戻つていった。

…奏さん、ありがとひー。…身を持って叶の怖さを教えてくれたんですね…。

「先輩…？」

「は、はいー！」

俺は咄嗟に怯んだ声を出してしまつた。

「う～、先輩まで怖がらないでくださいよ～。先輩には怒つたりしませんから～。」

叶は田尻に涙を……つて！

「わかった！ 叶は優しいいい子だもんな！ わかったから泣かないでくれ！」

後ろから人を殺せるんじゃといつ、得物もとい獲物を目の前にした獸の視線が、さつきから背中にビシバシと当たつているんだ…。一粒でも落ちたら俺は殺される…。かといって、今叶に触れても奏さんに殺されると思つ…。どうしたものか…。

「か、叶！ い、いつから未来と友達になつたんだ？」

悩んだ結果、前に聞いたような事を訊いてしまつた。
うわ～、失敗したな～。

「はい？ えっとですね、未来ちゃんとは、中学校に進学した時からのお親友です！」

うん、効果は的面だつたようだ…。叶は抜けてるからな…うん…。

「私が道に迷つて困つてたら、未来ちゃんが一緒に行つてくれたんです！ そしたら、クラスも同じだつたから…！」

「へえ～、叶は昔からドジだつた訳か…。」

俺は和んできた空氣に乗つて、叶をからかう事にした。

「はう～、先輩……いじわるです……。」

俺は叶の反応が面白くて、追い討ちをかけた。

「そんな可愛い顔で怒られても、全然怖くないよ？ むしろ、その表情も俺は好きだよ？」

「はうー？ あう……あつ……うー……。」

叶はボンッヒ音が鳴りそうな勢いで顔を真っ赤にしながら、口をパクパクさせ、何かを言おうとしたが、結局言えなかつたようだ…。

「ははは、冗談だよ、叶！」

「あうー、先輩は意地悪過ぎます……。」

叶が俺を咎めるように言った。

「はは、ゴメンな、叶！」

「うー、先輩だから許してあげます……。他の人だったら絶対にメツですー！」

ふふ、叶は不思議な子だな ドジで危なつかしい割に、人を安心させてくれる暖かさがある……それに、からかつた時の反応も可愛いしな

「先輩は、橋本先輩に姫宮先輩と同じやつて知り合つたんですか？」

叶は好奇心に溢れた顔で俺に訊いてきた。

「ん？ アイツ等とは確か……」

それは、俺が高校に入学した日の事だった…。

「凛兄いー、行つてらつしゃーい」

「ああ、行つて来る　印締まり頼んだぞ?」

「はーい」

俺は今年から高校1年生になる…。不安や期待のいりまじる気持ちの中、俺は未来に行つて来ますをして、玄関をでた。

「おはよー、凛矢」

「ああ、おはよ、麻美」

今まで通り、俺は麻美と一緒に学校に向かつた。

いつも通りじゃないのは未来が一緒じゃないって事ぐらいか。

「今日から新入生、張り切つて行かないと」

麻美はウキウキと楽しそうに咳いた。

「麻美は剣道があるからいいけど、俺にとつてはつまらないの一言だな…。」

「まつたく、何言つてゐのよ？ 凜矢だつて部活に入ればいいでしょ？」

麻美が俺の言葉に正論をぶつけってきた。
麻美の言つ事はもつともだが…

「部活なんてやつたら、未来が毎日一人になつちゃうだろ？ が！
それにバイトするつもりだしな」

「はあ、まつたくいつまで経つてもシスコンなんだかい？」

麻美は呆れたといつよつにため息を吐きながら言つた。

「それに、結局バイトするなら意味ないんじやない？」

「いや、それがあるんだよ…。 一つは小遣い稼ぎ、もう一つは未來が誕生日の日や、あの親父達の誕生日等を豪勢にするためだ！」

俺は自分の目的を心からの叫びとともに語つた。結果、麻美は感動して涙が…

「はあ～～……。」

…出なかつた。それどころかため息を吐きやがつた。

「なんだよ？ 誕生日のプレゼントも買つたりしたいんだ、それなりに稼がないと…。」

「その… も… 私の誕生日にもプレゼントくれるの…？」

麻美が不安気に上目使いに訊いてきた。

「……く、反則的なまでに可愛いなコイツは……。」

「あつたりまえだろ？ 可愛い幼なじみの誕生日だしな」

「…………そつか、幼なじみだからか…。」

俺が誓めてあげたにも関わらず、顔を俯かせ、ブツブツと話し始めた。

「…………なんなんだ、いつたい…。」

俺は不思議に思いながらも遅刻しないように歩きだした。

俺達が校門までくると人がじつた返していった。

「ダルいなー、こりや…。」

俺はため息混じりにそう呟いた。

「……回感だ……。むさつ苦しいだけで能率が悪い……。もっと色々な場所に貼るべきだ……。」

俺は驚いて隣を見ると、そいつもじつちを見た。

「……そり思わないか……？ ……名を知らぬイケメン君……。」

俺に話しかけて来た野郎はかなりの美少年と言えるほど顔だった。

クールに見えるその顔にはメガネをかけて、より知的に見せている。
「あ？俺がイケメンだ？ 嫌味か？ 嫌味だよな？…俺が不細工だからってか…？」

「はあ？ そりや、不細工な俺に対する嫌味かよ？ わい…。」

「…ふ、さいく…？ それは君自身を言つて居るのか…？」

美少年はメガネの奥に動搖の光を見せながら、俺に訊いてきた。

「当たり前だろ、誰もお前のよつた美少年に一々、不細工なんて言
うかよ…。それとも、俺は不細工ですら表せないほどキモいとで
も言つつもりか？」

俺は少しキレかけながら美少年に言つた。

「…まず、不細工なんかじゃないな…。…完璧にイケメンの部
類だ…。…そんなに綺麗な顔立ちで不細工と言つほつが、嫌味
に聞こえるぞ…？」

美少年は俺をイケメンの部類だと言つ出した。

「嘘つけ…。俺がイケメンならとっくにモテてるはずだ…。」

俺は嘆かわしい今までの自分を振り返りながら言つた。

…思い出しだけで涙がでてくるぜ…。

麻美の方を見てみたら、なんかバツが悪そうにしていた…。
…なんなんだ？ まつたく…。

「……君は、周りからの視線を感じないのか……？」

「んあ？」

俺は美少年の言葉に周りを見ると、多くの女の子が美少年（本当は凛矢を含む）を見ていた。

「俺達が騒いだからか？ それか、お前が美少年だからだろ……。」

俺は美少年の疑問に嫌々答えてやつた。
……だつて、どうせ俺は美少年の隣にいる不細工つて思われてるんだ
るひじな……。

「……君はどひやら、ホントに氣付いてなによつだな……。……くす
つ……。……面白い男だな、君の名前は……？」

美少年は何が面白いのか、微笑しながら名前を訊いてきた。

「人に名前を訊くなら先ずは自分から、だろ？」

……ちくしょう、微笑みが様になつていやがる……。

「……そうだつたな、すまない……。俺は橋本 和磨だ……。君
の名前は……？」

「俺は夜島 凛矢だ……。夜島でも凛矢でも、好きな呼び方で呼んで
くれ……。」

美少年は橋本 和磨といつらじい。

「… そうか、なら俺は名前で呼ぶから、凛矢も名前で呼んでくれて構わない……。」

俺と和磨は名前で呼び合つ事で決定した。

「二人とも同じクラスみたいね 」

「あ！？」

「…………。」

突然麻美が喋り始めたので一人してびっくりしてしまった。
…さつきからまったく喋らなかつたのはそのせいかな。あと、後ろの点はいらないだろ、和磨…。

「どういつ事だ？」

俺は麻美に訊いてみる。

どうやら和磨も同感だつたらしく、黙つて頷いた。

「ん？ 二人とも同じクラス、強いて言えば私も含めて三人共だけどね 」

「… ふむ、どうやら俺の幼なじみも同じクラスのようだな……。
… 麻美と言つたか、仲良くしてやつてくれ、今度紹介する……。」

和磨は麻美と話し始め、俺は暇になつてしまつた。
ので、俺のクラスには他に誰がいるのかな？ つと

俺は自分のクラスの名前を見ていると、ある名前で止まつた…。

姫宮 直樹……？

なんだ、この如何にもイケメンでタラシです、みたいな名前は…。
お姫様ばかりの宮殿だぞ？（只の偏見）

その割に名前は普通だがな…。（今、全国の直樹を敵に回した）

さつきから煩い奴がいるよ…。まあ、ついこののはシカトだな、やつ
ば…。

「ひどい……。」

知るかよ、早く書けや……。

「は～いはい。俺は先に行きますよ～だ…。」

可愛げのない野郎はとつとつビックリに行ってしまった…。

姫宮か…どんな奴なんだろ…。
楽しみに待ってるかな…。

俺はいつの間にか話し終わった麻美と和磨と一緒に自分達のクラス
に向かった。

登場人物紹介

サブキャラ

姫宮 直樹

(ひめみや なおき)

16歳、獅子座、A型

誕生日

8月3日

好きなもの

ラブラブコメコメ、女の子、運動

嫌いなもの

勉強、いやつらカッフル

本作のサブキャラ的な存在。

背が高く美形だが、かなりのバカな性格のため、まったくモテない。

将来の夢はラブコメ的な主人公と夢までバカ。

運動にだけは真面目で、真剣に取り組む。

昔はたまにしか真面目モードにならなかつたが、この頃は頻繁になるようになつてきた。

凛矢を羨ましいと思う一方で、凛矢の事を多少気にかけていてけつこう優しい性格、その割に皆からは殴られたりとバカな性格が完璧に足を引っ張つている。

作者にとって、もつとも扱い安いキャラ。

「こんなもんだな…。」

「絶対最後の一行いらぬでしょ！？」

「気にするな、いつか番外編みたいな感じで書けたら書くから…。」

」

「……貴方の出来たらってかなり信用出来ないんですけど…。」

「……ハツハツハツ、ナンノコトカボクチャンワカンナイな～」

「片言じやねえかよ！？ しかも、最後の な だけ平仮名だし！？」

「ははは、あんまし気にすると……痛い目見るぞ…？」

「……すみませんでした…。」

次回は巫 瑞衣さんを紹介します

第24話・出会い

美少年…（後書き）

次回は巫 瑞衣さんを紹介します
あと一人で一旦、人物紹介は終了するつもりです。
それではまた次回

第25話・バカ 到来 直樹…（前書き）

すみませんm(ーー) m

作者の都合でほとんど完成していたのに、更新出来ずにいました。

今回は巫 瑞衣さんを紹介します

それでは第25話どうぞ

第25話・バカ 到来 直樹

俺達が教室に着くとだいぶ人が座っていた。

「皆、早いんだな…。」

「そりやそりでしょ。初日で慣れないから、余計に早く来ちゃうもんなのよ。」

麻美は未だにウキウキした面持ちで話していた。

「お前、朝会つた時からずっと楽しそうな顔してるな…？」

俺はどうしても気になってしまったので、堪らず訊いてみた。

「そりゃあ、ね これからは、此処で新しい思い出を作るんだって思ったら、楽しみになるじゃない？」

麻美は満面の笑顔、と言った表情で俺に話してきた。
…昔から、こういう笑顔は、かなり可愛くて好きなんだよな…俺
…つか、モロにストライクかも…。

俺は顔が赤くなるのを感じ咄嗟に別の方向を向いた。

「…なんだ…？ 赤い顔してるぞ、風邪か…？」

向いた瞬間に和磨の顔があつた…。

…「マジで萎えたわ…。…そういうやコイツもいたんだよな…。…つたく、この美少年は、もつクラスの女の子の視線を受けまくりやがつて…。ましてや、それをスルーとは、」これからイケメンは…。

「…どうした…？…俺の顔に何か付いてるか…？」

「…ねーよ…。」

俺は和磨の問いかけに適当に答えた後、窓際の一一番後ろに腰を下りした。

「私は隣に座るわね」

麻美は俺の隣に座り、和磨は麻美の前に座った。

俺の前は空席…。

…まあ、まだ人が来るだろ?し、気にする必要は無いと思つけど…。

そろそろ、ホームルームが始まる時間だ…。

「なあ、前の席がずっと空いたままなんだが?」

俺はさつきからずつと気になっていた事を口にした。

「遅刻みたいね? 初日からなんて、ホントのバカなのね、そいつ?」

俺は麻美の言葉を聞きながら、窓の外の正門を見た。
もう、正門は閉まつていて、生徒も全員、席に着いていた。

【ガラワジ】

「おーし、席に着いてるなー。ホームルームを始める前に自己紹介をする…。」

教室に入つて来たのは、筋肉質な体付きに無精髭を生やせた、やる気の無さそうな先生だった。

「俺の名前は鈴木 太郎だ…。よろしくなー。」

なんつー簡単で何処にでもありそうな名前だよー?ふりがなすら振られなかつたぞ!?

いや、簡単過ぎて逆に珍し過ぎる名前だが…。
いや、それ以前にそんな名前を付ける親がいたとは…。

「ちなみに、俺は名前を変えていて、昔の名前は鈴木 すずき 栄輔じょうすけ だ…。」

「自分で変えたのかよッ!? しかも、前の名前の方が断然かつこいいしッ!…」

俺はどうしても突つ込まざには要られず、突つ込んでしまつた。

「うーん、と…。夜島 凜矢くん、か…。何故、この名前にしたのかという質問の答えは簡単かつ単純なものだ…。」

急に太郎先生は顔を真面目にして喋り出した。

…いつたい、どんな理由があるつていうんだ…? ?

「それはだな……………名前を書くのが楽だからさ」

【ガタタツ】

クラスの全員が椅子から転げ落ちた。

「いや、和磨だけは椅子に留まり、笑っていた……。お前はきっと大物になると思うよ……。」

クラスの皆はバラバラと席に戻り、元の教室に戻った。

「ん？ そういうや、其処に人がいないな？」

太郎先生は俺の前の席を見ながら呟いた。

俺はそんなのを聞き流しながら、正門を見てみた。

【ダダダダダダタツ！】

俺はバツと音がする勢いで前を向いた。

「うん、俺は何にも見てない……。砂煙をたてながら走つてる人間なんて見てません……。」

でも何故か、俺の首は横に動いてく……。

「くそ、動くんじやない俺の首……ぐああ……。」

俺はぎききと首を動かして正門の方を見ると、そいつはもういなかつた。

「なんだつたんだ、いつたい……。」

俺は先生の方を向いて考えていた……。

【ダダダダダダダタツ！】

な、なんだなんだ！？

クラスの皆も異様な音にじよめいでいる。

「セーー、そろそろ自己紹介もして置こうか……。」

一人、マイペースなのが居た。

「……まつたく、非常識も甚だしいな……。」

お前も論点がズれてるぞ、和磨……。

【ダダダダダダタツ】
【ガララツ】

「遅つっ刻した——ツ！——」

教室のドアが開き、飛び込んで来たのは、和磨に続くイケメンだった。

なんだ、このクラスにはイケメン比率が高いのか？

俺だけ浮いちまうじやん……。

俺はふすとしながら、憲を向いた。

そのイケメンは俺の前の空席にドカッと座って、俺の方を見た。

「俺、姫宮 直樹って言つんだよ！ よりしくな、このイケメン野郎！」

それが、俺と和磨、直樹の出会いだった。

登場人物紹介

メインヒロイン4

巫 瑞衣

(かんなぎ るい)

16歳、山羊座、A型

誕生日

1月15日

趣味

ピアノ、バイオリン etc...

好きなもの

お母さん、凜矢

嫌いなもの

父親

本作のメインヒロイン。

家は、日本有数の巫グループで、正真正銘の「令嬢。」

たくさんの頗るい事をしている。

父親に巫の者は、すべての事で一番にならなくてはならないと言わ
れ、今まで頑張つて一番になり続けた。

しかし、球技大会で凛矢のクラスに負け、泣きながら走るが凛矢の
介抱によつて泣き止んだ。

どうやら、頑張つても父親に褒められた事がなく、尚且つ瑠衣が活
躍する場面を父親は見なかつたらしい。

だが、凛矢の『見ていてあげる』という言葉により、凛矢に好意と、
頑張れば一番でなくともいいと思えるようになつた。

「今日は巫 瑠衣さんです 」

「はい いんこちは 」

〔凛矢には心を開いてるみたいですね?〕

「ええ あの方は私のとても大切なお方です 」

「何か、金持ちと訊くと、『～ですわ。』とかの高飛車なイメージ
があるんだが…。」

「ふふふ あまり、妄想だけでおつしゃつてると、地獄を見ま
すわよ?」

〔…………申し訳ございませんでした…。 お嬢様…。〕

「いえいえ、分かればよろしいんです 」

ホントに怖かつたです…。

今だ、背中が汗ばんできます…。

次回は一応ラストになるであろうこの企画。
次回は美波 叶を紹介します ノシ

第25話・バカ 到来 直樹：（後書き）

次回は美波 叶を紹介します

第26話： 家 テストか…（前書き）

なかなか更新が早くならずすみませんm(—)m

今回は一応リストである美波 叶さんを紹介します
それでは第26話どうぞ

第26話：家 テストか

昔話をし終わると、叶は笑っていた。

「ふふふ　それが、『松浜の四騎士』中の三人の出会いなんですね？」

は？

今、訳のわからない単語が出てきたんだが……。

「……四騎士……？」

「あれ？ 先輩は知らないんですか？」

はい、まったくもつて知りませんが……。

「先輩に橋本先輩、姫宮先輩に生徒会長を含めた四人を、皆は四騎士って呼んでるんですよ？」

叶に説明してもらつたが、どうしても納得がいかなかつた……。

和磨と直樹、それにアイツはカッコいいから分かるが……なんで、俺も……？

それに……

「…なんで騎士？」

俺は一番納得いかない事を叶に訊いてみた。

だつて、貴公子でも王子でも、美少年でもいいのに、何故に騎士？

「えつとですね、なんだか、そっちの方がカッコいいからって、皆
は言つてました…。」

なんなんですか、その適当な理由…。

「先輩のクラスは凄く注目されてるんですよ。四騎士中の三人が
いるんですから。でも、私は先輩一人で充分です。」

うん、叶の笑顔が可愛すぎる

抱きしめてあげよ…

「ジー…。」…やっぱ無理みたい…。

つか、奏さん、ジーは口で言つちゃ駄目なんですよ、知つてまし
たか？

俺と叶はその後も、ケーキを食べたりしながら、楽しい一時を過
ごした…。

それから、数日が経つた。

テスト一週間前という事で、ほとんどの皆がテスト勉強に精をだし始めていた。

テスト勉強をしていないのは、諦めた奴か、もともと出来る奴、そして……

「なあ、なんで皆勉強してるんだ？」

「コイツみたいに、テストがある事自体、知らない奴ぐらいだ。中間だから決まってるだろ」が……。」

「……中……間……？って、中間テストの事か？」

何をコイツはバカな事言つてんだ？

「それ以外に何があるんだ？ 中間テストに決まってるだろ。」

「……んまあああああ！？」

バカは絶叫した。

【ガスツ】

「煩いから静かに死なさい……。」

バカはのたうち回った。

つか、麻美…『し』が『死』になつてたぞ……。

「気にしないの。」

「わっ、なんか久しぶりに思考を読まれた気がする！」

（まあ、半分くらい作者のせいだがな…。あの、バカ作者…。）

「なんか副聲音が聞こえたんですが！？」

「作者よ…。世界には気にしては生けないものがあるんだ…。」

「生けない！？ 何それ！？ 生けないって事は死ぬって事じゃね！？ おーい！？」

さて、そろそろ「やくなつてきたからシ・カ・ト

「なあ、和磨？ 勉強教えてくれね？」

俺は最強の友人に去年から恒例になつてている『勉強教えてよ！イエース オフ』『ース大作戦！！ 大会』の開催を伝える。

「…了解だ…。いつもどうり俺の家に集合な…。」

「…あの～、えっと、私も其処に行つて大丈夫かな？」

さつさまで麻美と話していた夏芽が話しに加わった。

「勿論だ 百合も来るだろ？」

「うん 一人でするよつ、楽しいから逆にはかどるし」

「よし 後は未来に、叶に、瑠衣か…。去年よりも賑やかになりますだな」

「そうだな。後、出来れば俺の妹を連れて行きたいんだがいいか？」

真面目モードに入つた直樹が、急に喋り出した。

「ういや、こいつにも妹がいたつけ……。
確か、未来と同一年か……。」

「ああ、ううしょ……。まあ、奴は来ないだろ？……大丈夫だろ？」

「……。」

「……奴か……。奴ならきっと副会長がびづこかしてくれるや……。」

「……」

奴というものは生徒会長で、まあ、危険人物だ……。いい奴だし、運動や勉強も出来るんだが、頭のネジが五本近く飛んでるんだ。直樹とは別の危ない奴って事だ……。

「……それじゃあ、放課後に皆で家まで行くか……。」

「だな　ハーレム、ハーレム　」

どうやら、直樹が元に戻つてしまつたようだ……。

いや、おかしくなつたのか？……ま、いつか直樹の事だし……。

でも、こいつを連れて行くのは止めたくなつてきた。

「俺は未来、叶、瑠衣に連絡いれとくな」

「……俺も美香に連絡しとく……。」

と、其処で先生が教室に入ってきた、その話しあは一旦終了した。

時は経つて放課後。

「よ～し、それじゃ行こうぜー」

「だな。 テストはGW空けだし、けつこう勉強出来るんじやないか？」

テストは来週で、その間にGWを挟んでいる。

「……さて、そろそろ行こう……。 一年生達も連れて行かないとな……。」

和磨の言葉と共に、俺達は和磨の家に向かった。

「…………。」

俺は何度となく呟いてきたその言葉をまた呟いてしまった。

「……お前はその言葉を毎回呴くな……。」

和磨も思つたらしく半端呆れながら、俺に言つてきた。

つか、デカイんだよ敷地が…。

「じゃあ、私は先に用意をしてくるね」

美香はもう一つの家に向かつて行つた。

「ねえ、凛矢くん？ これってどういつ事なんでしょう？」

瑠衣が不思議そつな顔をしながら俺に訊いてきた。

「ああ、えつとな……。 美香と和磨の両親が親友同士で、なんか互いに金出してかなりデカイ敷地を買つたんだと。 んで、家は別々に作つたらしい。 で、こうなつたと……。」

「ホントに大きいですぅ……。」

俺が話し終わると叶のしみじみとした感想が聞こえた。

「……何を驚いている……。 ……早く行こう、これだけの人数なんだ……。 時間が惜しい……。」

和磨の言葉で、皆はお屋敷もとい和磨家の家に向かつて、なかなかに広い敷地を歩いて行つた。

登場人物紹介

ヒロイン

美波 叶

(みなみ かなえ)

15歳、魚座、O型

誕生日

3月20日

趣味

料理、デザート作り、掃除

好きなもの

凛矢、奏、未来、家事全般

嫌いなもの

悪い人、お化け等

本作のヒロインの一人。

けつこうおどおどした性格だが、芯はしっかりとしている。

恋愛はおくてだが、たまに積極的な時がある。

奏とは姉妹で、家事全般は叶がほとんどしている。

凛矢と同じリムレットで、奏の手伝いとしてバイト中。

凛矢の妹である未来とは、中学からの親友で、かなり仲が良い。ネタバレだがどうやら、直樹の妹を含めた三人でいつもいるらしい。

「うそ、こんなもんだろ 」

「は、はい。そ、そうですね…。」

「ん? なんか不満が?」

「い、いえ…。なんだか私だけネタバレ要素が…。」

「ああ~、ま、いいんじゃね?」

「そんな…。」

とこう訳で、こんなもんで登場人物は一応終わりにします。誰々のが知りたいなどの要望があつたら教えてください。

第26話：家 テストか…（後書き）

頑張ります

知りたいキャラがいましたら、教えてください。

後、生徒会長はもしかしたら出てこないかもしません。
一応出したいとは思っています

第27話：勉強会　　想い…（前書き）

作者がテスト期間でなかなか執筆できませんでした。ホントにすみません m(—)m

これからも、いい加減な作者ですがどうぞよろしくお願いします

それでは第27話どうぞ

第27話：勉強会 想い…

IN 和磨の部屋

「わいわい、がやがや、わいわい、がやがや」

「兄さん、そういうのは口で言つものではありません。」

直樹のボケにツッコミを入れる和磨の妹である魅奈ちゃん。みな 魅奈ちゃんはどうやら未来や、叶と同じクラスで委員長らしい。

世間は狭いな、いやホント…。

魅奈ちゃんは背が小さくまるで小学生のようだが、かなり大人な性格だ。

「兄さん、ちゃんと勉強しましょうね？」

「はい、わかりました…。」

直樹を従わせるなんて、なんて凄い娘なんだ…。

勉強を始めてから一十分ぐらい経った頃、

「「コメン」「コメン」…。用意に時間がかっちゃって…。」

美香が入ってきた。なんか鞄を持って…。

「なんだ？ その鞄は？」

俺は不思議に思い訊いてみた。

「……ああ、泊まるんだよな……？……おばさん達は……？」

「はい？ スルー？」

「うん、こつもの事だけど、よひじく……／＼／＼

美香が困ったような笑みを見せながら、和磨と話している。
だから、スルー？

「なあ、さつきからなんの話しをしてんだ？」

「ひひや、直樹もそれを思っていたらしく訊いてくれた。
たまには使える奴だ…。

「……ああ、毎度の連休は美香の家族がこの家に来て、一緒に過ぐして
てるんだ……。まあ、互いの両親の仲が良いからな……。」

淡々と呆れたように話しだす和磨の言葉を聞き、直樹が呟えた。

「なああにいいいいッ！？ なんて羨ましいッ！？」

今日は何故かこいつと『』が合つようだ…。実際に俺も羨ましいと思つた…。

「いいですね　とても楽しそう」

瑠衣が羨ましそうに訊いてくる。

「……いや、そうでもない……。……実際は互いの両親がドンチヤン騒ぎをして、かなり大変だ……。」「…………」

和磨は心底呆れたとこつぶつと肩をすくめた。

和磨も親には苦労してるのか……俺だけじゃないんだな……よかつた……。

俺は和磨の苦労がわかり思わず涙ぐんだ。

「凛兄こ、じこいつひどいやるの？」

未来がわからない部分を俺に訊いてきた。

こんなにお兄ちゃんを頼つてくれるなんて、なんて嬉しいんだ。

俺は未来に優しく、優しく教えてあげる事にした。

私は今、家の中で明日からのGWに向けて準備していた。

私の両親は変わってる……。だって、仲がいいからって、互いにお金を出し合つて一つの大きな土地を買ったんだから……。

M i k a i m a i

それに、毎回の連休はどちらかの家に泊まるんだから変わってる
としか言ことうがない。

でも、私にどつては少し嬉しいイベントもある。何故かと言え
ば、それは和磨と一つ屋根の下で過ぐす事が出来るって訳で…。実
際、いつも少しだけ緊張している…。

「今回も楽しくなるとこな

」「そう、楽しくなるとこ…。

私はその言葉を呟くと少し憂鬱な気分になつた…。

何時になつたら私は一歩を踏み出せるんだろう…。いつも頑張ろ
うとは思つてるんだけど…まだこのままがいひつて心が言い出す。

何時からだつたつけ、和磨の事が好きになつたの…。

気付いた時にはもう好きだつた。でも、和磨は凄くモテて、いつ
つも女の子が近づいて来た。

私は幼馴染みつていう特權があるから、隣にいるけど、もし無か
つたら…。

まだ、いつも「いややつて悪い方に考える…。

和磨は私の事をどう思つてるんだろう…。

嫌いではないと思う。うん、それだけは間違いないけど……不

安だ……。

こつとも隣にいるから、もしかしたら只の幼馴染みって思つてゐるかもしねない……。

駄目だな、私……。

試合では何時も強気なのに、和磨の事になるとすぐ弱気になる。

「はあ、変われるかな……。ううん、変えなこと駄目ッ！」このGWで、一歩を踏み出せないことッ！」

私は一度頬をパンと叩いて、時計を見た。どうやら、20分ぐらい考えていたらしく。

「早く行けッ！」

私は決意と共に、皆がいる、和磨の家へと向かつた。

第27話：勉強会

想い…（後書き）

これからも頑張ります！！

第28話・お兄ちゃん テラウマ…（前書き）

執筆完了！

これから少し、美香と和磨の恋愛を描いていくつもりです。
それでは第28話じゅうぞ

第28話・お兄ちゃん ナラワマ

見馴れた街並みを一人で歩く。

夕焼けに染まる紅い街

周りから聽こえる喧騒

全ては馴染みある者達。

俺の隣を歩く女の子。

俺はこの子を此処以外で見た事がない。

でも、髪染みある者の一部として、此処にちゃんと存在している。

俺はこの子を知っている。

夢でしか会わない女の子。

昔から、一緒に成長し続ける子。

初めて見た時は中学3年の時だった…

初めは俺も女の子も小さかった。でも、次第に俺も女の子も大きくなり、今の状態まできた…。

この頃、女の子の声が聴こえるようになつてきた…。それに、まるで実際に接してゐるような感覚を感じる…。

でも、やっぱり女の子の顔を思い出せない…。

思い出せない…？

一度も見た事無いのに…？

何処かで見掛けたのか…？

駄目だ、わからない…。

女の子は嬉しそうに微笑みながら、俺の腕に乗つかむよつとして歩いている。

表情は見えるのに顔は見れない、不思議な感覚…。

「お兄ちゃん…」

女の子が可愛い笑顔で喋る。

俺をお兄ちゃんて呼ぶ人なんて今まで知らない…。でも、なんだか心地いい、優しい感じがする…。

「ん?」

俺も自然と笑顔になる。

「お兄ちゃん……きて……。」

「え?」

なんだ? 視界が歪んでいく。

世界が終わり始める…。

いや、夢が終わり始める…。

「お兄ちゃん…起きて……。」

「お兄ちゃん…大好きだよ また今度ね 」

最後に聞いた声は一つだった。

起きてつて事は外界か…未来かな? といつ事はまた今度がある子か… お兄ちゃんねえ…。

俺はなにか引っかかるものを感じながら、現実に戻ってきたのだった……。

「お兄ちゃん……起きて……」

俺が夢から覚め、初めて見たもの、それは……

「お・に・い・ち・ゃ・ん」

俺の上に乗り、俺をお兄ちゃんと呼ぶ、直樹だった……。

「しねしねえ———い！———！」

てきた言葉を繰り返した。

「あ～、兄さんがまたバカな事をやつたんですね？」

『じゅうじゅう』、魅奈ちゃんもわかつてくれたらしく……。

「ねいこいつ事…………一度とやるなよ…………？」

「ひー……は、ふあこいつ…」

『じゅうじゅう』めめた顔をしながら、直樹は返事をした。

わかつたならそれでいいんだが……

「なんで、直樹と魅奈ちゃんが居るんだ？」

俺は起きた時（半分トライウマ）からの疑問を訊いてみた。

「え？ 忘れちやつたの？ 直樹さんとみなちゃんが家で勉強した
いつて言つたからでしょ？」

未来が驚いたように言つててきた。

「あ～、そういうやそうだったな。 確か、魅奈ちゃんが勉強を教えて欲しつつて言つて、直樹が『魅奈が心配だッ！…』って叫び出しだんだったな。 そんで、仕方なく直樹をと……。」

「兄さんが迷惑をかけて、ホントにすみません。」

俺が言い終わると魅奈ちゃんがバツと頭を下げながら謝つてきた。

「気にしなくていいよ シスコンの気持ちよくわかつてゐるつむりだから。」

「シ、シスコンですか… / / / /」

なんだか、魅奈ちゃんが恥ずかしがつてしまつた。

「ま、なんで朝からなのかは聞かない事にして、やつべつとやつますか…。」

俺はそつ言つてから、頂きますと未来が作った朝食を四人で食べた。

Mika Imai

朝、私は起きてから、和磨のお母さんと自分のお母さん、そして私が、朝ご飯を作つた。

「じゃあ美香ちゃん、和磨を起こしてきてくれる?」

朝食を一通り作り終わると、おばさんが私に頼んできた。

「あ、うん、了解です」

私は内心凄く喜びつつ和磨の部屋に向かった。

和磨の部屋へ行くと深呼吸を一つした。

よしへー！

部屋の中に入ると、和磨の匂いが凄くした。

私はこの匂いが凄く好きだ。香水なのか、甘じようでいて、スッとした透き通る匂い…。

「ふふ 可愛い顔で寝てる」

和磨はスースーと寝息をたてながら、眠っていた。

寝返りとかつて打たないのかな？ 寝癖の一ツも無いよ…。

私は少し、自分に絶望しつつ、和磨を起こす事にした…。

「か～ずま あつさだよ～」

私は和磨の耳元に口を近づけて、そっと囁いた。

「ん、んん～ん？」

和磨は起き上がったけど、まだ寝惚けているらしく、可憐な声を出している。

「ふふふ 朝だよ、和磨」

もう一度、優しく和磨に囁つ。

「美…香? おはよつ。ふみゅ…。」

和磨は朝に弱い、寝起きはいいんだけど、起きてから、思考が働くまでに時間が掛かる。

そのせいだろうか、言葉に感情があまり籠らない声ではなく、まるで小さい子みたいな声をだす。

他の女の子が知らない事、私しか知らない事…。

私は嬉しくなり、自分でもわかるほどに微笑みながら喋るのだった。

昨日の意気込みと共に……

第28話・お兄ちゃん ドラマ…（後書き）

感想や疑問等があつたら教えてください。

感想は作者の自信になり、疑問はもっと作品を楽しく読んで戴けます。

第29話・喋り方 美香（前書き）

作者、けつこう和磨のキャラ気に入っています。

第29話・喋り方 美香

和磨が完全に起きたのは、それから2分ぐらい後の事だった。

「…分からぬ所とかは有るのか……？」

そして、今はテスト勉強中だ。

「分からぬ所か……此処とかかな……？」

私は苦手な数学の分からぬ部分を指しながら言った。

「…ん……？ 其処はけつこいつ難しいからな……。」

そう言いながら、和磨は私の隣まで膝立ちで近づいて來た。

ドキッ

和磨が隣に来て教えてくれる。

「…此処はだな……。…sinを使つて……。」

和磨が丁寧に教えてくれるけど、私は聞いている余裕が無い。

直ぐ隣

肩が触れ合う程に近い距離…。

私はドキドキと騒いでいる胸をギュッと抑えた。

聞こえてないよ……ね。

「……どうした……？……やっぱり分かりにくいか……？」

和磨が心配そうに私を覗き込みながら訊いてきた。

「……顔が紅いぞ……？……大丈夫か……？」

「……う、うん……。大丈夫……だよ……。」

なんとか、声を絞り出した。

「どうしたんだる、和磨……。今までなら向かい側から教えてくれるのに……。そのせいで上手く話せないじゃん……。」

「……少し休憩するか……。……お茶もつてくれるな……。」

そう言って和磨は部屋を出て行った。

「はあ～～～。緊張した～～。……でもけっこひつ嬉しかったな

「うん。」

部屋には私のそんな声が響いた。

ドクンドクン…

まだ言つてる…。

自分から近づいたのは前に比べ、まさかこんなに緊張するなんて

…。

「耐えられる筈が無い。 - - - ?」

俺は自分の声に驚いた。

今まで出した事なによつた感情の籠つた声。

俺にも出せるのか…こんな声が……。

「…ふふ……。…じゅやら凛矢の言つてた通りみたいだな…。
でも、美香の事じゃないと無理みたいだ…。」

俺は昨日、凛矢にテスト勉強を教えていたら、凛矢が訊いてきた。

「なあ、お前つてなんでそんなにクールな声してんの？昔から多少気になつてたんだよ、なんて言つかその…無感情？な声っていうか…。」

「……俺にもわからないな……。……どうしたら直せると思つ……？……実際、無感情で話しているのは本当なんだが……。」

俺がそう言つと凛矢は少し悩んでから、おもむろに顔を近づけて訊いてきた。

「なあ和磨、お前つて好きな人いるか？」

なんでなのか、その時俺は咄嗟に美香の方を見ていた。

「へえ～、やっぱ幼馴染みは恋愛対象になるんだな。俺自身はまだわかんないけど……。明日から一人で勉強するんだろう？」

凛矢は何かを思い付いたらしく、手をポンと叩いてから訊いてきた。

「……ああ、そうだが……。」

「お前はホントに美香が好きか？」

俺が答えると凛矢は改めて訊いてきた。

「……たぶんな……。……いつも気にしてはいるからあまり実感が湧かないけどな……。」

これはホントだ……。いつも美香の事は気にしてた……。

中学の時、女子生徒に告白された時も俺はただ、美香と一緒に居たいから断つた。

友情よりも互いを想つてゐるのに、恋人じゃない。

友達以上恋人未満…。

今の関係がそれだと思つ。

「おーい、和磨聞いてるかー？」

「――!? …あ、ああ……。」

「どうやら、いろいろと考へこんでいたらしい。」

「だからな、勉強を教えたりする時とか『ゴールデンウィークで、出来る限り近づくんだよ…。』

「…は……？」

俺は凛矢の言つてゐる事がよくわからず聞き返してしまった。

「だからな、お前が美香の事好きかどうか曖昧なら試してみな?
俺はした事がないんだが沢口が言つてたから。」

沢口とは同じクラスの金髪のたらし男だ。

「…そつか、それでどうだつたら好きつて事なんだ……?」

俺がそう訊くと凛矢の十八番とも言える見てるだけで安堵するよ

うな優しい微笑みをしながら言つてきた。

「直ぐにわかるが、きっと…。その時、ちゃんと感情の籠つた声が出るはずだ…。それに、俺は今の和磨の喋り方も嫌いじゃないしな」

凛矢はそう言つとテス脱勉強に戻つた。

俺はあまり感情を表さないけど、この時俺は、美香以外に初めて心から微笑んだ。でも、気付かれたくないから、俺は顔を逸らして微笑んでいた。

凛矢が俺を盗み見ながら優しい笑みを浮かべてる事を知らずに…。

第29話・喋り方 美香（後書き）

今回は和磨中心に書いてみました。
次も頑張ります

第30話：電話 頑張ろう…（前書き）

さて、主人公がなかなか出せなかつたんで、次回は少し出してみます。

主人公視点で…。

第30話：電話 頑張る…

俺がお茶を持って部屋に戻つたが、ドアの前で止まってしまった。

「…大丈夫……。ちゃんと直つてゐ……。」

俺はそつとドアを開けて中に入った。

さすがに感情の籠つた声を出してたら、美香が不思議に思つしな
…。この関係をまだ壊したくないし…。

部屋に入ると美香が頭を捻つてうへん、うへんと考え込んでいた。

- M i k a I m a i -

和磨が部屋を出てからすぐ、私はテーブルに突つ伏した。

「はあ～、ゴールテンウイークつて言つても明後日で終わりだし…。
このままじや駄目だな～…。」

私はテーブルに突つ伏しながらそんな事を呟いた。

「でも、なんで急に隣で教えてきたりなんてしたんだ…。 その
せいでまだドキドキ言つてゐ…。」

私はそつ言いながら左胸に手を当てる、ドキンドキンと胸が鳴

り続いているのを感じた。

私は未だにドキドキと言つてゐる心臓を落ち着かせるため、ある人に電話をしてみた。

『もしもし?』

「麻美? 私だけ?...」

『ああ、美香? どうしたの?』

私の親友であるある人、もとい麻美に私は電話をした。

「それがさて、今勉強してるんだけど?...」

私が其処まで言つと麻美は勘づいたらしく、訊いてきた。

『和磨となんかあつたの?』

さすがは親友だけはあるね、麻美さん?。

私は小さく咳払いをしてからさつきまでの事を話した。

『ふうん、それで何でなのか? って事ね?...』

私が全部話すと麻美は私が訊きたい事がわかつたらしく少し悩んでいるようだった。

「そういう事…。 麻美はどう思ひへ？」

私は少し不安になる気持ちを抑えながら麻美に相談した。

『私もあんまりそういうのはわかんないんだけど…。 たぶん、和磨も少なからず意識してるって事じゃないかな?』

「そう、なのかな?」

私は麻美の言葉に顔が緩みそうになるのを必死に誤魔化しながら、出来るだけ平静を装つて呟いた。

『うん 頑張つてね、美香』

「ありがと、 麻美 ちょっと不安だったけど、なんか落ち着いちやつた』

私がそう言つと、階段を上がつてくる音が聞こえた。

「ゴメン、 和磨が来たみたい…。 ありがとね、 麻美 勉強頑張つて』

『うん、 美香もね それじゃ』

麻美の言葉を聞いた私は、そのまま電話を切つた。

ガチャ

私が電話を仕舞つて、急いで勉強をし始めたと同時に和磨が部屋に入ってきた。

「うへん、うへん……。」

私はワザトらしいと自分で思いながらも、考える真似をしていた。

「……勉強頑張つてゐみたいだな……。休憩してよかつたのに……。」

「しまつた！ わついえれば休憩にしてたんだ……。なら、わざわざいつんづん言つて考えた振りする必要ないじやん！」

「あははは……休憩しようか……。」

私はそのまま和磨が持つてきてくれたお茶を一口のんだ。

- Asami Homura -

美香との電話が終わつた私は、ふうと息を吐いた。

「なんとか、誤魔化せたかな」

私は、なんで和磨が美香の隣にくつつくつとして勉強を教えたのか知つてる……。

まつたく、凛矢の奴…。

勉強会の日の夜に凛矢から電話がかかってきた。

「もしもし？ 凛矢？ どうしたの？」

私は凛矢からかかつてきましたとわかると、直ぐに電話に出た。

『うん、それがさ…。 美香って誰か好きな人いるのかな?』

「…………え…？」

私は、凛矢の言葉に一瞬固まってしまった。

え？ どういう事？

「ねえ、どういう、事？」

私は自分が落ち着かせるために、出来るかぎりゆつくりと凛矢に訊いた。

『いや、えっと……その…。』

凛矢が口ゴモつてしまつたせいで、余計に不安になつてしまつた私は、怒鳴るように凛矢に訊いてしまつた。

「どういう事なのかつて訊いてるのッ！」

『「J、Jめん！ 内緒にして欲しいんだけど… 特に和磨と美香には…。』

私の声にビックリしたのか、凛矢は咄嗟に謝つてから話し始めた。

「J、Jめん！ 急に怒鳴つてごめん…。 わかつたけど、一体どうしごう事？」

私が、もう一度訊くと、凛矢は恐る恐ると言つた感じで話し始めた。

『それがさ、今日和磨の好きな人は誰かって聞いたんだよ…。 そしたら、和磨無言で美香の方を見たんだよね…。 それで美香？ つて訊いてみたら、わかんないけどたぶん、みたいな事を言つてたんだ…。』

凛矢の情報は私としても知りたかった情報なので先を促してみる。

「それで？」

『うん、それで、なんか好きなのかはつきりしないみたいだつたら「J、Jれより先は長いため、作者がカットしました。」』

凛矢の話を聞いた私は、凛矢に美香の好きな人を教えてあげる事にした。

「美香の好きな人は和磨だよ…。 でも、和磨には内緒でお願い…。 後、もしかしたらゴールデンウィークの期間中になんとかなるかもしれないから、あまり手を出しちゃ駄目だよ？」

私がそう言つと、凛矢は少し拗ねたような声で言つた。

『それぐらい俺だってわかつてゐよ。両想いなら、たぶんなんにもしなくても良い方に傾くと思つし…。』

凛矢は、ホントに優しいと思つ…。

自分に出来る事があつたらそれを探して、でも必要がなさうなら、実行はしない…。

私はその後も凛矢と長話をしていた。

私も、美香を見習つてもつと頑張ろう

第30話：電話 頑張れ…（後書き）

瑠衣とか百合、夏芽がちょい役になつてあるんでどうとかしたいですね…。

第31話：驚愕 親父（前書き）

親父さん登場です……。

あつち系な話にはならないので、あしからず。
それでは第31話じゅぞ

第31話：驚愕 親父

- R i n y a Y a z i m a -

夜：

俺は今、未来の作つた夕飯を食べている最中だ。

ガツガツガツガツ

まあ、なんだ…。さつきも言った通り、ゴールデンウィークの一日
目の後半なんだが…

ガツガツガツガツ

ふう――、すう―――つ！

ガツガツガツガツ

「もつと静かに食いやがれツ！！」

俺は隣にいる直樹を殴つた。

「ぶふうばばべえば！」

ピュピュピュッ

「飛ばすなツ！ 口の物なくなつてから喋れツ！」

「」のバカ直樹め…

「モグモグモグ……」「クッ……」「キュー」「キュー」「キュー……ふはあ～…
…食つた食つた～、世は満足じや…。」

「どうやら食い終わつてくれたらし～…。つか、世は満足じやつて
何処の人間だお前は…。」

「なあ、なんで未だに此処にいんの？」

「これを言つたのは直樹だ…。」

「なんだ、お前……そんなに殴られたいみたいだな…。」（「」）

「すみませんでした…。調子に乗つてしまつました…。」

「俺が少しニーッ」「コツしただけなのに、どうやら効果は抜群だつたみ
たいだ。」

「さて、飯も喰わせて貰つたしな…。そろそろ帰るぞ、魅奈？」

「あ、うん そうだね、兄さん」

直樹が魅奈ちゃんを呼ぶと、さつきまで未来と話していた魅奈ち
ゃんが返事をした。

なんか、機嫌がいいみたいだな…。

「そんじや、俺達は行くから…………不純異性交遊は駄目だよ、つて
うわ、ゴメ、謝るから、殴らないでっ……」

数分後

「ほんぢにすみませんでじだ……。」

俺は直樹の肅正に成功した。

「じゃ、勉強頑張れよ……。 わかんないところがあつたら教えてやる
から……。」

「ああ、サンキューな……。 んじや、バイビン」

俺が言つと、直樹がまともな事を言つた。
バイビンまではだけど……。

「それでは、やよつなら凜矢さん、未来ちゃん」

「うん、じゃあね、みなちゃん」

「あれ？ 未来ちゃん俺にバイバイは！？」

なんか、自分が挨拶されなかつたのが不服なのか、直樹が未来に
詰め寄つた。

「バイバイ…………魅奈ちゃん」

「うわあああああああん……」

直樹は泣きながら走つて行つてしまつた。

『まあ wwwwww未来に近づいた罰だ

次の日…

「ふあああ～あ…。起きるか…。」

俺は目が覚めたので下に行く事にした。

「…………」

「おはよー、凛兄い 朝ご飯出来るよー

「おはよー、凛矢 後、ただいま」

「よつ、凛矢。久しぶりだな、元気だつたか?」

俺は呆けて固まつてしまつた。

「おい、米粒付いてるぞ…。」

「キャッ…／＼／＼ もつ、あなたつたら…／＼／＼

「な、なんで親父達が帰つてきてんだ? 帰つてくるのは来月じゃなかつたかよ?」

そう、俺の目の前でイチャイチャしていやがるこの一人は俺の親父と母さんだ。

「凛矢の父で夜島 月矢と申します。」

「お父さん、誰と話してゐるの?」

「ん? 読み「ひぬせえ……」すまん……。」

「ホッ! ホッ! では氣を取り直して……。

さつきクソ親父が勝手に言つちましたが、親父は夜島 月矢、母さんは夜島 亜弥と言つんだ……。まあ、見たらわかるが、完璧なバカップルです。

「思つたより仕事の進みが早くてな」 だから、帰つてきた

「どうやら、仕事はしっかりとやつてるみたいだな……。

「なあ、仕事つて何やつてるんだ? 未だに知らないんだが……。」

俺がそう言つと親父は……

「超常現象についての調査etcだ……。」

調査etcって、かなりアバウトじゃね?

「そうね、調査と対処が主な仕事ね……。」

え？ 何？

「一つしかないのにetc? 何、親父照れ笑いしてんの？ 何母さんコイツ～みたいな事してんの？ なんかもう、付いて行けないよ？僕…。」

「いつ帰ってきたんだよ…。」

マジで音とかしなかつたから気付かなかつたよ…。」

仕事の話？ なんかもうビリビリでもいいや

「それより、風呂入るぞ、凛矢…。」

俺の質問はスルーなんですね…。

「まだ朝だぞ…。 しかも、なんで俺まで…。」

俺は嫌そうな顔をしながらそう言った。

「汗かいたんだよ…。 昨日の夜は久しぶりに激しかつたからな

「／＼／＼／＼も、もう～、あなたったら～思い出してやりますよ～」

親父の言葉に母さんが顔を赤らめながらそう言った。

「未来の前でなんの話してやがる……。」

俺は親父の頭を殴った、そりゃもう強く。

「何つて、昨日の夜な…タクシー捕まらなかつたから走つて帰つてきたんだよ…。そりゃもう激しい運動だつた…。」

このクソ親父はこんな事をのたまいやがつた…。

「ま、紛らわしい言ひ方すんじゃねえよーーー。」

「紛らわしい？ 凜矢君は何を思い浮かべたのかにゃ？」

「へへ、このクソ親父はーー！」

「テメエ、マジで殺すーー！」

「それより、早く風呂に行くぞ…。」

ま、またスルーなのですね、もつ泣きたいです…。

俺はそのまま親父に引きずられながら風呂場に向かつた。

風呂に入っていると親父が話しだした。

「俺達が居ない間、未来を守ってくれてありがとうな…。」

「気にしなくていいよ…。 今回は何時まで入れるんだ?」

俺は親父の言葉に返事をしてから親父に訊いた。

「わからんねえ…。 出来る限り居たいとは思つてるんだが、場合によると人の命に関わる仕事だからな…。」

俺はその言葉を聞きながら、身体を洗つている親父の背中を見ていた。

親父はかなりかっこいい。 俺が見てもわかる程にだ…。 そして、親父の背中は昔から好きだった。

「また背中の傷見てんのか?」

「…なんで、わかつたんだ?」

俺は驚いた。 親父は俺に背中を見せて座つているのに…後ろに目もあるのか?

「一緒に風呂に入ると何時も見てるからな…。 何年親やつてると思つてんだ…。」

さすがは親つて事か…。

「この傷は大切な思い出なんだ…。」

親父は急に語り始めた。 でも、茶々を入れるのは気が引けた俺は黙つている事にした。

「昔、大切な人を身体を張つて守つたんだ。 誇れる傷……俺の人に誇れる事はこれぐらいだ……。俺は大切な人を守りきつたんだつてな……。」

はつきり言うと、親父の身体には傷がたくさんある。 小さい物から大きい物まで……でも、その中で一際目立つのが、背中の真ん中にある傷だ……。

「この世界は未だに人が信じられないような事が常に起こっている……。 妖怪……魔物……幽靈……幻獣……神……人に知られていないたくさんの者達がいる……。俺はそいつらと戦ってる……昔からな……。」

俺は親父が何を言つているのか信じられなかつた……。

第31話：
驚愕
親父（後書き）

これはあくまでも恋愛小説です……。

第32話：告白 想い…（前書き）

和磨の恋、後少しでラストです。

第32話：告白 想い

「……どうして……事だよ……親父……。」

「……どうして……事だよ……親父……。」

俺は驚きを隠せずに親父に問いただす。

「この話はここで終了だ 未来と母さんには内緒だ。
ない内に上がれよ?」

そう言つて親父は風呂場から出て行った。

「お、おこー！ 親父！」

俺が呼んでも親父はのぼせるなよ?と言つだけだった。

俺は湯に口まで浸かりながら、やつその話を考えていた。

……嘘か……誠か……

いや、俺にはわかってる。『俺はそいつらと戦つてる。』と言つた親父の背中、それを見たら嘘じやないって事ぐらい、わかる。

でも、何故なのか、いつか訊いてみたいと思える程に、俺は興味がわいた。

いつか、話してくれよ、ちゃんと……

……親父……。

「ゴールデンウイーク一日目の夜、美香は俺の部屋に来てマンガを読んだいた。

「……そろそろ、寝たいんだが……。」

俺は朝とか昼間の事により、多少疲れたのか、今日は何時もより早く眠くなつた。

「え？ ああ、『ゴメン。…………。』

美香はマンガを片付けると、黙りこんでしまつた。

それでも、早く寝たいと思つた俺は布団に入り、目を瞑りながら訊いた。

「……どうした……？」

俺がそう言つと、美香が「うひを振り向いてわざとひっくへ咳払いをしてから話し始めた。

「『ホン……え～っと……そういえば、昔や、よく一緒に布団で寝てたりしてたよね～。懐かしいね～。』

なんとも、まいりなく、そしてわざとひっく語りだした美香はそ

んな事を言ひだした。

わざといつしにも程があるな……。」ひ、田が泳いでるぞ、美香。

「……そうだな……。」

俺は淡白にそう答えて再び田を閉じた。

何分経つたのか、俺の意識は夢の中に旅立ち始めた頃、俺は布団が浮く感覚で再び現実に戻ってきた。

もぞもぞ

誰かが入ってくる感じがして、薄田を開けると、田の前には美香の姿があった。

「……な、なにしてるんだ……！」

俺がそう言いつと、美香は目を開けて微笑んだ。

ドキンッ

俺はその微笑みを見た瞬間に再確認した。

俺は、美香が好きだ。

「……ねえ、一緒に寝ていいかな……？」

美香は伺つよつて俺を見上げながら訊いてきた。

上田遣いは反則的だぞ、美香…。しかも、密着度もかなりだから理性がヤバいと思つた俺は、田を逸らしながら言つた。

「…ああ、いじよ……。それに……いや、なんでもない……。」

俺は美香の目をジツと見つめてみたが、やはり告白する程の勇気はまだ出なかつた。

さつき、サラッと言えればよかつたのに…。いや、そんな言い方じゃ相手に伝わらない…。伝えるなら、ちゃんと目を見て言わなくちゃやな…。

俺がそんな事を考えていると、美香が口を開いた。

「ありがと。でも、やっぱり恥ずかしいね、これは／＼／＼／＼

その時、俺は美香がとても可愛くて、理性も限界で、美香を抱きしめた。

「えつ、ちょ、どうしたの、和磨?／＼／＼／＼

美香は驚きと恥ずかしさから顔を真っ赤にしていた。それが俺には余計に可愛く感じて、言葉を止める事ができなかつた。

少し前まであつた、関係が壊れるかもしれない怖さなんて、すっかりなくなつていた。

いや、壊れる筈ないと思つたから口からこの言葉が出た。

感情の籠つた声と共に…。

「美香、愛してる。」

- M i k a I m a i -

「美香、愛してる。」

和磨の口から紡がれた言葉。

その一言は私を驚愕させることは充分すぎる言葉だった。

初めて聞いた、感情の籠つた和磨の声。それは、とても優しくて、暖かい言葉だった。

「少し、考えさせて…。」

でも、私にはまだ今の関係を変える程の勇気が無かつた。

「」のゴールデンウイーク中に告白するとは決めていた。

でも、和磨が同じ気持ちだったなんて…。

「な…んで…？」

心の中では、和磨に告白して欲しいなんとも思った。今も凄く嬉しいしあせ。でも…

「私、今の関係を壊す勇気が、今無いの……。「メンね、明日まで待つてね……。ちゃんと自分の中で答え出すから……。」

私は、和磨が告白してきてくれるなんて思ってもみなかつた。望んではいたけど、只の妄想でしかなかつたから。

「……わかった……。明日、返事を聞かせてくれ……。」

和磨はそう言って静かに目を閉じた。

「……「メンね、和磨。私も、和磨の事愛してるから……。昔から、ずっと……。」

そう小さく呟いた私は、和磨に寄り添いつぶつよつとして、そのまま目を閉じた。

俺が目を覚ますと、隣では俺に向かって寝てこる美香がいた。

昨日の事が嘘じやないと俺に叫びた。

「ふあ、おはよっ、和磨~。」

どうやら、美香が起きたようだ。寝起きも凄く可愛らしい。抱きしめたい衝動に駆られたが、ぐっと堪えた。

ガチャ

「もう朝よ～って、あれれ……お邪魔しけりたみたいね……」
「くっ…。」「

母さんが入ってきた。なんて間が悪いんだ…。

「ふえ？ わ、おばさん…？」これはそのまま、えっと、つておばさん…。」

テンパっている美香を置いて、母さんは部屋を出て行った。

今日、俺達の関係が変わる……

嗜くも…。

悪くも…。

第32話：告白 想い…（後書き）

あまり、困難とかは書かないつもりです。
あくまでもラブコメなんで。

第33話：変化 日常（前書き）

すみませんm()m

諸事情で更新が遅れてしまいました。

総ユニーク数2万ヒットありがとうございますーーー！

和磨「…ありがとう……。」

これからも頑張ります

第33話：変化　日常

- M i k a I m a i -

今日はちゃんと伝えるんだ…。

自分の気持ちを和磨に…。

「どうしたんだ？ 二人共、黙つて黙々と食べて…。」

私達の様子に気付いたお父さんが私達に話掛けってきた。

「い、いや、な、なんにもな、ないよ？ お父さん…。」

ちょっとじぶんもびひになつちやつたけど…

「やうかそつか、ならいいや ハッハッハ！」

うん、大丈夫でした

和磨を見てみると、黙々と朝ごはんを食べていた。

うーん、気まずいだけ…だよね…。

その後は皆で談笑しつつ朝食を食べた。

「ねえ、和磨。」これから勉強教えてくれない?「

「……『メン』……。……今日は自分でやつてくれ……。」

そう言つと和磨は、一階にスタスターと上がつて行つてしまつた。

「どうかしたの? 朝はあんなに仲睦まじかったのに……。」

私が立ち止まつてみると、おばさんが声を掛けてくれた。

「いえ、なんでもないです……。」

「……もう……。でも、今日の和磨は様子が変だから、何かあつたら相談しなさい。あれでけつこうつ思い込みが激しいから……。」

やうやくおばさんは「う」と微笑んで言つてくれた。

「頑張つて」

「え……。……はい! 頑張ります」

正直、おばさんは知つてゐるのかもと思つたけど、おばさんのその目は子供を心配するお母さんのもので、私は心の不安が休まるのを感じた。

俺は今、テスト勉強をしながら悔やんでいた。

あの時、勢いに任せて言ってしまった言葉…。

『少し考えさせて…。』

俺は一番大切な美香の気持ちを考えてなかつた。

だから、拒絕されたのかもしれない。

「…俺はどうすればいい…。…ビビりたい…。…答えは結局、
今日…か…。」

俺は途方にくれた考えを頭を振つて振り払つた。

後悔してもしようがない…か。

「…はあ…」

俺は溜め息をはくと、目の前の問題集に集中した。

-Rinya Yazima-

俺は今勉強中なんだ…。

因みにバイトはテスト終了まで無し

でも勉強つてのは辛いな…。

嫌いと書つよりめんどくさいつて事か…。

「凛兄い、此處つてどうやるのかな？」

そんな事を考へていると未来が話し掛けってきた。

「ああ、見てやるよ」「俺が見てやるぜ、未来!」…

俺が返事をしてやるのとしたら親父が向かい側からバツと教科書を奪い取りながら叫んだ。

「おい、大丈夫なのか？ 高校で習つた問題なんて憶えてないだろ？」

俺がそう言つと親父は教科書を見ながら言つた。

「ああ？ 俺はお前と同じ歳の時に学年で17位だったんだ…。出来るつての…。」

……はあ？

今やらつとすげえ事言つてなかつたか？

学年で17位？

俺でも最高で36位だったのにか？

なんか、すっげー負けた気分になるな。

今回からマジで頑張るか…。

「…ほう、そういう事か…。未来、此処はだな……。

親父、ホントに教えてるし…。

それから数時間が過ぎて昼になつた。

「凛矢、お前好きな人いるか?」

「ぶふ「うううツ！」

「汚いぞ、凛矢。」

俺は親父の突拍子の無い言葉に思わず吹き出してしまつた。

「な、何言つてんだ、急に！？」

「なんだ、いるのか？」

「え！？ そうなの、凛兄い！？」

「え？ そうなの、凛矢？」

親父の言葉に未来と母さんが食いついてしまった。

「いや、違うからな、未来！？ 親父も変な事口走るな！ それに母さんもノリで口を挟まない！」

俺がそう怒ると親父が…

「え～、嘘つか～いるくせに～。」

「私は全然氣にしてない…よ？」

「うえ～ん、凛矢が虐めるよ～、月矢～。」

「お～、よしよし。 テメ、凛矢！ 人の奥さんを泣かせてんじゃねえ！」

バコッ

音がした。

勿論俺が親父を全力で殴つた音だ…。

まったく、親父は頭いいくせにバカだからな…。（やつせまで、頭もバカと思つてた）

俺はふと隣を見た。

右隣には未来、そして左隣には誰もいない、筈なんだ…。

でも、左隣には椅子がある。 プーさんの描かれたクッショーンの付いた椅子。

昔からあつた気がする。

父さんの席は斜め前…俺と誰もいない席の間に位置する。

なんなんだこの感覚、もどかしい、気持ち悪くなる…。

何かを忘れてる気がする。

わざわざまで楽しく話していたのに、今では嘘のよつに気分が悪くて、寒氣がする。

「…凛矢、大丈夫か？」

「凛矢、どうかしたの？」

「凛兄い？」

親父と母さんが俺を心配して声を掛けてくれた。

未来はいつの間にか強く握られた右手に手を添えてくれていた。

なんだか、凄くやすらぐ…。

気持ち悪いのも寒氣もなくなってくれた。

その時は氣のせいだと思った。

また、ほんの少し、日常が変わった事を…。

第33話：変化 日常（後書き）

来週ももしかしたら、更新が遅れるかもしれません、"もしかしたら"ですが…。
なるべく頑張りますので、応援よろしくお願いします。

第34話：返事 優しき夜…（前書き）

今回ばかりは少しうなづかしくなってしまいました、すみません。

第34話：返事 優しき夜

- Kazuma Hashimoto -

「ねえ、後で部屋に来て……」

「……ああ……」

そう言つて美香は俺の部屋を出て行つた。

今は夜、両親はさつきまでかなり飲んでたために、今は寝てしまつている。

とうとう来た……。

今日は朝に喋つた以外、美香と喋つたのはさつきが初めてた。

昼飯も夕飯もましてや勉強に関しても美香とは喋れなかつた。

いや、美香自身も喋らうとしたなかつた。

拒絶の言葉を詰つんだらうな……。

『いめんなさい……』

『な……んで……』

『私、好きな人がいるんだ……』

『え、それって、まさか……』

『うん、私の彼氏の直樹』

『よひ、和磨、よひしへー』

『…………あひ得ん…………』

俺は頭をぶんぶんと振って『最悪』な考えを振り払った。

「……もうやる、行くか……」

そう呟いて、俺は美香の使っている部屋に向かった。

コンコン

「開いてるよ

俺は美香の声を聞くと、一度深呼吸してから部屋に入った。

「……話しついで、昨日の……だる……？」

何を言われるんだるい。。

断りれるんだろうな、はあ……。

「うん、返事……するね……。」

美香はやうやく深呼吸を一回して言った。

「……すう……はあ……。……いいよ……。」

「……ふあ……？」

俺は美香が何に対しても言つたのか柄にもなく、間抜けな声を出してしまつた。

「…………いいよつじびつこう事だ……？」

なんとか落ち着かせて美香に聞くと、美香が少し顔を赤らめながら言つた。

「何つて、昨日の返事だよ……／＼／＼／＼

昨日の返事？　いいよ？

「……それつてつまり、恋人になつてくれるつて……事か……？」

俺がそう言つと美香は少しうれながら…

「だから、さつきから言つてるじやんか／＼／＼／＼

と、顔が紅いままで言つた。

正直言つてかなり可憐い。でも、俺には聞かないといけない事があるからな……。

「……んで……。拒絶してたんじゃ……」

俺は出来る限り平静を装つたが、どもつてしまつた。

「拒絶!? 私が? しないよ、そんな事。」

「……だが、今日話しかけて来なかつたら……? それに、昨日も「ゴメンつて……。」

俺はどうしても信じられず、また聞き返してしまつた。

「昨日のゴメンは今は返事出せないのゴメン。話しかけなかつたのは和磨が話しかけてほしくないような雰囲気してたから。わかつた?」

美香は説明してくれたが、まだ信じられない俺。

「ふつ、これでも信じられない?」

「……だ、だが……「チユウ」……!」

「いや…………信じる……。」

俺がまだ何か言おうとしたところを、美香は口を封じるよう口元に手を付けをしてきた。

俺はそう答えていた。

美香の瞳を見たら……

美香のキスから…

美香の笑顔から…

美香の言葉から…

想いがありあつと云わってきたから…。

「私も愛してるから、昔から…たぶん小学生の時から好きだった。これからは、もつと近くでもつとたくわん一緒にいれる…よね?」

美香はそう言つて上田遣いで顔を覗き込んできた。

「ああ、愛してる、美香。今まで、そしてこれからも。」

そう言つて互いに見つめあつた俺達はじゅうからともなく、口付けをした。

「和…磨…ふあ…。 大…ふ…め…あう…。」

俺は美香のその艶つぽく赤らめた顔を見て、歯止めが利かなくなつてしまつた。

「…ふあ…ん…和…磨あ…。」

俺は美香と抱き合ひながら、同じベッドで共に過ごした。

また、変わつていく日常…

変化は何時も訪れる…

叶った恋、届いた想い…

夜は優しく包み込んだ…。

第34話：返事 優しき夜…（後書き）

そろそろ和磨の恋編は終わります。
もし、感想や要望、疑問があつたら送つてください。
では次回

第35話：次の日 ハハハ（前書き）

すみません更新したつもりでしたが、出来てませんでした……お詫び迷惑お掛けしました。

第35話：次の日 ハハハ…

-Rinya Yazima -

一夜が明け、長かつたゴールデンウィークも最終日になつた。

「さて、明日になつたらまた仕事だ……寂しいな～」

家族全員（計四人）で食卓を囲んで朝食を食べていると、親父が本当に寂しそうな顔を未来に見せながら呟いた。

「なんだよ、今回も早いんだな？ もう少し居てもいいじゃん…」

正直本当にそう思った。

親父達が帰つて来ても、大体一週間ぐらいしか居られない。

俺がそういう気持ちで言つたのにも関わらず…

「なんですか～？ 凜矢きゅんはさみちいでちゅか～？ そんな哀れな凛矢きゅんの為に仕方なくもう一人ちょあああッ！？」

俺は手近にあつたフォークを投げた…全力で…。

「あつぶねえだろが凛矢～！ 刺さつたうどつす～」「あなたッ！」
「はい…」

親父の叫びを母さんが一言で黙らせた。

やつぱ母さんの方が強いらしい…。

「 もういい、何処にでも早く行け…」

俺は不機嫌な顔付きでやつぱと明日に迫ったテスト勉強をしご自分の部屋に向かった。

- Getuya Yanim -

「 もう… からかい過ぎですよ、あなた?」

凛矢がリビングから出て行つた後、未来も勉強すると書いて出ていき、結果夫婦二人きりになつた。

「 まあ、いいんぢやないか? アイツも冗談が通じる奴だし、今回帰つて来たのはちゃんと理由あるしな」

俺の言葉に亜弥は少しつつ向きつつ言つた。

「 今の所は大丈夫みたいね。 去年の事もまだしつかりとは思い出してないからいいけど……」

俺は亜弥を抱きしめ、そつと呟いた。

「凛矢は強いよ。 なんたつて父親が俺なんだからな 」

それを聞くと亜弥は少し頬を赤らめながら満面の笑みで微笑んでくれた。

「うん 」

俺は亜弥の頭を撫でながら天井を眺めた。

大丈夫、なんたつて父親が俺なんだから……か。

神がいるなら、助けて欲しいものだ……。

俺は天井を見ながらそんな事を考えていた。

ゴメンな……凛矢……。

- M i k a I m a i -

やつと……『届いたんだ』。

和磨から言ってくれた事が凄く嬉しかった……。

和磨も私を想ってくれてたんだって…

そう思つと悶えてしまって、もうなるほど嬉しい…。

私は和磨の寝顔を見ながらそんな事を考えていたが、不意に衝動に駆られて頬にキスをした。

チユツ

「…んにゅ……」

和磨のその反応が楽しくて、かれこれ十回ぐらには頬にキスしている。

和磨は寝てる時だけは、かなり無防備で小さな子供みたいになる。

「お~い、和磨？ 朝だよー？」

そう言つながら私が和磨の体を揺すつていると寝惚け眼の和磨がムクッと上半身を起こした。

「おはよう……ぐう…」

でも、結局寝るんだよね…。

「おーい、早く起きないとキスしちゃうよー?」

私がそう言つた瞬間に和磨は…

「…………おはよー、美香」

バチッと音しそうなぐらじに田を見開き、ババッとベッドから立ち上がった。

そんなにキスされたくなかったのかな？ なんかショック……。

「…………歯…………磨いてないからだ…………。 そんなに落ち込むな…………。」

和磨は私に背を向けながらTシャツを着ている最中だった。

……此処で着替えないでよー 恥ずかしいじゃん！

でも、私は言葉には出さない。

和磨が今、冷静を装おうと必死に為りすぎて、私の前で着替えてるなんて気付いてないだろうから……。

照れてる和磨も可愛い～な～

「…………それはあんまり、男に対する褒め言葉じゃないな…………」

「…………ははは……、「メンね……」

なんで昨日までわからなかつたくせに、分かるよつになつたりやつ

たんだる……。

でも、凄く嬉しいな。

和磨と心が通じてる証拠だね、きっと。

でも、和磨が居る所では、悪い考えはよそいと思った私の口に
た。

「……賢明だな……」

第35話：次の日 ハハハ（後書き）

今回も少し少なかつたです。
和磨の恋編終了しました。
ありがとうございます！

第36話・生徒 総会 会長…（前書き）

新キャラ?が登場です。

未だに、ゴールデンウィーク終わった直後つていつたい…。

第36話・生徒 総会 会長…

-Rinya Yazima-

「ゴールデンウイークから数日が経ち、今日はテスト最終日だ。

ゴールデンウイークの猛烈な勉強？ のお陰か、なかなかの手応えを感じた今回の中間テスト。

皆もどりやらい、結構な手応えがあるらしい。和磨に百合、そして瑠衣はトップ３を何時も争っている程の実力らしく、互いに火花を散させていた。

麻美や美香は50番以内にはいるし、俺も一応は全教科平均点は超す。

叶や未来、魅奈ちゃんの一年トリオもかなりの手応えがあるようで何よりだ。

うん、父さんは嬉しいよ……。

「何言つてんのよ、アンタは…」

俺の隣に居る麻美が、久しぶりに俺のプライバシーを覗き見てツツ「//」を入れる。

……まあ、突っ込んでくれると思ったからわざと考えたんだけど……。

そして今は生徒総会の為に、体育館に来て、座っている所だ。

因みに言つておくと、直樹は悲鳴を上げていた……テストに関して……。

俺はテストが終わった瞬間、皆が『終わったー！』や『か・い・ほ・お・お・お・お・お・一』や、『我、此処に帰還せり……』等の言葉をそれぞれに出している中で、一人だけ『……寒い……寒気がする……絶対に頭が痛くなるような、悪い事が起ころうの前兆だ……』と、青ざめた顔で呟いていたんだ。

それにも関わらず、サボと言つ名の逃避行に旅立とうとした瞬間、『アンタもちゃんと行く……』と麻美に強引に連れて来られてしまつたのだった。

「……されでは、今学期初になる……生徒総会を始めます……」

とりとめのない馬鹿な考えをしていると、何時もながらに暗い声で話し出す生徒会副会長さんが司会を始めた。

「……されでは……先ず校長からの話しがどうぞ……」

さう副会長が言つと、校長が壇上に上がり、無駄に長い話をし

始めた。

俺は、自らの意識を手放し、夢の世界に旅立つた。

何分経つただろうか、俺は未だに夢の世界を満喫していた。

…………！？

しかし、突如としてまた寒気が襲つた。

まさか、この寒気の原因って……

その時、無情にも呼ばれた名に、まだ何も起こっていないのに頭が痛くなつた。

「……それでは次に、生徒会長からのお話しです……」

その副会長さんの言葉と共に、壇上に上がつたのは、結構なイケメンであり、四騎士の一人にして、唯一の三年の奴だつた。

「やあやあやあ、諸君！ 私こそがムスカ大_S「ゴホン！」だ！
ハハハ、人がゴ_M「ゴホン！」のようだ！」

たつた一言を見ただけでも、アイツがかなりの変人で、副会長が暗くなる理由がありありと分かる。

しかも、何故かアイツは一年の時から会長を務め、これで3連覇を果たしている。

「さて、諸君！ 今日は君たちに朗報があるぞ！ それは……期末テストがなくなつた事だ！！」

「…………」

今、体育館を支配しているのは呆気に取られた皆の沈黙であった。

「以前、私は校長室へ向かい校長を恐く「会長！」……もとい、脅す「会長！」……もとい、説得をした！」

アイツが会長としてかなり危ない発言をした瞬間に、声で被せる……いわゆる『バキューン！』だ。副会長が可哀想で仕方ない。

「それは以前にさかのぼる……」

その副会長の気苦労を知らないであろう奴は、話をどんどんと進めて行く。

「この学園の10人にアンケートを取ったところ、一学期末のテストは必要ないと意見が多くつた！」

いや、10人ってかなり少ないだろ……。しかも、意見があつたからつて流石に期末テストを無くすなんて……。

「実際、私も期末なんてめんどくさ「アホン！」……もとい、疑問に思っていた。それを校長に訊いてところ、「い、いや、だが、しかしだね……」となかなか答えてくれない。だから僕は、一枚の写

真を見せて、校長を配く「ゴホン…」…もとこ、説得することに成功した！」

「イツは絶対に生徒会長にしてはいけなかつたんぢや？ と、かなり疑問を覚え、俺は眉間を抑えながら、副会長さんを見た。

そこには、俺と同じように眉間を押さえている副会長さんがいた。

きっと、俺よりも関わりを持っている副会長さんは俺の数倍は辛いんだろうと改めて思った。

「そして、この一学期に期末はなくなつた！」

ざわざわ…

やつと話しが終わつたのか、まだざわめきが終わらないのに、会長は礼をした後、壇上から降りようとした。が、何を思ったかまた戻ってきた。

「おお、また寒気が…！」

「やつやつ、忘れてたよ！ 2・A、夜島 凜矢、橋本 和磨、姫富 直樹、以下の者は放課後、オカルト研究部まで来てくれ！ それじゃ！」

やつと奴は壇上を後にした。

はあ〜、嫌な予感的中＆マジで頭イテエ…。

俺達名前を呼ばれた3人は、全員眉間に押さえて呆れていた。

第36話・生徒 総会 会長…（後書き）

彼は生徒会長、名前はまだ無い。

今のところ、重要な人物になるかわ不明です。

第37話：平穩親友（前書き）

すみませんm()m
更新が滞りました。
反省はしています。
まあ、生暖かい目で見守ってください。

第37話：平 穏 親友

今日と並ひ田をこれまで恵々しいと思つた事はない。

それもこれも、全てはあの生徒会長、じんれい神零けいり健吾のせいに他ならない。

「しかし、急に呼び出しだもんな、しかもオ力研」

直樹が、なんとも呑気に手を頭の後ろで組みながらなんとも面白そうに言つた。

今は、オ力研の部室までの廊下を和磨と直樹と俺の三人で歩いている最中だ。

因みに、分かると思うが、オ力研とはオカルト研究部の略だ。

「でも、なんで俺達なんだろうな？」

俺は、隣で一緒に歩いている和磨に訊いてみた。

「… もう、俺にも分からん……が、俺達の共通点は同じクラス、四騎士とか言う称号?、後、部活に入っていない……ぐらいだろ…」

どうやら、和磨もわからなかつたらしく、アゴに手を当てながら、

思案顔で答えた。

「あれ？ 彼女いないも共通点じやね？」

直樹が下らない事を宣つたせいで、和磨が気まずそりそりとぼを向いた。

中間テストの初日の放課後、和磨と美香が瑠衣や百合、夏芽に一年トリオ等、仲が良い連中を集めて報告してくれた。

「…一昨日から、俺達付き合いつ事になつた」

俺と麻美は、前日に和磨達に訊いていたから、驚きはなかつた。しかも、女性陣も驚きは無く、安堵や喜びの声を美香にかけていた。

「はあ！？ 和磨が俺達の毒神同盟（独身同盟）を裏切つただと…？」

「はあ～…」

またこいつは訳の分からん事を。

「んな、同盟に入つてた記憶は俺には無いんだが…和磨は？」

俺は和磨に向かつて訊いてみた。

「…入つている訳がないだろ？…」

「だよね…」

和磨も入つていないうちで安心した。

「くそーーッ！ 僕にもラブライブコメコメの夢があるのーーーッ！」

「だまりなさい！」

ボロッ

直樹がわーわーと叫び始めるが、麻美が本当に煩うつに殴つてから、また女性陣の元に戻つて行った。

俺は、何も言わずに直樹の肩に手を置いてやつた。

「べす……お前の同情なんて要らないやい……うそ～ん…」

「と、言つ事があつてまだ根にもつてると

「凛矢は仲間だよな！？ なー！」

直樹は俺に詰め寄るように顔を近づけながら呟ぶつけてきた。

「まあ、今はな…」

「…お、おこ、凛矢……お前まで…」

俺が直樹の言葉に同意してやるなんて思ってなかつたのか、和磨が何時ものクールさを無くして、明らかに動搖した顔になつた。

「だつてよー……俺だつて悔しいんだよ」

「…こ、いや、その気持ちも分かるが…」

俺が拗ねるように呟つと、和磨はまだ動搖した顔でじびりもじびりに喋つた。

セヒ、そろそろ虚めるのは止めてあげるかな。

俺達三人は笑いながら、楽しく廊下を歩いていた。

いつこのつて、かつこうぬうじにな、青春つて感じがして…。

俺は嬉しさで緩む顔を少し隠しながら、他愛ない話をしていた。

「さて、着いたつと」

今、俺達の目の前には『オカルト研究部』と書かれたドアがある。

「なんてゆーか、開けるのに戸惑うな…」

流石に、バカの直樹でも気が引けるらしい。

何故なら、そのドアには『待っていたよ… 三人共…』と大きく書かれた紙が張つてあつたからだ。

「 「 「はあ…」 」 」

俺達三人は、溜め息をハモらせた後、ゆっくりとドアを開いた。

パンッ！パンッ！

「やあやあ、待っていたよ！ 諸君！」

俺達がドアを開くと、其処にはクラッカーを持った奴と副会長さんが居た。

第37話：平穩親友（後書き）

今回も少し少なかつたですね。
まあ、気にしません！

第38話：昔話 オカ研（前書き）

この頃暑すぎます（^ー^；）

作者もこの暑さのせいか、悪友と2日間に一回位しか部活に行かなくなりてしまいました。。

去年の一の舞です（+○+）

第38話：昔話 オ力研

「あれ、他の部員は？普通なら活動時間だろ？」

俺は部室に入つてすぐ、クラッカーを持つている一人には敢えてツツコミを入れずに大きめな部室の割に、一人しかいない事が気になり、訊いてみた。

「部員は我々で全員だよ！」

俺が訊いた事に、会長はまるで宣言するように、高らかと人差し指を突き出して言いはなつた。

うん、指を突き出す意味がわからん。

「…まあ、こんな部屋では…な…」

和磨が周りを眺めながら、溜め息混じりにそつと呟つた。

オ力研の部室は、それはもう怪しげな黒いカーテンに、如何にも本が所狭しと積み重なり、そして、部屋の明かりは蠅燭アブレットと、怪しきるにも程がある。

こんな怪しきる部屋、入つた瞬間に逃げ出すわッ。

「いや～、雰囲気を追求し過ぎてしまつてね～！」

「…一応、止めたんですが…」

会長はいや～と頭を書きながら照れ笑いをし、副会長さんは苦笑していた。

しかし、どんな追求の仕方をしたら、此処まで怪しげになるんだ？　もう、そこいら辺にある占い屋なんて目じやない処か、黒魔術の集会場と間違える位だ……いや、見た事ないけど…。

「それで？　俺達に何の用なんだ？」

俺は、この部屋に入つてから、何回吐いたか分からぬ溜め息を吐きながら、俺は当初の目的を訊ねた。

「それはだね……まあ、先ずはこれを見てくれ！」

会長がそう言つとい、副会長が黒い一冊の本を持ってきた。

「いや～！　僕も調べていてとても驚いたんだよ…！」

そう言つた会長から渡された本、その表紙には『オカルト研究部～同じ穴のむじな達～』と書かれていた。

はつきり言つていいか……何このネーミングッ… 中を見たら、どうやらメンバーの紹介が載つてゐる本らしいけど……ネーミングが

絶対におかしい！

だが俺は、それをツッコむのを止めた。

「ネーミングがおかしいだろ！？ どんなホラー映画のタイトルだ
これは！？」

と、俺がツッコミたかった言葉の通りに直樹がツッコミを入れた
が…。

「何を言つてるんだい？ 中を見ただろ？ それはメンバー紹介の
本さ。決してホラーなんかでは無いよ？」

そう、コイツにまともにツッコミを入れると正論で返される。

俺も初めて会つた時に嫌と言つほど学んだが、バカのせいかもしれ
とも意地か、直樹だけはめげずにツッコミ続けている。

「……」

だが、いつも完敗で、直樹が何も言えなくなってしまう。

「？まあいいや！ それでだね、君たちに見てもういたいのは創
立メンバーのページを開いてみてくれ」

会長は、直樹のだんまりを疑問に思つたようだが、そのまま話し
を進めた。

えーっと…創立メンバー、創立メンバー…。

「……おお、あつたあつた……って……え……？」

「そりゃ！ それを君たちに見せたかったんだよー。」

其処には、初代メンバーの簡単な紹介と集合写真が載っていた。

副部長 夜島 月矢

(やじま げつや)

紹介 貧乏人で不運でモテモテな羨ましいのか嘆かわしいのか分からない奴

そして、親父の名前を見つけた。

ま…さか…親父が同じ学校に居たなんて…しかも、こんなヘンテコな部活の創立メンバーって…。

「どうだい！？ 驚いたろ！？ これを初めて見た時はまさかと思つたけどね！」

俺達が言葉を失つていると、まるで勝ち誇つたかのように、得意気に会長が話した。

「…しかし、驚いたな……凛矢の親父さんのこともうだが……この写真も驚いた…銃や刀を持つてゐるんだからな…」

俺もその写真を見た瞬間、かなり驚いた。

今では……と言つより、昔から刀とかつて持つてると犯罪じゃないの？あれ、昔は良かつたんだっけ？なんだか分からなくなってきた……。

「……いつのつて銃刀法違反じゃないのか？」

かなり久しぶりな気がする直樹の真面目モード。言つてる事もなかなかに真面目だ。

俺は改めて写真を見る。其処に写つているのはこの学校の制服を着た男女が並んでいる姿だ。こう見れば普通なんだが、何故か銃を持つてる女の子や、刀を持つてる女の子がいる。親父も今はしていない眼帯をしている。かなりの違和感がある、この写真自体に……。

「やつだよ！ 僕も其処が気になつて少し調べてみたんだ！ すると驚くべき事実を発見してしまつたんだよ！」

俺達は息を呑んだ。

「……あの～、お茶とお菓子を持って來たのですが……」

副会長……空氣を読んでください……。

俺達はさつときまで張り詰めていた空氣を一瞬にして脱力させてしまい、そのまま副会長の淹れてくれたお茶を貰つた。

「…すみません、あまりに長い話したくて…」
かあつた方が良いかなって…」

副会長、貴方は多少天然の気質があると思いますよ…。

「それでは改めて教えよう!」この頃のこの学校は、テロリスト研究部と言う名の部活があつたんだ! その部活はテロリストを研究すると言つ活動で、武器の密輸や、学校内での爆破行為…はたまた、学校外では色々な組織と手を組んだりとかなり危険な部活だつたんだ!!」

改めてそれを聞いた俺達には緊張がはしった。

「…だが…そんな部は今は無いが…どうなつたんだ…?」

隣を見ると、和磨は緊張した顔をしながら、何時もの感情の籠らない冷めたような声で訊いた。

「テロ研は潰れた、いや、潰されたのだよ! 何よりもこのオカ研によつて!!」

テロ研…つまりは、テロリスト研究部の略か……しかし、潰した?
? この部活が?

「そう! そして、それを成し遂げたのが、この部の初代メンバー
なんだ!!」

俺の親父や親父の仲間が、その犯罪的部活を潰した?

「で、でも、それと武器持つてるとの関係は？」

俺は驚愕から、少しどもりながら、会長に訊いた。

「つまり、戦ったのだよ！！ オカ研の初代メンバーはこの日本のほとんどに広まっていたと言ひ、テロ研メンバー達とツ…」

しかし、まだ信じられん…。そりや、俺は親父から、妖怪とか、人があり得ないだろって思つよつなもんがこの世には存在するって聞いてたとしても…。

クシユツ

「……」「めんなさい……」眞面目な雰囲気で話してたから、自分も黙つてようと思つて…

副会長、貴方は天然だったんですね…。出来れば、顔を真つ赤にしながら、うつ向かないでください。可愛くて怒るに怒れません。

第38話：昔話 オ力研…（後書き）

もつ口を跨いだから、作者は明日、登校日です。宿題の答えを貰うためだけに行きます。

直「夏はこれからだッ！！」

第39話：入部　名貸し…（前書き）

未だに話し中は五月つてね……。
作者、久しぶりにポケモンに夢中になつてます
なんで、ポケモンは何時も楽しいんだろ?…。

第39話：入部 賛成し…

「さて、そろそろ本題に移るわー。」

今までのシリアス感をぶち壊すような明るい顔で、会長は俺達を見回した。

今までのが本題じゃないのかよ……と、心中でツッコミを入れながら、俺は会長を見た。

「今のが本題じゃないのかよー。」

直樹がこれ見よがしにツッコミを入れるが…

「ハハハハハツ！ 誰もそんな事言つてないじゃないか！ 人の話はちゃんと聞いた方がいいよ？」

ははは…また落ち込んじゃつたよ、直樹。

「…本題と言つのは…なんなんだ？」

和磨が嫌そうな顔して会長に訊いた。

俺もビビせ、下らない事だと確信はしているが、耳を傾けた。

「つむー… そういう事だから、この紙に名前を書いてくれー。」

そう言つて会長が渡してきた紙には『入部届け』と書いてあった。

まで、何がそういう事なんだ？ しかも、何故入部しなきゃなん！

「つ、付いていけない…」

流石の直樹^{バカ}も会長のペースにはあ手にぱらしこ。ぱつそりといた顔でそんな事を呟いていた。

「まあ、君たちも理由が聞きたいと思うのでね！ 聞きたいかい？」

そう言つた会長の顔は、嫌なニヤケ面だった。

絶対に訊いてはいけない……訊く事は敗けを意味する…。

俺の危機回避能力がそう言つてくれる。

「教えてくれ！」

そう言つ出した直樹は完璧な、罵に掛かつた獣だ。

「なら、しつかりと頼んで欲しいね！ お願ひします、会長様ともも言つて貰いたいものだ！！」

会長が勝ち誇った顔で叫んでいる中、俺と和磨は直樹にアイコンタクトで会話を交わし、部室のドアに向かった。

「あいつに間違つたのが間違つたよ…。

「さあ、私に頼んで……え、ちょ、待って？　君たち、何処に行こうとしてるのカナ？」

俺達がドアを開けた時、ちょうど気付いたのか会長がかなり動搖しながら、俺達を呼び止める。

「……けつ
「……ちつ
「……おしい」

「聞こえてるよ！？　悪態つかないでくれるかな！？　おしゃって何よ、おしゃって！」

「…早く理由を言え……そして、何故入部届けを出したかを…」

さつき、おしゃい発言をした和磨がたまに見るイライラした不機嫌な顔（まあ、普通の時の顔とそれほど変化ないんだけど）で会長に振り返りながら訊いた。

「いや、ね？　凛矢きゅんのお父さんがこの部の出身だし、チミ達は部活に入つてないみたいだからね？　この部は見ての通り、二人しかいないから、入部してくれるよね！？」

かうなり、殴りたい衝動に駆られながらも、会長の説明を聞いた俺達は…

「……やだ！」

と、三人でハモりながら嫌そうな顔全開で断つた。

嫌に決まってる……。只でさえバイトもあるし、未来が心配なのに、そんな事に時間を潰したくなんてないっつーに。

「そ、そんな……」れほどまでに頼んでいるのに！ 鬼！ 悪魔！ 鬼
蓄！ ドン！」

な、なんだそりゃ……小学生かコイツは……。

「会長、まだしつかりと頼んではいませんよ……」

今まで静かにお茶を飲んでいた副会長が会長をそつ宥めた。

しかし、この人……なんで落ち着いてお茶を飲んでるんだ？ 今までの俺達のやり取りを見てたのに……この人も何かがズレてるな……。

「三人共！ 頼む！ 名前だけでいいから書いてくれ！ 一人に五枚づつ食券をあげるから！」

会長は顔の前で手を合わせながら、生徒会長とは思えぬ発言をしました。

「のった！」

そして、のせられたバカが一人……。

「副会長……会長を止めた方がいいんじゃない？」

この状況を打破出来るのは、副会長しかいないんです……。

「今はオフですから、副会長としての仕事は無しです……めんどくさい……」「……」

副会長は最後小さい声で呟いたが、バツチリと俺には聞こえた。

副会長…………僕は貴方が何のキャラかわかりません……。

「……でも、まあ止めてあげます。 凜矢さんの頼みですから……。」「…………会長、煩い……」

ゾクッ

さつきまで微笑んでいた副会長から、ヤバいほどの負のオーラが現れた。 しかも、微笑んだままだから余計に怖い……。

「は、はひつ！」

会長はピンチと背筋を伸ばして上擦った返事をした。

よく見ると、俺達皆が、背筋を伸ばして固まっている……会長をも簡単に静かにさせれるなんて……怒らせないよつこじょつ……。

「……で、やつぱり駄目かい？」

さつきの事があつたせいか、さつきよりも小さい声で呟つて訊いてきた。

「……はあ～……わかった……名前を貸してやる……」

「本当かい！？ …… キラキラ……」

和磨が根負けした後、会長は無言で俺の方を見た。

くっ、そんな捨て猫のような目で見るな……。

「ああ、もう！ わかったよ！ だがな、貸すだけだぞ！ 活動には参加しないぞ、忙しいから！」

はあ～、そんな目で見られたら、断つた時に悪者になるだろ？…。

「本当にかい！？ 流石は我が親友の三人だ！ 何時でも、この部室に来てくれて構わない！ 自由に使ってくれ、お菓子もあるからね！」

もひつ……関わりたくない……。

！」

俺達はあれから、入部届けを書き、改めていろいろな説明をしてもらつてから部室を出た。

「もう、夕方だな……」

直樹が外を見ながらそつそつと、俺も窓の外を見た。

綺麗な夕日がその窓から広がっていた。

「…あの部屋は暗かつたからな…気付かなかつた…」

俺達は靴を履き替えて外に出た。

「…？ あれって麻美と美香じゃないか？」

一足先に昇降口を出た直樹が、校門を指しながら言つた。

「まあ、行つてみるか…」

俺はそう呟きながら、もしかしたら麻美が俺を待っていたのかも
と思った。

そして何故か、足が早まり軽い駆け足で、一人の女の子が立つ校
門へと向かった。

第39話：入部　名貸し…（後書き）

そろそろ、夏休みも後半になりますが、宿題が終わらない作者…。
急げすぎですね…（<—>）

第40話：帰路 積極的…（前編）

家族と静岡まで出掛けで来ました。
いや～楽しかった
それでは第40話じつば

第40話：帰路 霧雨氣…

「よつ、麻美。今帰るとこへ。」

俺は校門の所で美香と話をしている麻美を見つけ、駆け寄った。

「えつ？ 凜矢？ けつこう遅かったわね」

遅かつた…か。俺自身、ここまで遅くなるとは思わなかつたよ。

「で、どんな話しだつたの！？ 会長の話しさ

「…美香…訊いても疲れるだけだぞ…」

和磨は美香にそう告げた後、あの訳の分からない出来事のあった校舎に振り返つて溜め息をついた。

「まあ、あの会長だから口クな話しじやなかつたと思つけど…」

「そういうや、二人とも待つててくれたのか！？ 俺をつ…」

今まで静かだと思つたら、このバカは…。

「え、私は和磨の下駄箱に靴があつたから…一緒に帰りつと…」

「私はあくまで美香の付き添い。ついでに凛矢と帰えるつもりだつただけ」

「……なんで……なんで俺だけ誰も待つていってくれないんだっ……」

うわ～んと泣きながら走つて行つてしまつた直樹に軽く罪悪感を感じた。いや、ほんつつのちょっとだけだけどね。

「……まあ、俺達も帰るか？」

「う、うん、そうだね」

和磨に続いて、美香も歩き出し、俺達一人はいつの間にか取り残されていた。

「えーっと……俺達も行きますか」

「え、あ、う、うん、そうだね」

「……」

「……」

この頃、一人きりになんてなつた事が無いせいが、俺達の間には沈黙と言ひ合ひの氣まずい雰囲気が流れている。

近くじゃない距離……。

だからと言つて、決して遠くにいる訳じゃない……。

肩が触れるには遠すぎた……

手が触れるには近すぎた……。

俺達の距離を表しているみたいだった。

和磨が幼馴染みである美香と付き合つようになつて、どんなに小さい時から一緒にでも、異性には変わりないと俺は改めて知る事ができた。

でも、俺にとってはその情報は、あまり嬉しくない情報だった。

今ほどお互いが互いを気にせず、さて気まやへなくなつたの。元々

「…ねえ、話し聞いてた？」

「へ？ 何の事？」

考え事をしていたせいで聞き逃してしまつたらしく。 と気がつくと、麻美が先に沈黙を破ってくれたようだ。

「いや、「めん。 考え事してて……」

「まつたく…。 今からリムレット行かないかって訊いたの」

あれ？ 何時もなら、俺のプライバシーなんて気にする事なく考えている事を知るくせに、今回は何も言つてこないのか……。

麻美も、たぶんこの空気が嫌なんだろうな……。

そう思つと、少しだけさつきよりも気が晴れた気がした。

「そうだな。明日は今まで休んでたバイトを復活するし、マスターに一応言いに行つた方がいいしな。でも、未来が心配だな……」

「まったく……パソコンなんだから……。それじゃ、行こうか、奢りで」

「ああ、って待て。奢るなんて一言も言つてない……」

俺の言葉をスルーするよつ、麻美はびんびんと歩いて行つてしまつた。

「ふう、まあ、奢つてやるか」

そういうと、その緩和した雰囲気がとても嬉しく、幸せな感じがした。

第40話：帰路 雰囲気…（後書き）

友達と8月に入つてからほとんど会っていない作者です。
オリンピック、頑張れ日本！！

第41話・羨望？足踏み…（前編）

来週で夏休みが終わります…。
さうばひと夏のアバンチュール…

第41話・羨望？足踏み…

リムレットに着いた俺と麻美は、窓際の一番奥の席に向かった。

「やあ凛矢くん、麻美ちゃん。久しぶりだね～」

マスターが微笑みながら話しかけてくれた。

「これにちわ、マスター」

「せういえば、明日から復活みたいだね、凛矢くん。よろしく頼むよ?」

マスターは俺の肩に手を置きながら、ハハハッと笑っていた。

「ええ、休んでた分頑張らせて貰います！」

マスターはたぶん人を安心させる力があるんだろう。優しいお父さんって感じがする。

俺達は席に座り、しばらくすると…

「あの、お客様、『注文は？』

ウエイターとして俺達に注文を尋ねに来たのは、叶だった。

「え、あれ、先輩？ それに麻美さん？」

叶は俺達の顔を交互に見つめ、驚いていたようだった。

「あれ？ 叶ちゃん今日シフトだつたんだ？」

そういうや、叶は俺とシフトがズレてたつけ…。しかも、ウェイターはそんなにやつた事ないって言ってたし…うん、俺は運がいいんだな（ポジティブシンキング）。

「珍しいね、ウェイターはそんなにやらないうで言つてたのに」

とか、考えつつ聞いてしまう俺。

「え？ それは…………／＼／＼」

なんで其処で顔を紅くしたのか、詳しく説明して欲しいんだが…。

「凛矢、あんた叶ちゃんに何かしたの？」

そして、何故か麻美咎められている。

俺、何も悪い事していないのに…。

「先輩や未来ちゃんのお陰なんです！…」

急に叶が叫んで驚いた俺は椅子から崩れ落ちそうになつた。

「ビ、ビーブ…意味なんだ？」

驚きのためにバクバクと鳴り続ける心臓は一応無視しつつ、叶の詰め寄るような雰囲気を感じながら訊いてみた。

今の叶の眼には、決心に似たようなものが宿っていた。

「私、暗いから……今までほとんど、親しい人がいなくて……だから、未来ちゃんに話しかけて貰つて凄く嬉しかったんです。そして、先輩に会つて……先輩の周りには明るくて優しい人達ばかりだったから……」

明るい……叶が俺の周りの奴みたいになつたら……困るな……そして殺される……奏さんに……。

まあ、そんな茶々は入れずに、黙つて先を促す。

テーブルの下では、俺の考へている事を見た麻美によつて、足を踏まれているが、黙つて促す。

「だから……私も明るくなろうと思つて……人と接したりするウェイタ一もやるつかなつて……」

叶が言い終わり、ちょっと照れたように笑うと、正直かなり可愛いと思つた。

「そういえば凛矢くん。二人はデートかい？」

「え？」

その瞬間、何故かその場の空気が凍りついた気がした。

「え……そつなんですか……先輩……？」

叶は田を潤せながら、つづいて訊いてきた。

「い、いや、違つよー。ちよつと麻美と帰つてたからだつてー。」

「そんなんに必死に否定しないでよ……もつ……」

あれ？ なんで俺、必死こいて誤解を解こうとしてんだ？

「そり……なんですか……？」

いつの間にか立っていたのか、叶の上田遣いにドギマギマギしてしまつた。

「あ、ああ、ホントだよ……。マスター、変な事を言わないでぐださこよ……」

はあ、なんだか何も頼んでないのに疲れてしまった。

「ははは すまないね、凛矢くん。お詫びに一人にはパフェを『馳走するよ』

『笑顔を見せながら、マスターは叶を呼んだ。

「わっ、頼んだよ叶ちゃん 嘆茶リムレットの看板商品の一ひとつになつてるからね、叶ちゃん特製のパフェは

リムレットでは、パフェが食べれる時と食べれない時がある。

それは、叶が作るパフェは何故か美味しく、他の人が作つても同じ

味に出来ないのだ。結果、叶のシフトの時間＆少しの作り置きしか食べられないのだ。

まあでも、この店自体がなかなかマイナーな店のため、それを食べる来る人も少ないので……。

ああ、勿体無い…。

「先輩、 麻美さん とびっきり美味しい作りますね」

笑顔でキッキンに向かつた叶の背中を微笑ましく見つめていると…。

「…」これは、ヤバいわね…」

と、言つ麻美の呟きが聞こえた。

「ん？ 何がヤバいんだ？」

「え？ う、ううん？ なんでもない、なんでもない…」

麻美は顔の前で手を振りながら、否定していた。

いや、なんでもないって言い方じゃなかつたけどな…。

それから、テストやら友達の話しゃりで、楽しんでいると、叶が

パフューム三つ持つて来た。

あれ？ 三つ？

「私も今日は、もう終わりでいいよってマスターが言つてくれたので……駄目ですか……？」

またもや上田遣い気味に訊かれて、断る事なんてできません。

「うん、一緒に食べよっか、叶ちゃん」

「はい、ありがとうございます」

そう言つて椅子に座つた叶。

「えへっと、なんで俺の隣なんでしょう？」

そう、何故か俺の隣に座つた叶。

可愛い娘が隣に座つたら、まあ、かなり嬉しいんだが……。

テーブルの下で何故か足を踏まれてる俺は、ビクビクしてらいといんだる？

「……麻美さんと、話し易いからでしょ、つか？」

いや、疑問形で言われても困ります……。

それに、また上田遣いでそんな事を言われたら、もう何も言えないです。

「…もう、なんでも良いです…」

なんだかもう、先が思いやられる。

俺は足を踏まれながら、現実逃避してみよつかなと、眞面目に考
えていた。

第41話・羨望？足踏み…（後編）

叶が、かなり積極的です。
次回はどうなるやう…。
作者もわかりません。

第42話：咄嗟の前兆（前書き）

前回は夏休み最後と、一学期始めと書つ事で、休みにさせていただきました。

勝手に休んでしまった事、大変すみませんでした。
総ユニーク数を3万人突破、皆さんのお陰です！
ありがとうございます

これからもよろしくお願いします

第42話：咄嗟前兆

結局、その異様な雰囲気のせいでのあまり味わえずにパフュームを食べ終えてしまった。

「あの～、せ、先輩？」

皆食べ終わって、そろそろ帰ろうとした時、叶が何うよつと聞いてきた。

なんか、上田遣いががベーシック（基本）になつてない？　まあ、身長のせいなんだけれど……。

「どうかした？」

俺がそつ言つと、頬を紅くしながら叶は言つた。

「えつと……」の後、途中まで……一緒に帰りませんか？」

ドキッ

その時、俺の心臓が大きく跳ねた。

「え…あ、ああ…いい…よ…／＼／＼／＼

俺はなんでこんなにドキドキしてるんだ？　うわ～、絶対に顔が紅くなっちゃう…。

俺はビックリ叶から顔を逸らして、言った。

「……いいよ、途中まででいいなり。一緒に帰らう。」

どうにか言葉を絞りだして言ったのはいいが、叶を見れない。顔の紅みを落ち着かせようと心みながら、ふと前を見た。

卷之三

麻美がこつちを見ながら、顔を少し歪めていた。

「どうかしたのか、
麻美！？」

俺は驚き、テーブルから乗り出して顔を近づける勢いで訊くと…

「う、うう煩い！ 真っ赤な顔をこっちに向けるな！」

と言わば、むんずと両手で顔を掴まれたかと思つたら、ぐりんと強制的に叶の方を向かされた。

「ふはぐ、ははひ～（はなせ、麻美～）」

「ふつ…ふふふ…先輩、その顔…」

叶が俺の顔を見ながら、笑っている。
正直、恥ずかしい事この

俺は麻美の手を掴んで、顔から放した。

「ふー、急に曲げやがつて。折れるかと思つたじやねえかー。」

俺は顔が解放された瞬間、そう言いながら麻美を睨んだ。

「煩いな……私は先に帰るから……」

そう言つて立ち上がり、麻美は歩いてリムレットから出て行つていまったく。

「……あれ？ もしかして、払うの結局俺？」

「そ、してやられたー……」

窓から外を見ると、麻美が手を合わせて、何か喋つていた。

「ん？ じちになりました……つて、やつぱり！」

俺はもう数えるのすら止めてしまった溜め息を吐くと、目頭を押さえた。

「あの、先輩？」

叶が心配そうに顔を覗き込んできたので、俺は慌てて叶の方を見た。

「ああ、大丈夫、大丈夫！ んで、何？」

「あぶねえ、あぶねえ……。また顔が紅くなる所だった。

そんな事を考えながら、俺は叶に訊いた。

「先輩、外で待つてください。 着替えてきますから」

そう言つて奥の方に引つ込んでしまつた叶。

なんか、俺独り取り残された感じだな。 麻美は……やつぱりもういないか…。

俺は会計を済ませて、外に出た。

外は紅かつた。

「……夢の中の夕日に近い感じだな。……！？」

くらつ

「なつ……！？」

急に頭がくらつときたかと思つたら体が傾いた。

「……つと、危なかつた…」

咄嗟に壁に手を着いたから良かつたが、いつたい何だつたんだ？ 意識が遠のきかけたせいか、少しほおつとする頭を気遣いながら、軽く頭を左右に振つた。

「先輩？ どうかしました？」

着替え終わった叶が心配そうに寄つてきた。

なんだか、今日は叶を心配させるような事ばかりしてこの気がある……。

「大丈夫だよ わつ、行こうつか 」

わつ言つて俺が歩き出すと、叶も横に並んで歩き出した。

叶はやはり性格もあってか、歩くのがゆっくりとしている。

だから俺はその速さに合わせ、叶が前に出たり、遅れたりしないように気遣つて歩いた。

「先輩、ありがとうございました 」

俺の家から少し歩いた場所、そこに叶や奏さんが住むアパートがあつた。

「いや、どういたしまして そういうえば、奏さんは?」

今日、奏さんがバイトにいなかつたのが気になつた俺は、奏さんが溺愛する叶に訊いてみた。

「お姉ちゃんは大学の宿題に追われちゃつて……」

「あ……そなんだ……」

奏さんなら有り得るな……いや、絶対夏休みの終わる一日前に宿題やる人だな…。

「あの、先輩…」

叶がモジモジとしづらため、奏さんの事に関する思考を止めた。

「あの、えと……また、一緒に帰つてくれますか…？」

ドキッ

その言葉を聞いた瞬間、俺は叶を抱きしめていた。

ぎゅうつ

「せ、先輩！？ ど、どうしたんでもふか！？」

ヤバい…可愛すぎる…。 なんだ所も可愛い…。

「叶が可愛かつたから…ついな…」

叶の体を解放したが、自分自身が顔を真っ赤になってしまったせいで、叶を直視出来ない。

「せ、先輩！ あの、ありがとうございました！！ それでひゃー！」

そう言つと、叶はアパートの中に入つて行つてしまつた。

「最後までかんでたな……でも、嫌われたかもな……はあ、ショック……」

俺はそう真っ赤な空に向かって言葉を発しながら、傷心した心を引きずりながら帰った。

第42話：咄嗟前兆（後書き）

来週からはまた、毎週更新していくつもりです。

第43話：溜め息 摩訶不思議..（前書き）

今日は前書きに書く事がありません（< o >）

第43話：溜め息 摩訶不思議…

「お兄ちやん、待つてたよ～」

俺はまたこの世界に来ていた。

「ああ、ほんにちわ。それより、なんで俺がお兄ちやん？　後、君の名前って？」

俺は、この頃夢の中に馴染み始めたらしく、だいぶ感覚が楽になつてきた。余裕のできた俺は今まで訊けなかつた事を女子に訊いてみた。

「？　お兄ちやんはお兄ちやんだよ？　後、私の名前は…だよ」

女子が名前を言つとした時、強い風が俺達に吹いた。

「え？　聞こえなかつたよ。名前は？」

俺はもう一度彼女に訊いてみるが、女子は一瞬寂しそうな顔をすると、満面の笑みを作つた。

「まあいいじやん、そんなの　いつか分かる時がくるから」

「え、ひみ、ちゅつヒー？」

彼女はさう言つと、俺の腕を掴み、引きずりながら歩いて歩き始めた。

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんはあの子が好きなの?」
彼女はひざを振り向きもせずにしゃべった。

あの子? あの子って誰だ?

「あの子って?」

俺がやつぱりと、彼女は立ち止まつて振り返った。

「分からぬらいい……。でも、お兄ちゃんも悪いんだから……。
俺が悪い? こいつ何の事なんだ? 分からぬ事が多すぎる
ぞ……。

彼女は掴んでいた腕を放し、スタスターと歩き始めた。

「え、ちょっと…? オーイ!?

「もう時間! じゃあね!」

俺が必死で呼んだのに、彼女は振り向きもせずにそのまま行った。

……ひらり、怒りやけたみたいだな……。

また、夢が終わりを告げた。

何時もと違うのは、強制に夢が終わったのと、体がとても重く、

まるで久しぶりに動かすような感覚が残った事だ。

「今は……5時…？ アイシッシュ、やつぱり強制的に夢の中から追い出しあがつたな～…」

ふああ～、と大きな欠伸をしつつ、一階に降りた。

「え！？ 今日はまた珍しく早いね、凛兄い！ 今日は洗濯物は中におした方がいいかな～」

朝から皮肉を言つてくれる愛しいマイシスター。

だがな、未来よ…。 僕は眠いんだ、だからな…

「…………バタツ」

「ふえ！？ 凛兄い！？ ビーツしたの？ ねえ！？」

気付いた時、僕はソファーに寝かされていた。

「あれ？ 僕は？」

「ああ、凛兄い、起きた？ もう、昨日も夜更かしてたんじゃないの？ はい、朝ご飯」

未来はやつらと俺の前に朝ご飯を置いた。

今は6時半か…。何時もの時間だな。

「急に倒れるから、すつじく心配したよ…」

未来が咎めるように言つ様が、可愛くてつい頬が緩んでしまった。

「「めん」「めん…。それじゃ、とつとつと食つちゃつか」

今日もまた、一人の団欒で幕を開けた日常。

家の外に出ると、麻美が玄関の前で待っていた。

「おはよ、早いお出迎え、『苦勞様です…ふあ…』

まだ眠気が抜けないせいで、また欠伸が出てきてしまった。

学校に行ったら、もう一眠りするかな…。

「……おはよ…」

麻美はやつらと、先に歩き出してしまった。

「凛兄い、麻美さんに何かしたの?」

未来が少し怒った口調で言つてきたが、俺は何時もと違つ麻美の態度に気を取られてしまつて、返事すらできなかつた。

「喧嘩したなら、早く仲直りしなよね……」

未来はそう言つと、麻美の所に走つて行つてしまい、俺が一人だけになつた。

はあ、いつたいなんだって言つんだ、一昨日から……。叶には避けられるわ、夢の中の女の子には怒鳴られて、強制的に夢から追い出されるわ、麻美はなんだか何時もと違つてしまつた。

「学校に着いたら、和磨にでも相談してみるかなあ」

じつじよづかと考へながら、一人の登校を行つ羽田になつた。

朝、思つたより早く起きてしまつた私は、そのまま用意を済ませ、何時もよりも早い時間に家を出ることにした。

「あれ？ 珍しいわね、何時もなら時間ぴったりに出るのに

お母さんが私に話しかけてきたけど、私は生返事を返して家を出た。

「こつてきます……」

「氣をつかひね」

私は家から出ると、お向かいにある凛矢の玄関に立つた。

あの時、なんで一緒に帰らなかつたんだろ‥。

一昨日のあの田から、二日間ずっと聞えていた音にまた捕らわれてしまひ。

ダメだな‥、私つて‥‥自分でも思つたび、可愛げは無いし意地つぱりだからな‥‥。

畠の前にあるデアがとても大きくて、重そうな雰囲気を漂わしている。

凛矢と向喋ればいいんだな‥‥。と言つて、顔合せばりこよ。

インターホンに指を向かわせるけど、押す興味がわからない。

「はあ‥‥」

これで何度畠の溜め息だる‥‥もつ幸せも飛びっぱなしですよ‥‥。

「全部凛矢のせいなんだから‥‥」

そんな事を呟いても何も変わらないな‥‥と、再確認をせられてしまつた。

「凛兄いへ、そろそろ出まへ

中から未来ちやんの声が聞こえたと思つと、足音が玄関に近づいてきた。

私は急いでドアの前から離れた。

「おはよ、早速お出迎え、」苦労様です、ふあ……」

まだ眠氣が抜けでないらしい凛矢が、欠伸を出しながら、家から出てくる。

まつたく呑氣を吐いて、誰のせいでも私がこんなに悩んでると思つてるのよ、もつ。

「…………おはよ……」

私はたつた一言を口にして、先に歩き始める事にした。

やつぱつ、なんて声を出していかわかんなじよ。 今も声が掠れそうになつたし……。

まつたく私は可愛げがないよ……。

ホント、意地つ張りだ……。

「はあ……」

第44話：入部 酷い…（前書き）

今回は、少なくてすみません…。
だいぶ、読んでくださる人が増えていて、作者も感激しました。
それでは第44話どうぞ

第44話：入部 酷い…

「学校に着いた俺は早速俺や直樹よりも一足進んでいる和磨に話を伺う事にした」

「…お前は誰に話してる…？」

まあ、学校に着いてもなかなか言い出せば、「いやってギャグを入れてるわけだが…。

「で？ なんで麻美さんが何時もと違うのかと言つて詰だねー…？」

何故か、会長が朝もはよから教室の俺の席に座つて寝ていやがつた。

「なんでお前が此処にいるのかを、さつきから訊いてるんだが？」

俺は一度も今朝の麻美についての質問はしていないのに、この会長は知つてやがる。

「あの、占ひなら私出来ますよ。」

副会長…アナタやっぱズしてると。

「いや～、先週のあの話しの返事を貰おうと思つてね？」

「はつきり言つて、俺はバスだぞ？」

「…俺もだ…」

俺達が断ると、会長は不適な笑みをつくった。

「直樹氏は僕に賛同してくれたがね！」

「…………は？」

会長の一言で俺と和磨の動きが止まった。

「いや～、占いで相手の心の中を覗きまじょつと言つたら興味を持つて、催眠術も学べるって言つたら即入部つてね！」

あの馬鹿変態やつ……完つ全に下心丸見えじゃねえか！

「……直樹が入部した所で……俺達は入部しないぞ……」

「まあ、君達なつづけと連つたからね！ もつ半は打つてあるよ！」

そう言って会長が出したのは、入部届だった。しかも、俺達の名前と印鑑も押されている。

「…………印鑑？」

「なんで印鑑まで押されてんだよ、これー？」

俺が会長から奪い取った入部届にはしっかりと印鑑が押されてい

た。

「ハツハツハ！ 上手いだろ！？ これは僕が作ったのだよ！」

とつとつ犯罪にまで手を染めたのか」口イツは…。

上手こびるか、本物と変わらない出来栄えだし…。

「だが、どれだけ上手い入部届でも、破つてしまえば…！」

「無駄だよ！ 入部届はもう出してしまったからね！ それは下書きさー。」

会長がそう言つた時、俺達は完敗したとはっきりわかった。

「もひ、入部する以外にはないつて事か…」

「まあね！ たまにでいいから部室に来てくればいいよ！ 今朝はそれを伝えに来ただけだけどね！」

「なら、今までのやり取りはなんだつたんだ…」

「いやー、面白かったよ！ それでは諸君、さらばだ！」「

「あの… 麻美さんの事で占いとかして欲しかったら部室まで来てください」

会長はさう言つと副会長を連れて、颯爽と教室から出でていった。

「まるで台風みたいね、会長」

会長達が出ていった後、さつきまで麻美と喋っていた美香が「」つ
ちに来た。

「あ、凛矢、ちょっと来て」

美香は何かを思い出すと、俺を連れて階段の踊り場まで來た。

「どうしたんだ？」

「ねえ凛矢…。 麻美の元気が無い気がするんだけど… なんで…？」

流石さすがに美香もわかつたらしく、俺に訊くが、俺が逆に知りたい。

「凛矢がなんかしちゃったんじゃないの？」

美香も未来と同じ事を言つなんて…。 と言つか、俺が関係して
るのは確定事項なんですね…。

「まあ、凛矢の場合気付かないって事の方が多いからね… 鈍の感だ
から…」

あれ、これつて怒つていいのか？ なんか知らんが絶対にけなさ
れてるのはわかる。 やっぱ怒つてやろ？。

「おい、さつきから…」

「何かは知らないけど、早めに解決しなさいよ！ んじゃ、教室
戻つてるから！」

「鈍感鈍感煩い……つてもういないし……」

なんか、今日に限って女性からの扱い酷くない?

かなりのモヤモヤ感が残ったが、俺は我慢して教室まで歩いくの
だった。

「誰かさんの馬鹿野郎……」

第44話：入部 酷い…（後書き）

なかなか早いもので、書き始めてから半年…応援ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8906d/>

MY LIFE OF SIMPLE

2010年11月9日15時23分発行